第四章　鎌倉求法

蓮長は慣れしみ山を後にして、上總より下總に出て、草より出てゝ草に入る」と歌はれし、屋花に宿る月影も殘る隈なき武藏野にかゝり、帷子の里について、一夜の泊を求めた。然るに賤が伏屋ばかり、三々五々と見ゆれども、宿るべき家もないので、困じ果てゝ居たが、情ある人の惠みて、漸く宿を借り、旅の疲れを慰めた。時に宿の主より鎌倉の有樣を聞き、念佛の盛んなことを知り、然らば、我れも亦念佛の門を叩かんとの心を起し、翌朝急いで、鎌倉に着き、車小路に假りの宿りを定めて、念佛の鼓吹者大阿が法筵に列した。

當時鎌倉は北條泰時執權職にあり、

ことしげき世のならひこそものうけれ
　花のちりなん春もしられず

と詠んだ程、政治に熱心て儉素旌直を以て天下を率ゐ、問注所に鐘を懸けて、訴を聽いたので、政道よく治まり、鎌倉の繁昌は花の匂ふが如く、祭禮は華美を盡し、遊女白拍子群をなして、太平の夢今や圓かであつた。抑〻念佛の一門は美作稻岡の人法然上人「選擇集」を著して、他力往生を勸めしに基き、當時濤永元曆の戰亂に浮世の夢幻の如きを悟り、榮華の賴むに足らざるを眼のあたり眺めた幾多の勇將猛卒をはじめ、老若男女皆此の通俗にして入り易き法門を喜んて、忽ち天下に擴まり、到る處念佛の聲を聽かぬところはなき程であつた。蓮長が鎌倉に入つたのは、法然上人の寂後僅に二十七年を經た時であつたので、一宗益〻熾んにして、鎌倉の巷には念佛の聲が充ち滿ちて居た。蓮長は霧が澤に大阿の說法を聽くと共に、熱心に淨土往生の敎に耳を傾けた。然るに、大阿は病を獲て悶死し、其の苦み世の常に似ず甚しかつたので、蓮長は漸く之れに疑ひを生じ、彼れ等の敎ふる「臨終正念」即ち死に臨んて亂れずてふ敎に達へるを認め、念佛に對する尊敬漸く薄く、更に他宗の碩德を叩いて、大義を明にせんと考へたが、當時の鎌倉佛敎は華美に流れて、精神を失墜し、聽くべき人もなかつた。是に於いて、蓮長思ふやう、かの叡山は傳敎開山の靈地、京洛佛敎の淵源、彼處に參して大義を質さんと。かくて、一先づ故鄕に歸つて、父母の安否を問ひ、

師の許しを得んと、元來し路を磯の松原傳ひに東條に向うた。

第五章　叡山の苦學

蓮長は清澄寺に歸りて、師友の款待を受け、年來の蘊蓄を傾けて、戒體即身成佛義を著はした。是れより彼れは再び鎌倉に出てゝ、舊知を訪うたが、其の時は泰時既に卒して、經時執權職となり、五箇實らず、凶歉二年に及んだので、人心漸く穩ならざる有樣てあつた。蓮長は圖らずも當時鎌倉に滯在して居た叡山の學僧尊海といふ人と識つたので、此に便宜を得て、共に相携へて叡山に登り、愈〻天台の奥旨を究めんと欲した。

抑〻比叡山は京師の鎭護にして、嶽を四明と呼び、山王權現を祀り、傳敎大師開基の靈境である。見渡せば、根本中堂を始めとして、峰や谷間の堂塔伽藍善を盡し美を盡し、林樹蓊鬱として白雲を含み、後ろには湛や滋賀の湖を瞰下し、表には長安洛陽の甍鱗の如く、攝河の青疇夢の如く連つてをる。實に類ひなき盛地てゝ、かの開祖が、此の山を開く時、

阿耨多羅三藐三菩提の佛達
我がたつ杣に冥加あらせ給へ

と禱りし昔も偲ばれて、唐土の天台山もかくやと思はるゝばかりてある。蓮長は心を天台の註疏に潛め、刻苦怠りなかつたので、忽ち學大いに進み、遂に東塔の四順坊と稱する一院の司となつた。當時叡山には三千の學僧があつて、互に蘭菊其の美を競うて居たが、就中、靜明、經海、心賀等の碩學があつたので、蓮長はこれ等の人々と互に切磋琢磨して、益〻深く宗學を修めた。然るに、凡そ物深く究むれば究むる程、疑問の生じ來るを免れない。蓮長の胸中には今や一大疑團が蟠つて來た。

蓮長の疑問を知るには、天台宗の來歷を知らねば分らぬ。この事は上篇に詳しく述べて置いたが、簡單に繰返せば、天台宗は唐土の智者大師法華經に依つて、之を開いたので、彼の地に忽ち傳播し、杜順禪師の開いた華嚴宗と共に、南北相並んて、支那佛敎の精華てあつた。智者大師は絕世の偉人て、學識一代を壓し、法華經の註疏三卷を書いた。即ち文句、玄義、止觀の三種てあつて、之れを

三大部と稱し、天台一家の金科玉條である。而して、此の宗を我が國に傳へたのは前記の傳敎大師である。傳敎大師其の名は最澄、神護慶雲元年に生れ、當時隆盛の南都六宗の學を修め、後入唐して天台の學を承け、歸朝の後、桓武天皇の歸依を得て、叡山に一派を開いた。是れ即ち日本天台である。斯くの如くにして、天台の宗風一時宇內を風靡したが、傳敎と同時代に空海即ち弘法大師出でゝ、又入唐し、密敎を傳へて、高野山を開き、宗運又隆々として、天台と相對した。眞言宗即ち是れてある。然るに後世に及び、此の二宗は互に融和混合の傾きを生じて來た。殊に天台は慈覺大師に至つて、著しく眞言の敎理を採用したので、傳敎の敎旨とは甚だ趣きを異にして來た。（上篇參照）蓮長が疑問を挾んだのは此處てある。蓮長は熱心に當時の慈覺流の天台を研究したが、どうしても、傳敎の天台と一致しない。是に於いてか、疑惑の雲は蓬々として湧いて來た。蓮長は學友尊海に此の疑問を語つて、更に深く研究して居たが、當時の叡山は凡て慈覺流に染んて居たので、蓮長を喜ばぬ者が多かつた。かくて、更に橫川華芳谷淨光院をも棄ね司るに至つたが、是れより折々京師に下つて、書肆天王寺屋に宿りを定め、四方の龍象と交りを結んだ。即ち普門寺の圓爾和尙（聖一國師）、興聖寺の道元和尙等と相往來し、殊に當時唐より來た道隆禪師が泉涌寺に滯在して居たので、蓮長は其の會下に連つて、見性成佛の修行を積んだ。因に道隆禪師は後に鎌倉建長寺の開祖となつた大覺禪師のことである。蓮長は斯くの如く、叡山に天台の奧義を究め、京師に臨濟、曹洞二派の禪を修め、苦學力行、學德日に進んだのてある。

第六章　諸寺歷遊

蓮長が叡山に求道の燈火を掲げてより、滋賀の浦波返り返りて、漣や古き都の山櫻は、十二たび咲いて、十二たび散つた。一念三千の敎理究めざるところなく、一心三觀の月影今や明に心の海に浮ぶに至つたが、勇猛精進の英雄兒は之れを以て滿足しない。彼れは京都に下つて、曹洞、臨濟の門を叩き、道隆禪師の棒喝に參したが、猶ほ滿足しなかつた。更に衣を洛陽の風に拂ひ、北の方逢坂山を越えて、三井寺を訪ねた。

抑〻三井寺は天智天皇第五の皇子大友の殿閣を捨てゝ寺となし、園城寺と稱する名刹て、彌勒菩薩を本尊とし、歴代の學匠甚だ多く、殊に中興の祖智證大師は叡山に學び、又慈覺流の台密調和の意見を抱いた人てある。故に蓮長は深く三井寺の經藏を探り、古記舊錄に天台の本意を尋ねたが、結果は叡山と同一てあつた。而して、其の頃鎌倉から來た學僧に、種々の災異鎌倉に起り、或は白虹日を貫き、或は流星天を蔽ひ、或は黄蝶家に入る等の噂、東海の空唯ならぬ樣を傳へ聞き、此にも眞如の月影曇り果てたれば、青丹よし寧樂の都に佛敎の遺敎を拾はんと、再び逢坂山を越えて、京師に行き、天王寺屋に着いたが、鎌倉に兵亂が起つたといふ噂て、都は流石に平和なれど、噂は翼に翼を生じて飛び行くやうに驚いて之れを聞き糺せば、三浦泰村、秋田義景と權を爭ひ、泰村遂に自害して、一家滅亡に及びたる由、蓮長聞いて深く歎息し、其の夜は天王寺屋に一夜を明かし、朝まだき賀茂の河原の露ふみわけて、大和の國に打向うた。

萬葉詩人に依つて歌はれた寧樂の都は、曾に詩歌藝術の宮苑たるのみならず、又宗敎の淵源、文化の發生地てある。法隆寺金堂の壁畫を撫して、西域美術

の薫りに憧れ、唐韓模樣に希臘美術の餘芳を偲ぶは、藝術家の心てあらう。けふ九重に移されし、古き都の八重櫻、春日の山の陽炎に、嫩草山の菫をなつかしむは、詩人の情てあらう。元興寺、興福寺、東大寺、西大寺、大安寺、藥師寺、法隆寺の七大寺を巡拜して、昔佛敎の興隆せし時代を仰ぎ、古經寶卷を繙いて、天竺唐土の名僧智識の跡を慕ふは、求道者の心てあらう。蓮長今や南都諸大寺の經藏に入りて、眼を古今の典籍に注ぎ、心を三國の經卷に潜めて、佛敎の奥義を探らんとした。飛火野の春空しく學窓に過ぎ、初瀬の櫻徒に觀念の床に散つたが、蓮長は心を動かさず、佛陀の眞意を求めんが爲に、三更の燈火更に光を加へて、螢雪の功を積んだ。

第一篇の上篇に說いたやうに、南都には六派の佛敎が行はれて居た。即ち倶舍、三論、成實、法相、華嚴、律て、之れを南都の六宗と呼ぶのてある。三論宗は高麗の慧灌の傳ふるところて、元興寺之れが本山てある。倶舍宗は玄昉の傳ふるところて、道昭は法相宗を傳へて、興福寺を創め、良辨は、盧山の慧遠に承けて、華嚴宗を東大寺に唱へ、唐僧鑑眞は支那から來朝して、招提寺に據り、戒壇を宮

中に築いて、律宗を擴めた。又かの有名なる法隆寺は三論、成實の學苑であつた。斯くの如くにして、南都の學匠は雲の如く、宗教藝術倶に蔚然として起り、梵唄磬鐘の聲は丘邊の松風に澄み渡つた、嗚呼盛なる哉、南都の佛教。

蓮長は始め、叔山なる學友の紹介に依りて、元興寺に入り、唯心無境の三論と併せて倶舍を修め、續いて興福寺に遊んで法相の玄旨を學び、夫れより、東大寺に住いて、十玄六相三界一心の華嚴の妙趣を悟り、更に成實論を繙き、研鑽怠りなかつた。折しも泉州堺の浦に故郷の人待ち居る由を聞き、南都を出でゝ、和泉の野に憩き、路に江川太郎左衛門吉久の家に一夜の宿りを求め、共に御法を喜びつゝ堺に着いて、鄉人に會ひ、父母の安否を問ひ、老師の恙なきを聞いて、大いに喜び、再び元來し路を南都に還り、更に、東大寺の紹介に依つて、招提寺に入り、此處に律宗を學び、斯くの如くにして、六宗の蘊奥を究めた。

今や蓮長は既に南都の六宗を究め、諸大寺の珍書經卷もあさり盡したので更に新しき教を研究し、知見を開かんとて、住み慣れし寧樂の都を立出でゝ、紀州路へと急いだ。即ちかの有名なる高野山に登つて、眞言密教の奥義を究めんとするのであつた。

さて高野山の來歴を尋ぬるに、弘法大師空海入唐して、密教の玄旨を承け、歸朝の後、時の天皇嵯峨天皇の戒師となり、弘仁七年高野山を開いた。天皇大いに叙感ありて、山を開き、谷を墾かせ給ひ、金堂を中峯に建て、丈六の阿閦佛を安置し、金剛峯寺と號した。山樹碧翠を凝して、迷惑の雲を遮り、山嵐霧を含んで、佛法僧高野に棲む鳥の名、其の鳴聲佛法僧ときこゆと傳ふ。の聲澄みて三國無比の靈場である。蓮長此の山に登り、熱血を灑いて、三密加持、四曼不離の奥旨を探り、雪降り埋むる其の中に、一年の歳月を送つた。金堂の燈火雪中に輝く時、更闌け、人靜まり、滿山の萬籟聲をひそめて、溪聲幽に潺々たるの時、いかに心澄み渡りて、蓮長の眼は古經の上に冴えたであらうか。

叡山、京師、三井、南都、各處の碩學、經藏訪はざるはなく、探らざるはなき程の熱心は、今や又高野の書庫を讀破し了つた。蓮長の苦學精力共に、驚嘆すべきではないか。世或は日蓮を以て、粗暴大言の一壯漢と思うて居るものがある。是れ大いなる誤りてある。日蓮は南船北馬實に二十年の月日を研究誦經に

費し、當時教學の中心地は悉く歴遊研鑽し、常時の名僧高徳は皆之れを訪うて、益を請うたのである。凡そ草木は一朝一夕に成長するものではない。其の亭々たり、森々たり、蓊々として、雲を衝き、長風に鳴るに至るには、幾多の星霜を經なければならぬ。日蓮も亦斯くの如く、彼れが小湊の漁夫の子より起つて、天下に呼號し、一宗を身延に起すに至るまでは、非常なる忍耐と勤勉と、燃ゆるが如き求道の熱誠を以て、屢く東西に馳せ、南北に驅けて席暖まるに暇なき程の苦學を經たのである。凡そ事は無代價では成らぬ、天下を動かさんとするものは、先づ自ら動かなくてはならぬ。英雄は作らるゝに非ず、生まれるものかも知れぬ。併しながら、眞の英雄には自ら努力して英雄となつたものが多い。大器は晩成する。併しながら、自ら作らずば、大器は愚か、小器さへも成らぬ。日蓮が後來驚天動地の大宣言大事業をなしたのは敢て偶然でない。獅兒を搏する者は、搏するだけの用意が出來て居なければならぬ。漫然大言壯語して、豫言者を氣取り、救世主を僭する輩は、日蓮が如何に其の蓮長時代に於いて、努力勉勵したかを想見したならば、恐らく慚死するであらう。「天は自ら

助くるの人を助く」とは人のよくいふことであるが、日蓮は自ら助けた人て、自ら運命を開拓した人である。大言壯語の如きは自ら別である。謂はゆる吹き當つた人と思ふのは大なる間違ひである。

第七章　再び叙山に登る

豪邁不羈の蓮長は、既に倶舍、成實、三論、華嚴、律、天台、眞言のあらゆる奥義を究めたが、猶ほ飽かなかつた。自ら足れりとせなかつた。彼れは更に學ぶべき所を求めたのである。

是に於いて、聞き慣れし溪聲を後にし、佛法僧の鳴く聲も夢ならては再びきかぬ名殘を惜みつゝ、高野の靈山を下り、京都に向ひ、路を河内に求めて、石川郡太子村なる叡福寺に聖徳太子の御廟を拜し（此の頃の高僧多くは此の堂を拜す、當時太子堂の尊敬されしことを知るべし）、一夜の通夜をなして、法樂を捧げた。人も知る如く、聖徳太子は日本佛教の開祖なれば、今や各宗の奥義を究めて、更に釋尊の眞意を探らんとする蓮長は、此の廟に詣でゝ、いかに感慨に堪へ

ぬものがあつたてあらうか。地は幽邃なる淨境、人は古の偉傑、衣の袖をかき合せて、此の一片の赤心をうけ給へと、彼れは礪つたてあらう。斯くて、京都に着き、知り合ひなる書肆天王寺屋淨本が許を尋ね、たえて久しき再會に、南都の繁昌、さては、高野の物語に更けゆく夜をも忘れたのである。

政權鎌倉に移れども、流石に一天萬乘の君の都なれば、春まづ霞む東山、嵐の山の櫻花、折かざしつゝ袖をつらぬる京人の、四條五條の賑ひは、深山幽谷に入界を離れし、蓮長の眼には、幾多の變化を與へ、旅の徒然を慰めたてあらう。併し彼れはどこまでも彼れてある。八宗九宗の奥義は究めても、猶ほ學ぶべきものがある。蓮長は少時清澄寺て、小學を教はつたが、未だ深く儒學を修むる機會がなかつた。然るに、其の頃、京都に名高い儒者があつて、月卿雲客と往來し、仙洞槐門に出入して、書を講じて居た。其の名を大學三郎能本と呼び、淨本と親しかつた。そこて、蓮長は大いに喜んて、早速淨本の紹介に依つて、東寺のほとりに能本を訪うた。導かるゝまゝに、奥へ通つて、面會を遂げたところ、豈圖らんや、大學三郎は蓮長が舊知てあつたのてある。是に於いて、更に舊交を

温め、大いに喜んて、幼語りに覺えず時を移した。

傳說に依れば、此の大學三郎は比企判官能員の末子てあつた。比企能員は、鎌倉二代將軍賴家の頃には、一門榮え、時めいて居たが、腹黑き北條時政に忌まれ、時政は政子と心を合せて、能員を名越の亭に招いて暗殺し、直に兵を出して、一門を亡ぼした。其の時三郎はまだ頑是なき稚兒てあつたが、つながる緣(ゆかり)のことなれば、既に生命を絶たれんとした。此の危急の時に、恰も比企の一族て、出家してゐた伯耆坊といふ僧、之れを不愍に思ひ、三郎を救うたので、三郎は辛くも生命を助つて、當時僅に二歳なる嬰兒は、房州に遠島といふことに定まつた。かくて、東西も知らぬ被褓の中に三郎は鎌倉より房州に渡され、備に配所の潮風に、からき浮世の辛酸の數々を嘗め盡したが、其の頃蓮長が父の次郎重忠も同じ所に配流の身てあつたので、蓮長と三郎とは竹馬の友てあつた。然るに、三郎は其の後、生命の親なる伯耆坊の情に依つて、京都に上り、表面は東寺に入りて、出家したと稱し、實は才學文章人に優れて居たので、儒道に志し、多年研究の功空しからず、才學の聞え全都に藹き、儒を名門に講じて、一代の巨匠と

仰がれて居たのである。

蓮長は善き舊友を得たのて大いに心を強うし、互に行きかひつゝ、彼れは儒を教へ、是れは佛を教へ、互に切磋怠りなかつた。或る時三郎は蓮長に向ひ、貴殿はさほどの才學ありながら、方外出家の身にて了るは惜しい心地がする。若し改めて儒者とならば、世の譽れともなり、功を成すことも多からんと勸めた(小川泰堂の記なり、但し徳川時代の思想を以て、鎌倉時代を考へしものにして、鎌倉時代には、斯る思想なし。佛儒の比較、論にならず)。然るに蓮長はこれを辭謝し、佛教は過去現在未來に亙りて、教を立て、儒教は現在に限りて教を布く。其の向ふところは異なつて居るが、其の目的とするところは、畢竟二にして二にあらず。異道同軌てある。例へば、佛の五戒は不殺生、不偸盗、不邪淫、不妄語、不飲酒の五つてある。夫れ不殺生といふは、生あるものを殺す勿れといふことて、儒教の仁と其の意一てはないか。不偸盗は盗むなかれといふことて、盗まざるは義を守ることてはないか。第三の不邪淫は、道ならぬ女を犯さぬことて、儒にいふ禮を守ることてはないか。第四の不妄語は、他を欺かず、虚

言をいはぬことなれば、儒教の信を守ると同じ事てはないか。第五の酒は本心を失はしむるもので、萬禍の基なれば、佛深く之れを戒め給ふので、儒教の主意と異なつたものてはあるまいと思ふが如何にぞと、滔々と辯じたので、三郎も理ある言葉に感服して、是れより互に胸襟を開き、無二の友となり、三郎は益、蓮長の才學を敬するに至つた。蓮長も亦三郎の指導に依つて、四書五經をはじめとし、諸子百家の書に至るまで、之れを讀破し、佛教の外更に儒にも通ずるに至り、識見は愈、博大を致した。

然るに、求めて止まざる蓮長は、既に佛を修め、儒を學び了つても、猶ほ滿足しなかつた。彼れは更に國風を學ばんとの志を起したのてある。當時京都には定家卿既に卒し、其の子冷泉爲家卿勅命に依つて、續後撰集を撰し、歌名隆々として一世に鳴つて居た。是に於て、蓮長は三郎に紹介を頼んで、冷泉家に贄を執り、敷島の道に志した。傳説に據れば、蓮長は書道に巧みてあつたので、爲家も大いに之れを喜び、屢、歌集、文集の標題を書かしめたといふことてある。斯くの如くにして、蓮長は風雅の道にも暗からぬやうになつたのてある。

凡そ智識を收得するには、虛心と熱誠とに依らなければならぬ。小成に安んじ、小學問に慢心する人は、胸臆既に充塞して、新智識新學問も之れを容るゝに餘地がない。又熱誠なければ、いかに名師碩學あるも、之れに學ばんとする心が起らぬのである。蓮長は後來非常な傲慢な人のやうに見ゆるてあらうが、而も彼れは小心翼々、虛心熱誠の學徒てあつた。彼れは既に儒國二道にも通じたが、更に愛智心は已まなかつた。從つて、機會さへあれば、何人にも敎を請ふことを躊躇しなかつたのてある。由來京都は南都叡山と共に佛敎の淵源である。名僧智識は固より多い。蓮長は既に此れ等の高名の師は悉く其の門を叩き盡したのてあるが、更に餘り名も無き一藝一能の士と雖も、機會さへあれば、之れを訪ふを恥としなかつた。彼れは東寺や仁和寺に入つて、更に小野流、廣澤流の眞言を學んだのてある。加之、遠く難波の四天王寺を尋ねて經藏の舊記を繙くことを忘れなかつた。夫れ斯くの如き虛心と熱心とあらば、凡庸の士と雖も、高材逸足の士となることが敢て難いのてはない。況んや、蓮長の如き棟梁の材に於いてをや。彼が異日大業をなすの基礎は一に此に

存して居たのてある。遠きに行くものは三月糧を集むといふが實に蓮長は三月糧を集むる底の勇猛漢てある。

蓮長は京都の遊學既に思ふ結果を收めたので、再び叡山に登つて、橫川の淨光院に蟄居して、彼の支那天台の開祖智者大師曠世の傑作、摩訶止觀の研究に心を傾けた。斯くて法華の玄旨に參して、思ふやう、法華經は釋尊出世の本懷、一代經典の結經てある。これに本門と迹門とがある。而して其の迹門の法敎は釋尊が、藥王、藥上、觀音等迹化の菩薩に、弘通を托し給うた。抑〻釋尊滅後の一千年を正法の世といひ、佛敎能く行はるゝ時代てある。次の一千年を像法の世といひ、佛敎漸く衰ふる時代てある。其の次は末法萬年の世と稱して、佛敎行はれず、世界は澆季に流れ、骨肉相食む濁世てある。然るに迹門の方は釋尊此れ等の諸菩薩に、正像二千年間に弘通すべしと托し給うたが、本門の方は上行菩薩に命じて、末法五濁の世に弘通せしめ給ふのてある。釋尊の豫言昭々として火よりも明かてある。然るに、迹化の藥王、藥上等の諸菩薩は釋尊の豫言に應じて、既に唐土に於いては、智者大師となつてあらはれ、我が朝に於い

ては、傳教大師となつてあらはれ、倶に法華正法の大旆を掲げ、折伏攝授の法鼓を鳴して、弘通の大命を果し、涅槃の鄉に赴かれた。然るに、今や釋尊滅後、正像の二千年を經て、正に末法の第五百年たり。天台傳教の教も既に荒れて、慈覺の濁流叡山に漲つて居るではないか。今や上行菩薩世に出て給ふべき時である。加之、天台智者大師も五百歲の後、眞實法華の行者出づべしと記し給ひ、傳教大師も、眞實の妙法必ず五百歲の後、世に流布すべしと誌し置かれたのではないか。嗚呼今は末法の五百年なり。上行菩薩必ず出現し給ふてあらう。さても上行菩薩はいづこに出現し給ふてあらうか。若し上行出現し給はぬならば、釋尊が法華經神力品の附囑をなし給ひしも、空虛になり了るではないか。上行菩薩いづくにありや。と月澄む夜半に、獨り經机に憑れて、深き歎息を洩した。折しも峯の嵐の音たえて、小菴の殘燈空しく瞬くのみであつた。

嗚呼末法の大師上行菩薩はいづくにあるぞ。叡山の幽谷唯溪流の聲潺湲として、六合の沈默を破るのみである。

第八章　豫言の信仰

猶太（ユダア）の古記錄を讀んだ人は知つてをるであらう。猶太人の信仰に依ればイスラエルの民は神の選民である。獨一眞神耶和華（エホバ）の愛子である。放にイスラエルの民にして、國歩艱難、塗炭の苦に陷ることあらば、神は必ず其の愛子を遣はして、之れを救ひ給ふのである。斯くの如くにしてメシア（メシアは救世主の義）の信仰は起つた。神の豫言は信ぜられた。時しもあれ。イスラエルはヨルダンの河波光なく、レバノンの香檜影薄うして、遂に羅馬の羈絆に繫せざるを得なかつた。是に於いて、神はメシアを送らねばならぬ。神若しメシアを送らざる時は、神の豫言は虛しくなるのみならず、神の約束は履行せられず、神の威嚴は地に墜ちなければならぬ。「メシア出てよ」。「メシア出てよ」。「救世主出てよ」の聲は、野に山に充ち滿ちて居た。此の時に當つて、マリアの子なるイエスは起つた。彼れは天國の福音を說いた。民衆は之れに和して、メシア出てたりと喜んだ。而も彼れは實際政治的にメシアの自覺はなかつた

が(近時の研究に依れば、政治的野心ありしともいふ)遂に羅馬の政廳に訴へられ、絳衣を着せ、棘の冠を與へられ、蓙の笏を持ちて、十字架に釘せられた。是において、後世の宗教意識は彼れをメシアと化したのである。

凡そ豫言の信仰は空しく終るものでない。民衆に此の信仰熾んなれば、豫言の信仰なき傑人を以て、民之れを豫言中の人となし了るのである。若し其の人にして、衷心より、豫言を信じ、われ實に豫言せられたる人なりと信ずるに至れば、其の感情を高潮に沸騰し、其の思想は神化せられて、豫言遂行の大勇猛心を生じ來り、瞭然として豫言を實行し、豫言に應ずる大業をなすのである。日蓮の如きは、此の種の最も崇高莊嚴なるもの、十方を空了し、世界の歴史を横絶し、峨々として雪嶺の如く、洋々として滄溟の如く、薩々として聖者の如く、其の美、其の壯、其の嚴を極めて居るのである。此に至つて安房東條の旃陀羅が子、日蓮は、釋尊附囑の法華正法の行者上行大菩薩と化し去つたのである。

凡そ豫言といふものは、客觀的に之れを觀れば、極めて荒唐不稽の想像である。愚言に過ぎぬ。如何なる詩人が空想の筆を呵して、出鱈目を吐いたのか、

如何なる精神病者が痴言を吐いたのか、何等の價値もないのである。併しながら、それが釋尊の名に於いて神の名に於いて、直に言はれ、直に誌されたと信ぜらるゝに至れば、必ずや何等かの效果を收めずには已まぬ。例へば、豫言は天の一角に起つた震動數若干、波遥若干の音波の如きものである。此の音波は歴史の大空に凝々として、波を描いてをる。而して、それが物理的關係に於いて、共鳴し得る程度の物體に遭遇するまでは、唯碧落中の波である。影もなく、音もなき波圏である。然も一たび共鳴し得る物體に遭遇するや、必ず此に共鳴を起さずには已まぬ。是に於いてか、轟々たり、殷々たり。豫言の波大なるに從つて、共鳴の波も亦大である。天門を震撼し人寰を搖動する釋尊は世界の大聲である。其の豫言の波は大である。日蓮は偉である。從つて、其の共鳴の波律も亦偉大である。必ずや、東海の天を捲き、六十餘州の民心を鼓せずには已まぬ。

老杉錯落たり叡山の奥、渓水潺湲たり横川の巷、月は一念三千の影を宿して佛燈一心三觀の法を輝かす。蓮長は深く思を法華經に潜めた。法華經二十

八品、是れ釋尊最後の說法ではないか。阿含、方等、般若、華嚴、縱說橫說五十餘年の說法も、皆是れ三乘方便の權教ではないか。五十餘年未顯眞實と宣うた、其の眞實と指し給うたのは、實に此の法華經ではないか。無二無三と說き給うた一乘の妙法は、此の法華二十八品ではないか。尊い哉、法華經皆へば五味の中、最上の醍醐味である。聲聞緣覺增上慢の輩には解せられぬ。唯勇猛精進の菩薩のみ此の御經を解することが出來る。尊い哉。天台大師唐土に出て、本經の幽を啓き、微を示し給ひ、傳敎大師我が朝に跡を垂れて、開三顯一の大義を述べ給ふ。然も時の潮は二大偉聖を洗ひ去つた。今や扶桑無二の靈地、叡山の淨境も、慈覺の台密に浸されてをるではないか。淺間しい哉。鎌倉の五山、徒に幕府の權威に媚びて、直指見性の無價寶珠を失ひ、悲しい哉。南都の六宗、太平の餘澤に眠つて釋尊の大義を忘す。已んぬる哉。我れ末法萬年の後に生まれて、空しく此に悶々してをる。當代の智者達の沙汰せらるゝところが是か。上行大菩薩はいづくにおはすぞ。さても怪しや。法華經の御言葉は蓮長を欺かぬではないか。夢なら

ば覺めよ。魔ならば失せよ。澄みわたる庵室の裡、一穗の寒燈をかゝげて、又もや誦し出す上行附囑の一品……

蓮長は斯くの如くにして、潛に考へた。

嗚呼末法附囑の上行大菩薩は未だ出て給はぬのてある。熱、釋尊の懸記(豫言の事)を考ふるに、時は末法の五百年。地は東海の一小國。然らば、今は正しく末法第五の五百年にあらずや。天竺より東海の一小國と宣ふ。正しく我が日本國にあらずや。彌勒菩薩の瑜珈論を案ずるに、東方に小國あり。其の中唯大乘の種姓ありと示し給へるてはないか。肇公が觀經疏にも、佛日西に入りて、遺耀將に東に及ばんとす。此の經典東北に緣あり。汝愼みて傳弘せよと、羅什に授け給ひしといふてはないか。「代を語れば、則ち像の終り、末の初め、地を尋ぬれば、則ち唐の東、羯の西、人を原ぬれば、則ち五濁の世、鬪諍の時也」。今だ。今だ。正しく時は今。國は日本……さて人は……

此の刹那、一道の光明は、爛々として、蓮長が頭腦を射た。眉は昂り、唇は熱し、滿身の熱血は湧いた。彼の兩瞳には紫電閃々と走つた。

さなり。さなり。釋尊の豫言を果さん者は蓮長なるぞ。我れこそは上行大菩薩なるぞ。

事此に至りては理路を超絶してをる。直覺てある。天啓てある。我れは豫言に應じて出て來りたる上行菩薩てある。法華經の行者釋尊附囑の行者てある。われ若し出てずんば、釋尊の豫言は虛僞となり、釋尊は妄語罪を犯し給ふことゝなる。嗚呼、然り。然り。我れだ。我れだ。我れ出てずんば此の豫言を如何せん。我れ上行たらずんば、此の懸記を如何にせん。

蓮長は深く心に決するところがあつたのてある。釋尊附囑の行者、當來の上行大菩薩は今や滿腔の抱負を抱いて、山を下らんとするのてある。阿鞞多羅三藐三菩提の佛達もいかに、渴仰歡喜の眼を以て、不退轉の勇者を送り給ふてあらうか。叡山三塔の曉鐘、今や革命の首途を儆し、殷々として谷に響き、峯を搖がしてをる。蛟龍雲雨を得れば、池中のものでない。雲氣に乘じ、長風に駕し、正に六合の外に飛躍するのてある。山嵐法衣を拂ひ、幽華山徑を埋めて、今や蓮長の下山を儆してをるのてある。

嗚呼黃鳥は幽谷を出てた。喬木はいづくにあるてあらう。雲漫々、波漫々彼は一先づなつかしい故郷の天に向つて山を下つたのである。

○觀心本尊抄

(上略)問うて曰く。佛の記文は云何。答へて曰く。後の五百歲閻浮提に廣宣流布せんと。天台大師記して云く。後の五百歲遠く妙道に沾はん。妙樂記して云く。末法の初め、冥利无きに非ず。傳敎大師云く。正像稍過き已りて末法太だ近きに有り等云云。末法太有、近の釋は、我が時は正時に非ずと云ふ意也。傳敎大師が日本にて末法の始を記して云く。代を語れば像の終り、末の始め、地を尋ぬれば唐の東、羯の西、人を原ぬれば、則ち五濁之生闘諍之時なり。經に云く。猶多怨嫉況滅度後と。此の言良とに以有る也。此の時此の釋に闘諍之時云云。今の自界叛逆西海侵逼の二難を指す也。此の時地涌千界出現して、本門の釋尊の脇士と爲り、一閻浮提第一の本尊を此の國に立つ可し。月支震旦未だ此の本尊ましまさず。日本國の上宮四天王寺を建立す。未だ時來らず阿彌陀他方を以て本尊と爲す。聖武天王東大寺

を建立す。花嚴經の敎主也。未だ法華經の實義を顯はさず。傳敎大師粗〻法華經の實義を顯示す。然りと雖も時未だ來らざる故に東方の鵝王を建立して、本門の四菩薩を顯はさずふ也。此の菩薩佛勅を蒙りて近く大地の下に在り。正像に未だ出現せず。末法にも又出て來り給はず。大妄語の大十也。三佛の未來記も亦泡沫に同じ。此を以て之れを惟ふに、正像に无き大地震大彗星等を出來す。此れ等は金翅鳥修羅龍神等の動變に非ず。偏に四大菩薩を出現せしむべき先兆なる歟。(下略)

第九章　歸鄉

かくて久しき友なる尊海に別離を叙したが、流石に長き別れの惜まれて、尊海は素絹の料にと、加賀絹一匹を贈にした。蓮長は友の情を喜びつゝ、京都に下つて、例の天王寺屋淨本が許を訪づれたが、心やさしき淨本夫婦は大いに喜んで、美濃上品の紵、綿の帽子に、襪子(たび)手巾、城殿(たの)の末廣取そろへ、厚き心を添へて送つたので、蓮長は深く之れを謝し、滋賀の湖に出てゝ、番場の宿もすぎ、我が日の本の大廟なる五十鈴川の畔、天照大御神を拜し、夫れより、東海道を經て、たえて久しき故郷に十餘年振りに、めでたく歸つたのである。小湊の波、東條の松、いかに錦衣の青年を迎へて喜んだであらうか。

蓮長唯今歸國致しましたとの聲を聞いて、重忠夫婦の喜びは譬ふるに物なく、殊に母梅菊は天に躍り地に轉びて、洗足をすゝめ、別れし後の物語、京、鎌倉の繁華のさま、彼れ一句、これ一句、喜びは貧しき家の軒に餘る程であつた。重忠は蓮長に打向ひ、「いつまで語るも、喜びはつきじ、かの老師道善御坊も、常に蓮長はいかにせしぞ、便りはなきか、音づれはあらざりしか、と憂ひ給へば、急ぎ御寺に參りて、老師の心を安め奉られよ」と勸められたので、蓮長もさなりと打頷き、急ぎ清澄寺に參つて、蓮長唯今歸國せりといはすれば、老師は大いに喜び、鼻うちかみつゝ、老の目の涙もろく、「おゝ、蓮長か。よう歸つた。年頃長き學問に、痩せもみえぬわ。嬉しいぞ」とおろおろ聲で迎へられたので、蓮長身に餘りて、師の情の沁み渡ると共に、今は師傳に違ふ異解を抱く身の、正法の爲とはいひな

がら、さすがに、心苦しさは止まなかつた。道善坊の喜びは一方ならず、孫や子供の歸つたやうに雀躍して、いかに學問とはいへ、程のあつたもの、老い先みぇたわしに物思はせるとは、腹立たしいぞ。」おほんおほんと咳入りつゝ、京はどうぞ、寧樂は如何にと問はるゝ度に、蓮長は心もおづおづ、慇懃に答へはすれど、さて話が佛敎のことゝなれば、忽ち、人情風俗、さては、名勝舊蹟のことに紛らして、苦しい心を靜めて居た。

夫れ惟んみれば、父母の恩は山よりも高く、海よりも深く、師の惠みは雨よりも滋く、情の露は身に餘る程である。然も師は何事も知り給はぬので、よく勉めた。立派な僧になつて來た。早く寺を讓つて隱居したいと思つて居らるゝてあらうが、あゝ、此の蓮長は師の御坊とは領解を異にしてをる。異解者である。表面こそ師なれ、弟なれ、實をいへば、天地も啻ならぬ千里の懸隔あはれ、正法の爲とはいひながら、かくまでも情厚き師の御坊の御敎に異解を挾むとは、さてもいかなる因果ぞと理に明るき蓮長も、流石に情に厚き人なれば、窃に涙を拭いたのてある。我れは釋尊の行者てある。法華經の行者てある。此

の信仰は蓮長が生命、蓮長が滴血、たとひ、王位を讓らん、日本國を與へんといはれても、一寸一分も動かすことは出來ぬ。若し更めずば、生命を取らん、頭を斬らんと脅かさるゝも、寸分改むることは出來ぬ。さりながら、師の御坊の奉じ給ふ眞言の敎へは、蓮長が眼には兒戲てある。いつかは眞心を打明けねばならぬが、其の時こそ、師の御坊はさぞや驚き給ふてあらう、破門に値する我れを、よく勉めた、よく學んだと喜んて下さることを思へば、勿體なや、辱けなや。あはれ、何と答へてよろしきや。此の信醜すべからず、此の師棄つべからず、蓮長が心には、信と愛との荒波さわぎ亂れて、心は八裂きに過ふ程の苦みてある。

蓮長歸れりとの聲をきいて、集り來る同學雜僧皆蓮長を取り卷いて、「法兄よく歸られた」「法弟よく歸つた、土產話は後て聞かう。さぞ疲れたてあらう。」「お茶を一杯」「飯を一杯」と寄つてかゝつて、甚なす笑顏に、流石剛氣の蓮長も咽せへつて、心に千行の紅涙をしぼつたのてある。かくて、父重忠も參つて、師の御坊に年來の厚誼を謝し、一山の學僧所化蓮長を饗せんとて、降つて働いたやうな騒ぎ、さて蓮長は涙と共に饗應を終り、師の御坊に暫しの暇を請うて、父母の

家に歸つた。

父母は昔に變らぬ幼子のやうに、手を執り脚をさすり、大きくなつた、立派になつた、嬉しいぞ。喜ばしいぞと摩でつ擦りつ、夜更くるまで、盡きぬ話に明かしたが、父の重忠は、蓮長に向つて、

蓮長殿、師の御坊の御話しには、「此の山には僧も多く、法弟も多數あるが、蓮長程のものはない。ぢやに依つて、わしもはや六十も超えたることとなれば、一刻も早く蓮長に寺を讓つて、隱居の身となりたいぞ。さうなれば、わしも安心、御身達もさぞ嬉しいてあらうぞ」との仰せ。それを聞くにつけ、又京、鎌倉に行きはせぬかと、師の御坊も、親二人も氣にかゝり心にかゝるぞ。それより、心落つけて、かの清澄の主となり、師の御坊に安心させ、老いたる親に安心させてくれるなら、それこそ、御身の立身、親のほまれ、重忠殿は好い子を持たれたと人にも羨まるゝ身にならば、どんなに嬉しいことであらう。さうてはないか。蓮長殿。早く老いたる親を安心させて下され。

と情に餘る親の言葉に、蓮長は何と答へて宜しきやら、暫らく思案に沈んで居たが、師の恩、親の惠みは深しと雖も、蓮長が信仰には代へられぬ。思ひきつて、眞言の權教にして信ずるに足らざること、釋尊一代の本懷は法華經にあること、蓮長今や釋尊の豫言に應じて、上行大菩薩とならんとすることを說き出したので、母の梅菊は心も弱く氣も弱く、法衣の袖に取縋り、氣が狂つたのか。魔が附いたのか。師の御詞、親の言葉、どう思はるると涙ながらにかき口說いた。蓮長は深く事の道理を說いて、確信動かすべうも見えなかつたので、父重忠は母を諭し、

「然らば、蓮長殿。法華正法の行者となつて、慈悲平等の船となり、迷へる衆生を助けて、生死の海を渡し給はれ。」

と勵まされたので、蓮長も大いに喜び、暇を告げて、清澄山に歸つた。

第十章　清澄の折伏

香烟緩かなる清澄の山に春暮れて、巖間に匂ふ山藤の花も短くなりまさり、

小湊の浦より東條の丘かけて、綠葉に青嵐吹く頃となつた。蓮長は思ひを潛めて、熱心に法華經を讀誦したが、熟〻思へば、今歲は正しく釋尊滅後二千二百一年に當る。末法萬年の初めてある。我れ愈〻釋尊の行者となり、上行菩薩となるべしと勇み立つて卯の花に埋もるゝ菴の草の扉を閉ぢ、卯月末の二日より大禪定に住し、香を焚いて三昧に入つたが、一七日にして、定を出て、東雲の空朗に、小湊の浦一碧鏡の如く、渺々として立續く浪の彼方より、大日輪は曈々と立ち昇り、丘の梢に風もなく、峰の松葉も眠り未だ靜けく、澄み渡る磯に立ち、蓮長は珠數押もみ、大日輪に打向ひて、聲高らかに、

南無妙法蓮華經
南無妙法蓮華經
南無妙法蓮華經
南無妙法蓮華經
南無妙法蓮華經
南無妙法蓮華經
南無妙法蓮華經
南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經
南無妙法蓮華經
南無妙法蓮華經
南無妙法蓮華經

と十遍許題目を唱へ、此に天地に向つて、法華立宗の大宣言を發したのてある。時に建長五年四月二十八日。蓮長は三十二歲てあつた。

其の日、清澄寺には、法鼓を鳴して、蓮長の說教あるよしを知らせたので、近鄕近在の老若男女、けふは久しく、京、鎌倉に修行に行いて歸られた蓮長師の御說法あるとのこと、定めて有難きことてあらう。定めて立派な僧になられたことてあらう。我れも參らん。我れも聽かん。と、さしも廣き本堂も立錐の餘地なきまて、ひしひしと押かけた。愈〻時刻になれば、出堂の法鼓琴々と鳴り響き、蓮長は燒香散華の式を行ひ、靜々と四弘誓願を誦しつゝ、高座に昇つて、法華經第六の卷の紐打解き、高らかに讀み上げつゝ、さて說き出すやう。

「我れ十餘年鎌倉より、京に上り、叡山、園城の兩寺をはじめ、南都六宗、高野の眞

言、讀まざるところなく、究めざるところもない。一切藏經八千餘卷、之れを要するに、釋尊の本意は法華經二十八品にあること疑ひを容れぬ。今は正像の二千年を過ぎて、末法萬年の初めてある。法華一乘の御法に依らずしては、極惡罪業の凡夫の助かるべき道はない。然るを何ぞや。本師本佛の釋迦を棄てゝ、十萬億土の彌陀を拜し、見性成佛の慢心に墜して、法華を罵り、大日如來を尊んで、敎祖を忘る。汝等よく聞いて、正邪是非を辨へよ。法華經は是れ諸經の王なるぞ。念佛は無間に墮る惡法、禪宗は天魔の眷屬、眞言は國を亡す邪法。律は國賊なること、敢て蓮長が私の言にあらず。皆經文にて見届けたるぞ。疾く疾く、念佛の珠數を斷ち、眞言の禮りを止めて、法華一乘の御法に歸せよ。」

と慮するところもなく、朗々と述べ立てたが、當地は念佛の盛んな處てはあり、且つ寺は眞言宗てあるので、聽衆は怒り罵り、「蓮長狂せり」「蓮長狂せり」「氣違坊主の說法を誰が聞くものか」と罵りわめきて歸るもあれば、怒り叫んて罵るもあり。殊に當山の老僧圓智坊は憤怒の餘をあげて蓮長に迫り、それを傳へ聞いた地頭の東條景信は念佛の篤信者てあるので、大いに怒り、道善坊に迫つて、蓮長を請ひうけ、唯一刀の錆となさんと意氣まいたが、慈悲深き道善坊は、愚に「蓮長は發狂したれば、先づ此の度は、老僧に任せられよ」と、慰めすかして漸く事は收まつたが、道善坊はさて、涙を流して、蓮長を諭せども、金剛の信心飜すべくも見えぬので、蓮長は山を追放さるゝの餘儀なきに至つた。然るにかの東條景信は餘憤未だ癒えず。半腹の辻堂に家來を隱して、蓮長を殺さんとしたので、蓮長は同學の友、淨顯、義淨の情に間道を敎へられ、西條の鄕、華房の蓮華寺といふ眞言宗の寺に、暫し其の身を蟄ませた。

然るに、恰かも其の頃此の寺に阿彌陀堂の新築が落成したが、田舍の事とて好い導師がなかつた。蓮長は京、鎌倉に修行して、學德高しとの噂を幸ひ、開堂の導師を賴まれた。豪邁不撓の蓮長は又もや、念佛宗の眞中て、法華一乘の大義を說いたので、聽衆は騷ぎ立ち、此處にも隱るゝことが協はぬやうになつた。是に於いて、愈〻法を鎌倉に說き、天下に獅子吼せんと志を決し、先づ父母に別れを告げんと、小湊に歸つたが、重忠夫婦は先日に似氣なく、鎌倉弘通の志を聞い

て、大いに喜び、我れ等も今より正法に歸して、有髪の僧、有髪の尼となり、鄭が擴むる妙法の一字を取り、我れは妙日、母は妙蓮と名乘り、其に後世を願はんと語つたので、蓮長は大いに喜び、うれし涙に打咽び、御兩親の得脫は衆生教化の始てある。今日を記念として、父の日の字と母の蓮の字を頂きて、我が名となし、蓮長を改めて、日蓮と申さんと喜び勇んで、滿浦の曉風に、那古の浦より帆をあげて、三浦へと向うた。

マホメットが最初の信者は其の最愛の妻てあつた。日蓮が最初の信徒は、其の父母てあつた。豫言者は鄉里に尊ばれずといふが、豫言者にして、其の妻に信ぜられ、其の父母に尊ばるゝ者は、更に一層の偉大を加ふるのてはあるまいか。これを見ても、日蓮が世上に傳ふる如き亂暴一片の怪僧てなく、高德の偉人てあつたことは明かてある。先づ第一に其の兩親を化して、妙法に歸せしめた日蓮の人格は一段の光彩を放つてをる。

第十一章　主師親

日蓮は、斯やうに、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊の四箇格言を宣言した。然るに果せるかな。迫害は起つた。併し是れはかねて期したことてある。釋尊は我れ等の主てあり、師てあり、親てある。我れは法華經の行者。釋尊の御使ひてある。熟〻今の世を觀るに、此の師主親を忘れ奉つて、徒に他方無線の大日彌陀を拜してをる、何たる背恩のことてあらうぞ。

あゝ釋尊！

我れ等が主師親たる釋尊！

我れ等は此の主師親を棄てゝ何佛に從ひ奉るべきてあるぞ。彼れは憤つた。彼れは叫んだ。かくて彼れは釋尊の行者として、主師親の御爲に、鎌倉に向はんとするのてある。彼れの此の思想はよく主師親書にあらはれてをる。曰く、

釋迦佛は我れ等が爲に主也師也親也。一人してすくひ護ると說き給へり。

阿彌陀佛は我れ等が爲には主ならず親ならず師ならず。然れば天台大師是を釋して曰く。西方は佛別にして緣異なり。佛別なるが故に隱顯の義成せず。緣異なるが故に子父の義成せず。又此の經の首末に、全く此旨無し。眼を閉て穿鑿せよと。實なるかな釋迦佛は中天竺の淨飯大王の太子として、十九の御年家を出給て檀特山と申す山に籠らせ給ひ、高峯に登ては妻木をとり深谷に下ては水を結び難行苦行して、御年三十と申せしに佛にならせ給て一代聖教を說給ひしに、上には華嚴阿含方等般若等の種々の經經を說せ給へども、內心には法華經を說ばやとおぼしめされしかども、衆生の根機まちまちにして一種ならざる間。佛の御心をば說き給はで人の心に隨ひ萬の經を說給へり。此くの如く四十二年が程は心苦しく思食しかども、今法華經に至て我願既に滿足しぬ。我が如くに衆生を佛になさんと說給へり。久遠より已來或は鹿となり、或は熊となり、或時は鬼神の爲に食はれ給へり。此くの如き功德をば法華經を信じたらん衆生は皆是佛子として、是實の我が子なり此功德を此人に與へんと說給へり。是れ程に思食た

る親の釋迦佛をないがしろに思ひなして、唯以一事大と說給へる法華經を信ぜざらん人は爭か佛になるべきや。能々心を留めて案ずべし。（下略）

彼れの信仰は實に斯くの如くてあつた。繰返して云ふ。釋尊は我れ等が爲に、榮華の極みなる王冠を拋ち王妃を棄てゝ、黃衣の一沙門と爲り、數十年の間、東西に說法して、席暖まるに隙がなかつたのである。否々、久遠劫の昔から生じ生じては死に死に、幾百生の間、六度萬行を修して佛と爲り給うたのである。而して、是れ全く我れ等を救濟せんとする大慈悲の御心から起つたのである。嗚呼、釋尊は我れ等が主なり、師なり、親なり。法華經にいはずや「三界は我が有、其の中の一切衆生は悉く我が子なり」と。我れ等はどうして、釋迦佛を忘れることが出來ようか。主を忘るゝものは不忠の臣である。師に背くものは不孝の子である。親をないがしろにするものは不孝の子である。日蓮不肖なりと雖も、多年法の燈火をかゝげて佛陀の道を學んだのは何の爲であるか。主なり、師なり、親なりを知る爲てはなかつたか。然るに、今や釋尊は我れ等が主なり、師なり、親なりといふことを確めた上からは、我れは不忠の臣、

不義の弟子、不孝の子たるを免れんことを努むべきではないか。あゝ世は不忠の臣、不義の弟子、不孝の子を以て満たされてをるではないか。起て、起て、起つて、彼れ等に主師親の大義を宣揚するのは日蓮が務めてはあるまいか。東條の郷小湊の浦の一漁夫の子なる日蓮は、生まれこそ賤しいが、釋迦佛の御使ひてあるぞ。主師親の大義を宣揚するものは我れを措いて何人があるぞ。

往かん！
往かん！

天下の大都鎌倉に赴いて、此の大義を宣しよう。

第十二章　敎機時國

彼れの志は決した。彼れは釋尊の行者として、法華經の御爲に生命を捧げんとするのてある。彼れは法華經の行者として、大道を天下に宣言せんとするのてある。彼れの決心や斯くの如く固く、彼れの抱負や斯くの如く大てある。而も彼れは十分の素養を有してをるものてある。叡山、園城、南都、高野に

十餘年間螢雪の功を積んだものてある。敢て匹夫の勇に誇る庸僧ではない、何等の準備もない暴虎憑河的の匹夫ではない。何等の觀察も、識見もない空心の徒てはない。戰はんとするが爲には十分の策略を考へて置いたのてある。徒に聲を大にして豫言者と稱するのは彼れの本領てない。彼れは經世の眼を有してをる快男兒てある。決して、平々凡々たる一個塵外の淸僧、獨善の聲聞てはない。隱者ては ある。彼れは時勢の如何なるかを知り、而して、國の如何なる位置にあるかを知り、更に敎へを受け容るべき人々の如何なる根機を有するかを知り、而してこれ等に對して、如何やうなる敎へを說くべきかを知つてゐた達識の士てあ る。此の思想は「敎機時國鈔」によくあらはれて居る。固より、其の製作こそ少し後年に屬してをるのてあるが、而も此の頃から、其の思想は絕えず彼れの胸中に往來して居たてあらうと思はるゝのてある。故に左に之れを引用しようと思ふ。抑〻敎機時國とは何ぞや。彼れは鈔に於いて、記して曰く、

一に敎とは釋迦如來所說の一切の經律論五千四十八卷四百八十帙、天竺に

流布すること一千年、佛の滅後一千一十五年に當て、震旦國に佛經を渡す。後漢の孝明皇帝永平十年丁卯より唐の玄宗皇帝開元十八年庚午に至る六百六十四歳之間に一切經渡り畢んぬ。此の一切の經律論の中に小乘大乘權經實經顯教密教あり此れ等を辨ふ可し。此の名目は論師人師よりも出てず、佛說より起る。十方世界の一切の衆生一人も無く之れを用ゆべし。之れを用ひざる者は外道と知るべき也。阿含經は方等般若法華經涅槃等之諸大乘經より出でたり。法華經には、一向に小乘を說きて法華經を說かざれば、佛慳貪に墮す可しと說き給ふ。涅槃經には一向に小乘經を用ひて佛を無常なりと云はん人は舌口中に爛る可しと云々。二に機とは佛教を弘むる人は必ず機根を知る可し。舍利弗尊者は金師に不淨觀を教へ、浣衣の者に數息觀を教へ給ふ、故に須臾の間に覺ることを得たり。智慧第一の舍利弗すら尙機を知らず。いかに況んや末代の凡師機を知り難し。但し機

を知らざる凡師は所化の弟子に一向に法華經を教ふ可し。問うて云く、無智の人の中にして此の經を說くこと莫れとの文は如何。答へて云く、機を知るは智人の說法する事也。又謗法の者に向つては一向に法華經を說く可し。毒鼓の緣と成さんが爲也。例へば不輕菩薩の如し。亦智者と成るべき機と知らば必ず先づ小乘を教へ、次に權大乘を教へ、後に實大乘を教ふ可し。愚者と知らば必ず先づ實大乘を教ふ可し、信謗共に下種と爲れば也。三に時とは佛教を弘めん人は必ず時を知る可し。譬へば農人の秋冬田作るに種と、地と、人の功勞とは違はざれども、一分も益無く還て損す。一段を作る者は少損也。一町二町の者は大損也。春夏耕作すれば上中下に隨て皆分々に益有るが如し。佛法も亦復是の如し。時を知らずして法を弘めば益無き上還て惡道に墮する也。佛出世し給うて必ず法華經を說かんと欲するに、縱ひ機有れども時無きが故に四十餘年此の經を說き給はず。故に經に云く、說時未だ至らざる故なりと云云。佛滅度の次の日より正法一千年は持戒の者は多く、破戒の者は少し。正法一千年の次の日より像法一

千年は破戒の者は多く、無戒の者は少し。像法一千年の次の日より末法一萬年は破戒の者は少く無戒の者は多し。正法には破戒無戒を捨てゝ持戒の者を供養す可し。像法には無戒の者を捨てゝ破戒の者を供養す可し。末法には無戒の者を供養すること佛の如くすべし。但し法華經を謗せん者をば、正像末の三時に亘りて、持戒の者をも、無戒の者をも、破戒の者をも共に供養す可からず。供養せば必ず國に三災七難起り、必ず無間大城に墮す可きなり。法華經の行者の權經を謗するは、主君親師の所從子息弟子等を罰するが如し。權經の行者の法華經を謗するは、所從子息弟子等の主君親師罰するが如し。又當世は末法に入て二百一十餘年也。權經念佛等の時歟、法華經の時歟。能々時刻を勘ふ可き也。四に國とは佛教は必ず國に依りて之れを弘む可し。國には寒國、熱國、貧國、富國、中國、邊國、大國、小國、一向偸盜國、一向殺生國、一向不孝國等之れ有り。又一向小乘の國、一向大乘の國、大小兼學の國も之れ有らん。而るに、日本國は一向に小乘の國歟、一向に大乘の國歟、大小兼學の國有る歟。能々之れを勘ふ可し。五に教法流布の先後とは、末

だ佛法渡らざる國には、未だ佛法を聽かざる者あり。既に佛法渡れる國には、佛法を信ずる者あり。必ず先に弘まる法を知りて後の法を弘む可し。先に小乘權大乘弘まらば、後に必ず實大乘を弘むべし。先に實大乘弘まらば、後に小乘權大乘を弘む可からず。瓦礫を捨てゝ金珠を取る可し。金珠を捨てゝ瓦礫を取ること勿れ。已上の五義を取つて佛法を弘めば、日本國の國師とも成る可き歟。所以に法華經は一切經之中の第一の經王なりと知るは、是れ教を知る者也。（下略）

斯くの如き見識を以て、彼れは當代に施さんと爲るのである。彼れは實に塵外の一隱者でなく、一大活動家である。彼れの法華經に對する信仰の厚かつたことは人の能く知るところである。而も、彼れが活眼を有して居た偉丈夫であると共に、經世の眼光を有して居たことと、天下を經營するの識見を具へて居たことは知らぬ人が多いかも知れぬ。彼れは徒に註疏の間に活力を消耗して、何等の權威も有じない學究ではない。腐儒の徒ではない。活眼を以て活書を讀んだ偉傑である。

第十三章　名越の庵

さて、日蓮は故郷を後にして、船路より三浦郡深田の浦米が濱に着き、青葉がくれの榮華の花も散りて空しき六代御前の墓を弔ひ、御最後川を渡つて、鎌倉に入り、名越のほとりに菴室を構へて誦經に餘念なく、紹介を求めて、鶴が岡八幡の經藏に入り、熱心に藏經を繙いて居た。其の頃鎌倉の有樣は如何にといふに、北條一家の威權益〻熾んに、時賴重時は飛ぶ鳥も落さんばかりの勢ひて、將軍賴嗣を廢し、後嵯峨天皇第一の皇子、宗尊親王とて、今年十一歲なるを迎へて、征夷大將軍となし、思ふが儘に振舞うて居た。

大鵬搏せんとして、扶搖の風を俟ち、俊鷹飛ばんとして、碧霄を睨むは、日蓮の態度てある。彼れは時勢の雲行を望んで、少時名越松葉が谷の菴室に、落々たる雄心を包み、鶴が岡の經藏に螢雪の功を積んて居た。かくするうちに、秋風函嶺を越えて、星月夜鎌倉に置く露白く、鳴く蟲の聲も弱つて、野面に霜おく冬枯れの景色となつた。或日、彼は柴の戸に行ひ澄して居ると、履の音しとやかに、三十餘りの氣高き僧が訪れて來た。恭しく三禮を施して、さていふやう。

「愚衲は叡山の學僧成辨と申すものてございます。久しく彼の靈山にあつて、聖敎を學んて居ましたが、次第に慈覺大師の敎義の傳敎大師に異るを認め、三塔の學者達に質し申したところ、議論更に合はず。夫れより深く傳敎、慈覺兩大師の書を閱し、遂に慈覺は眞言の義を容れて、傳敎の敎を亂る法敵なりと見定め、此の義を學頭に啓しなれば、學頭愚衲に申さるゝやう、其許は蓮長が弟子てはないかと。そこて、不審に思ひ、蓮長とは如何なる人に候ぞと御尋ね申しましたれば、蓮長とは房州の學僧にて此の山に登り學問して居られたが、慈覺大師を佛敵法敵と罵り、遂に山を下つたとの事。愚衲は世に意見を同うする人もあるものか。頼もしや。嬉しや。と、或折に偶然尊海師より貴僧のことを承り、御慕ひ申して、此に參りました。希はくは、敎へを垂れ給へ。」

と慇懃に述べたので、日蓮も深く喜び、詳に疑問の廉々を說示し、成辨は永年の疑ひ此に釋けて、喜び限りなく、遂に本門の大戒を受けて、日蓮の門に入つた。

時に歳三十三、日蓮より一歳の兄であつた。斯くて法名を日昭と改め、他日六老僧の主座となり、日蓮の股肱となつた。日昭は道徳堅固の偉人で、日宗の迦葉顔回である。是に於いて、日蓮百萬の援軍を得たる思ひをなし、後事を日昭に托して、愈〻天下の大都鎌倉の街道に立つて一乘妙法の大義を宣揚せんと決した。

第十四章　小町の辻

傳說に依れば、日蓮は小町の辻に立つて、毎日眞言を呵し、禪を叱し、念佛を罵り、律を斥け、熱心に法華一乘の妙法を宣說したのである。然るに、先頃から、名越の菴室に不思議な僧が籠つて居るとの噂がうすうす鎌倉の町に擴まつて居たので、愈〻何事か起つたのであらうと、武士町人集まり、路行く人も立止まり、或は切齒するもあり、耳傾くるもあり、或は難詰し來るもありといふ狀態で、當時鎌倉は幕府を始め、武人多くは禪宗であつた。是に於いて、はじめは狂僧奴が痴言を吐いて人を迷はすと罵り去つて、心にかけなかつた人々も、追々日蓮

の熱心に動かされて、信徒となるものが出來たので、憤慨するものも多く、禪を罵り、念佛を譏る佛罰思ひ知れと、瓦礫を投ずる輩も出て來た。日蓮は罵詈讒謗の雨の中に、泰然として、法を說き、朝から暮に及び、黃昏漸く名越松葉が谷の菴に歸るを常としたといふことである。斯くの如くにして、彼れは有力なる信者を得た。

斯る有力なる信者の一人は四條金吾賴基であつた。彼れは北條の一門江馬遠江守の近臣で、其の頃建長寺（建長五年に成れり）の道隆禪師に參禪して居たが、不圖した事から日蓮の說法を聽いて、信心肝に銘じ、其の妻と共に日蓮を敬すること一方ならず、衣服粮苞皆心を盡して送るやうになつた。夫れから賴基の朋友進士太郎善春も白雨の時、日蓮に同傘したのが緣となり、深く日蓮の敎を信じ、勤務の暇には常に名越の菴室を訪ふやうになつた。賴基も當時武勇の譽れあるあつぱれの武夫であつたので、日蓮も非常に心强く思つたとてあらう。

さて又、日蓮の母方の親族に富木播磨守胤繼といふ豪族があつた。下總葛

飾郡八幡の鄕若宮の里に居り、兩總の司として、威勢盛んてあつた。日蓮の父母は固より流人の身て、貧にして日蓮に學資を給することが出來なかつたので、從來日蓮が南都叡山の遊學十數年の學資は皆胤繼の情てあつた。故に日蓮は先づ恩人を濟はんとの志を興して、若宮に訪ねたが、胤繼は既に鎌倉參勤の道に上つた後てあつた。日蓮は之れを聞いて落膽したが、急ぎ引返し、船中に於いて胤繼に會ひ、懇に道を說いて妙法に歸せしめた。

此の頃又下總猿島郡能手の人印東有國は、悲しく名越の菴を訪うて、其の子吉祥麿といふを徒弟に爲し給はれと請うた。抑、此の有國は先きに日蓮と志を同うして、其の門に歸した成辨即ち日蓮の義兄てあつた。日蓮大いに喜んて、吉祥を改めて日朗と呼び、其の門に加へた。日朗其の時齡僅に十歲、日蓮の膝下に仕へて艱難を共にし、日宗無二の忠臣となつた。

日蓮の熱誠は、日昭日朗の二人を得、賴基、善春、胤繼の歸依者を得たので、勢益〻振ひ、日毎に小町の辻に出て、大音聲に法華の妙法を宣べて居た。其の頃鎌倉には彗星出て、諸國は飢饉烈しく、何となく世も騷がしくなり來り、執權時賴も

其の年十一月落飾して、一子時宗七歲にして後を繼いだ。而して遙に海の彼方には大元の勢旭日の如く、明軍を破つて、正に中原の鹿を獲んとするときてあつた。陰雲天を鎖して、雨蕭々、何とはなしに、穩かならぬ空の色てある。

斯る中にも、日蓮の信徒は增して來た。房州天津の領主工藤吉隆、武州池上の住人池上右衞門太夫宗仲、池上の緣家、荏原左衞門義宗、又甲州巨摩郡波木井の住人南部六郎實長等の豪族皆信徒となつたので、日蓮の敎は、烈風の原草を吹く如く、當るところ皆靡き偃す有樣となつた。是に於いてか、襄に名越の狂僧何をかなさんと蔑視した鎌倉諸寺の僧徒も眉を動かさゞるを得なかつた己れ憎むべき宗門の法敵、靑二才の癖に祖師西傳の佛心宗を罵る不屆者。思ひ知らせて置くべきかといふ遺恨の一心、凝つて日蓮の頭上に落ち來らざるを得なかつた。鎌倉諸寺の怨恨、雨となるか。雪となるか。將た霧となつて降り來るてあらうか。殺氣は紛々として小町の辻に溢れて居た。

第十五章　安國論成る

天變地異は、もと自然の現象て、敢て人事に關せないのてあるが、然も人は國情の動物てある、天變地異頻りに至れば、智者も眉を顰め、世の愚人は安けき心もなく立ちさわぐのは無理もない事てある。況んや、當時迷信深く、科學開けざる時代に於いては、人心倚るところを失ひ、如何なる災異や續出せんと疑ふも無理ならぬことてあらう。

建長元康の年も暮れて、新玉の年立ちかへり、改元ありて正嘉と號したが、其の年四月の日蝕五月の月蝕、空模樣たゞならず、五月十八日子の刻の大地震に、人々色を失うたが、三月以來旱天打續き雨一滴も降らず。諸國の旱魃に、六月加賀法印、七月鶴が岡の僧正共に壇を築いて、雨を祈つたが、少しの驗しもない。斯る間に、八月の朔日から地震搖りはじめ、二十三日夜戌時、激震ありて、鎌倉の堂塔伽藍、大小名の邸宅皆悉く或は倒れ、或は傾き、死傷數知れぬ程の地妖に、人心恟々として靜まらざるのみか。夫れより大震小震日毎に無い日はなく、百餘日に及び十月十三日には一天雜色の雲出て、電光閃々として眼を射り、電霆はためき、地震あり、諸國は之れが爲に、五穀實らず、大饑饉の慘狀は目もあてら

れぬ有樣て、餓孚路に滿つるは愚か、或は死骸を食み、死屍を漁るといふ恐ろしい噂てあつた。此れ等の慘狀は詳に「吾妻鏡」に誌してあるが實に慘憺たるものてあつた。斯くの如くにして、叫喚は地に滿ち、慟哭の聲は耳を劈き、由井が濱邊の松風も蕭々として、潮風に咽びかへるのみてあつた。

是に於いて、日蓮は考へた。法華經を無上の權威と信ずる日蓮は考へざるを得なかつた。

嗚呼、今は末法の世てある。法華經弘通の時てある。然るに幕府は禪宗を重んじ、愚昧の民衆は、或は念佛に迷ひ、眞言に欺かれ、律に泥んて、一乘の妙法を忘れてをる。是に於いて、天は怒り、地は憤り、大法の妨なすを懲らすのてあらう。此の事は、日蓮既に房州の清澄、南都の藥師寺、下總の東漸寺、鶴が岡の經藏と四度まて一切經を繙いて、考へ置いたのてある。佛語に虛妄なし。いてや、今一度證文を出して吳れんと、正嘉二年の正月六日鎌倉を後にし、駿州岩本實相寺の經藏に入つて、眼を藏經に注いだ。此の時伴うた者は日朗てあつた。

抑、岩本實相寺は叡山橫川の末流てある。當山の一切經は智證大師之れを

唐土より傳來し、一部を此に收め、一部を三井寺に收めた因緣淺からぬ經典である。時に實相寺の學頭に智海法印といふ人があつて、日蓮の聞きしにまさる高僧なるに服して、閲經の傍、天台の傑作摩訶止觀の講義を請うたので、日蓮は閑ある毎に、此の大作を講じて居た。然るに其の頃房州東條なる父重忠の訃を傳へたので、彼は重忠の、父にして最初の信徒なる人の死を悲むこと譬ふるに物なく、慟哭し、故郷に父を弔はんと鎌倉指して實相寺を出た。さて、此の實相寺に伯耆坊といふ學僧があつて、久しく叔山に上り、佛敎を修め、父の喪に丁つて、歸院して居たが、日蓮の學德に感じて、遂に實相寺を脫し、日蓮の後を追うて、沼津に及んだので、切なる志を告げて從弟となつた。是れ即ち六老僧の一人、日興である。

日蓮は日朗を連れて、東條に歸り、父の菩提を弔ひ、慈母を慰め、百箇日の追善果てゝ、再び鎌倉に立ち還つた。然るに、鎌倉の災變は少しも止まず、其の年八月朔、颶風洪水天地を捲き、同じき二十八日の夜には、彗星出て、山嶽鳴動し、疫病飢饉に人心は左往右往にぞめき立ち、今に天地も碎け、世界も破滅する程の混

雜てあつた。斯る不穩の中に、再び年暮れ、改元あつて、正元元年となつた。

是に於いて、日蓮は默するを得なかつた。天變地異を以て、法華經を侮り、念佛、禪、眞言、律の諸宗に媚ぶる天罰佛罰と考ふる彼れは、奮然身を挺して起つた。彼れは身を棄てゝ、四海の民を法華經に歸せしめ、是に依りて天地の心を和げ、萬民を塗炭の中に救はんと決したのである。かくて、彼れは先づ、執權を諫めて、其の非を改めさせんものと思ひ、かねて考へ置きたる一切經の要文を提げて來つて、一篇の意見書を綴り、當時鎌倉に滯在してゐた、京師の知友大學三郎に字句を修飾させ、立正安國論と名づけ、文應元年庚申七月十六日、日蓮自ら之れを持して、奉行宿谷左衞門尉光則の邸に至り、前の執權、北條時賴の賢覽に供へんことを請うた。其の文に曰く。

旅客來り嘆じて曰く、近年より近日に至るまで天變地夭飢饉疫癘遍く天下に滿ち廣く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり、死を招くの輩既に大半に超え、之を悲まざるの族敢て一人もなし。然る間或は劍利即是之文を專にして西土救主の名を唱へ、或は衆病悉除之願を恃みて東方如來之

經を誦し、或は病即消滅不老不死之詞を仰ぎて、法華眞實の妙文を崇め、或は七難即滅七福即生之句を信じて百座百講の儀を調へ、有は祕密眞言の教に因て五瓶の水を濯ぎ、有は坐禪入定の儀を全して空現の月を澄し、若くは七鬼神の號を書して千門に押し、若くは五大力の形を圖して萬戸にかけ、若くは天神地祇を拜して四角四境の祭祀を企て、若くは萬民百姓を哀みて國主國宰の德政を行ふ。然りと雖も、唯肝臍を摧くのみ。彌〻飢疫に逼り、乞客目に溢れ、死人眼に滿てり。屍を臥せて觀となし、尸を並べて橋と作す。觀れば夫れ、二離璧を合せ五緯珠を連ぬ。三寶世に在し、百王未だ窮まらず。これの世早く衰へ、其の法何ぞ廢れたるや。是れ如何なる禍により、是れ何なる誤に由るや。主人の曰く。獨り此の事を愁へて胸臆に憤悱す。客來りて共に嘆く屢〻談話を致さん。夫れ出家して道に入る者は法に依て佛を期する也。而るに、今神術も協はず。佛威も驗し無し。具に當世の體を觀るに、愚にして後生の疑を發す。然れば則ち圖竟を仰て恨を呑み、方載に俯して慮りを深くす。倩〻微管を傾け、聊經文を披きたるに、世皆正に背き人悉く惡

に歸す。故に善神國を捨てゝ相去り、聖人所を辭して還らず。是を以て魔來り鬼來り災起り難起る。言はずんばある可からず、恐れずんばある可からず。客の曰く。天下の災國中の難、余獨り嘆くにあらず。衆皆悲めり。今蘭室に入りて初めて芳詞を承るに、神聖去り辭し、災難並起るとは何の經に出てたりや。その證據を聞かん。主人の曰く。その文繁多にして、その證弘博なり。金光明經に云く、その國土に於いて、此の經ありと雖も未だ曾て流布せず、捨離の心を生じて聽聞せんことを樂はず、亦供養し、尊重し讃歎せず。四部の衆持經の人をみて亦尊重し、乃至供養すること能はず。遂に我れ等及び餘の眷屬無量の諸天をして此甚深の妙法を聞くことを得しめず。甘露の味に背き、正法の流を失ひ、威光勢力あることなからしむ。惡趣を增長し、人天を損減し、生死の河に墜ちて涅槃の路に乖かん。世尊我れ等四王竝に諸の眷屬及び藥叉等斯の如き事をみてその國土を捨てゝ擁護の心なけん。但我れ等の是の王をすつるにあらず。必ず無量の國土を守護する諸天善神有らんも、皆悉く捨て去らん。既に捨離し了りては、その國土

に種々の災禍ありて國位を喪失す可し。一切の人衆皆善心なく、唯繋縛殺害瞋諍のみなり。互に相讒陷し、枉げて辜なきに及ばん。疫病流行し、彗星數〻出て兩日竝び現じ、海蝕恒黒白二虹不祥の相を表し、星流れ、地動き、井の中に聲を發し、暴雨惡風時節に依らず。常に飢饉に遭ひて苗實みのらず。多く他方の怨賊ありて國内を侵掠し、人民諸の苦惱を受け、土地可樂の處あることなけん。大集經に云く。佛法實に隱沒せば、鬚髮爪皆長く、諸法も亦忘失せん。其の時虚空の中に大なる聲ありて地に震ひ、一切皆遍く動くことを現じ、十不善業貪瞋癡倍增して、衆生の父母に於ける之を觀ること猶鹿の水上輪の如くならん。城壁破れ落ち下り、屋宇悉く圮れ析け、樹根枝葉華葉菓葉盡きん。唯淨居天を除きて欲界一切處の七味精氣損滅して餘あることなく、解脫の諸の善論其の時一切盡きん。生ずる所の華菓味希少にして亦美ならず。あらゆる井泉池一切悉く枯涸し、土地悉く鹹鹵し、毀裂して丘澗となり、諸山皆燋燃して天龍雨を降さず。苗稼皆枯死し、生者枯盡し、餘草更に生ぜず。土を雨し、晝闇にして、明を現せず。四方皆亢旱し、數〻諸の惡瑞

如くならん。衆生及び壽命色力威樂減じ、人天の樂を遠離し、皆悉く惡道に墮せん。如是不善業の惡王惡比丘我が王法を壞し、天人の道を損減し、諸天善神王衆生を悲愍する者此の濁惡國を棄てゝ皆悉く餘方に向はん。（中略）……藥師經に云く。若し刹帝利灌頂王等の災難起らん時、所謂人衆疾病の難、他國侵逼の難、自界叛逆の難、星宿變怪の難、日月薄蝕の難、非時風雨の難、過時不雨の難あらん。（中略）……夫れ四經の文明かなり。萬人誰か疑はん。而るに、盲瞽の輩迷惑の人妄に邪說を信じて正教を辨へず。故に天下世上諸佛衆經に於て捨離の心を生じて、擁護の志なし、仍て善神聖人國を捨て所を去る。是を以て、惡鬼外道災をなし難を致す矣。客色を作して曰く。後漢の明帝は金人の夢を悟りて白馬の敎を得、上宮太子は守屋之逆を誅して成塔の構をなす。爾來上一人より下萬人に至るまで佛像を崇め、經卷を專にす。然れば、則ち鷲頭の月を觀じ、鶴勒の流は亦鷄足の風を傳ふ。誰か一佛の都を編し、三寶の跡を廢すといはんや。若しその證あらば委しくその故を聞かん矣。主人喩して曰く。佛閣甍を連ね、經藏軒を並べ、僧は竹葦の如

く、倡は稲麻に似たり。崇重年ふり、尊貴日に新なり。但法師は諂曲にして、人倫に迷惑し、王臣は不覚にして邪正を辨ずることなし。仁王經に曰く。諸の惡比丘多く名利を求め、國王太子王子の前に於て、自ら破佛教の因緣破國の因緣を說かん。其王別へずして此語を信聽し橫に法制を作りて佛戒に依らず、是れを破佛破國の因緣となす。涅槃經に云く、菩薩惡象等に於て心に恐怖することなかれ。惡知識に於ては、怖畏の心を生ぜよ。惡象の爲に殺さるゝも三趣に至らず。惡友の爲に殺されては、必ず三趣に至る。法華經に曰く。惡世の中、比丘は邪智にして心諂曲に、未だ得ずして得たりといひ、我慢の心充滿せん。或は阿練若に納衣にして空閑にあり。自ら眞に道を行ずといひて、人間を輕賤する者あらん。利養に貪著するが故に、白衣の爲に法を說きて、世に恭敬せられ、六通の羅漢の如くならん。乃至常に大衆の中にありて我れ等を毀らんと欲するが故に、國王大臣婆羅門居士及餘の比丘衆に向て、誹謗して我が惡を說きて、是の邪見の人外道の論議を說くといはん。濁劫惡世の中には多く諸の恐怖あらん。惡鬼其身に入て、我れ

を罵詈毀辱せん。濁世の惡比丘は佛の方便隨宜所說の法を知らず、惡口して顰蹙し、數〻擯出せられん、(中略)文に就て世を見るに、誠に以て然り矣。惡倡を誡めずんば豈善事をなさんや。客猶憤りて曰く。明王は天地に因て化を成し、聖人は理非を察して世を治む。世上の僧侶は天下の歸する所也。惡倡に於ては、明王信ずべからず。聖人にあらずんば賢哲仰ぐ可からず。今賢聖の尊重せるを以て、則ち龍象の輕からざるを知る。何ぞ妄言を吐きて強に誹謗をなし、誰人を以て惡比丘といふや。委細に聞かんと欲す矣。主人の曰く。後鳥羽院の御宇に法然といものあり。「選擇集」を作る矣。則ち一代の聖教を破し、遍く十方の衆生を迷はす。其の選擇に云く。道禪師聖道淨土の二門を立て、聖道を捨てゝ正しく淨土に歸するの文。初に聖道門とは之に就て二あり。乃至之れに準じて之れを思ふに、密大及び實大を存すべし。然れば則ち今の眞言佛心天台華嚴三論法相地攝論此れ等八家の意正しく此にある也。曇鸞法師の往生論註に云く。謹て龍樹菩薩の十住毗婆沙を案ずるに、菩薩阿毗跋致を求むるに二種の道あり。一には難行

道、二には易行道なり。この中に難行道とは即ち聖道門也。易行道とは即ち是れ淨土門也。淨土宗の學者須くこの旨を知るべし。設ひ、先より聖道門を學ぶ人と雖も、若し淨土門に於て、その志あらん者は須く聖道を棄てゝ淨土に歸すべし。又云く。善導和尚正雜二行を立て、雜行を捨てゝ正行に歸するの文。第一に讀誦雜行とは上の觀經等の淨土往生の經を除きて、已外大集顯密の諸經に於て、受持讀誦するを悉く讀誦雜行と名く。第三に禮拜雜行とは上の彌陀を禮拜するを除きて已外、一切の諸佛菩薩等及諸の世天等に於て、禮拜恭敬するを悉く禮拜雜行と名く。私に云く。この文を見るに須く雜を捨てゝ專を修すべく、豈百即百生の專修正行を捨てゝ、堅く千中無一の雜修雜行を執せんや、行者能く之れを思量せよと。(中略)之れに就いて之れを見るに、曇鸞道禪善導の謬釋を引いて、聖道淨土難行易行の旨を建て、法華眞言總じて一代の大乘六百卅七部二千八百八十三卷一切の諸佛菩薩及諸の世天等を以て、皆聖道難行雜行等に攝して、或は捨て、或は閉ぢ、或は閣き、或は抛つ。この四字を以て、多く一切を迷はし、剩へ三國の聖僧十方

の佛弟を以て皆群賊となし、併せて罵詈せしむ。近くは所依の淨土の三部經の「唯除五逆誹謗正法」の誓文に背き、遠くは一代五時の肝心たる法華經の第二の「人不信毀謗此經乃至其人命終入阿鼻獄」の誡文に迷ふ者也。茲に代は末代に及び、人は聖人にあらず。各冥衢に容りて並に直道を忘る。悲い哉。瞳矇をうたず。痛ましい哉。徒に邪信を催す。故に上國王より下士民に至るまで、皆經は淨土三部以外の經なく、佛は彌陀二尊の外の佛なしと謂へり。(中略)悲い哉。數十年の間百千萬の人魔緣に蕩されて、多く佛敎に迷へり。傍を好んで、正を忘る。善神恕をなさゞらんや。圓を捨てゝ偏を好む。惡鬼便を得ざらんや。如かずや。彼の萬祈を修せんよりは此の一凶を禁ぜんには。客色を作て曰く。我が本師釋迦佛淨土の三部經を說き給ひてより以來、曇鸞法師は四論の講說を捨てゝ一向に淨土に歸し、道禪禪師は涅槃の廣業を閣きて、偏に西方の行を弘め、善導和尚は雜行を抛て、專修を立て、慧心僧都は諸經の要文を集めて、念佛の一行を宗とす。彌陀を貴重すること誠に以て然り矣。又往生の人夫れ幾ぞや。就中、法然聖人幼少に

して、天台山に昇り、十七にして六十巻に渉り、並に八宗を定め、具に大意を得たり。其外一切の經論七遍反復し、章疏傳記究め看ざるなく、智は日月に齊しく、德は先師に越えたり。然りと雖も、猶出離の趣に迷ひ、涅槃の旨を辨へず。故に遍く觀、悉く鑑み、深く思ひ、遠く慮り、遂に諸經を拋て專ら念佛を修す。其上一夢の靈應を蒙り、四裔の親疎に弘む。故に或は勢至の化身と號し、善導の再誕と仰ぐ。然れば則ち十方の貴賤頭を低れ、一朝の男女歩を運ぶ、爾來春秋推し移り星霜相積れり。而るに悲くも釋尊の教に疎にして、恣に彌陀の文を譏る。何ぞ近年の災を以て聖代の時に課せ強て先師を毀り、更に聖人を罵るや。毛を吹きて疵を求め、皮を剪りて血を出す。昔より今に至るまで、此の如き惡言未だ見ず、惶る可く愼む可し。罪業至つて重し。科條爭てか遁れん、對座猶以て恐れありと、杖を携へて則ち歸らんと欲す矣。主人咳ひ止めて曰く、辛きを蓼葉に習ひ、臭きを溷厠に忘る。善言を聞きて惡言と思ひ、謗者を指して聖人といひ、正師を疑うて惡侶に擬す。其迷ひ誠に深く、其罪淺からず。事の起りを聞け。其趣を談ぜん。釋尊說法の內一

代五時の間に先後を立てゝ權實を辨ず。而るに曇鸞道禪善導既に權について實を忘れ、先に依て後を捨て未だ佛敎の淵底を探らざるものなり。中について、法然最も其流れを酌むと雖も、其源を知らず。所以はいかん。大乘經六百三十七部二千八百八十三卷並に一切の諸佛菩薩及諸の世天等を以て、捨閉閣拋の字を置て、一切の衆生の心を誘す。是れ偏に私曲の詞を展べて、全く佛經の說を見ず。妄語の至り、惡口の科言ふに比なく、責むるに餘りあり。人皆其妄語を信じ、悉く彼の選擇を貴ぶ。故に淨土の三經を崇めて、衆經を拋ち、極樂の一佛を仰ぎて、諸佛を忘る。誠に是れ諸佛諸經の怨敵、聖僧衆人の讎敵なり。此邪敎廣く八荒に弘まり、周く十方に遍す。抑近年の災難往代の由を以て、强に之れを恐る。聊先例を引て汝の迷を悟らす可し。（中略）此を以て之れを惟ふに、法然は後鳥羽院の御宇建仁年中の者なり。彼の院の御事既に眼前にあり。然れば則ち大唐に例を殘し、吾が朝に證を顯す。汝疑ふこと莫れ。汝怪むことなかれ。唯須く凶を捨てゝ善に歸し、源を塞ぎて根を截る可し矣。客聊和ぎて曰く。未だ淵底を究めず、數〻その

趣きを知る。但し華洛より柳營に至るまで、釋門に樞機あり。佛家に棟梁あり。然れども、未だ勘狀を進ぜず。上奏に及ばず、汝賤身を以て輒ち莠言を吐く。その義餘りあれども、その理謂れなし。主人の曰く。予少量たりと雖も、恭くも大乘を學す。苔蠅驥尾に附して萬里を渡り、碧羅松頭に懸りて千尋を延ぶ。弟子一佛の子と生まれ、諸經の王に事ふ。何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さざらんや。其上涅槃經に云く。若し善比丘あり法を壞る者を見て置て呵責し駈遣し舉處せずんば、當に知るべし、是の人は佛法中の怨なり。若し能く駈遣し舉處せば、是れ我が弟子眞の聲聞なりと。余善比丘の身に當らずと雖も、佛法中の怨の責めを遁れんが爲に、大綱を採て粗一端を示す。其上去る元仁年中に延曆興福の兩寺より度々奏聞を撥て勅宣御敎書を申し下して、法然の選擇の印板を大講堂に取上げ、三世の佛恩を報ぜんが爲に之を燒失せしめ、法然の墓所に於ては、感神院の大神人に仰せ付けて、破卻せしむ。その門弟隆觀聖光成覺薩生等は遠國に配流し、その後未だ御勘氣を許されず。豈未だ勘狀を進ぜずといはんや。客則

ち和ぎて曰く。（中略）夫れ國は法に依りて昌え、法は人に因りて貴し。國亡び人滅せば、佛を誰か崇むべき。誰か信ずべきや。先づ國家を祈りて須く佛法を立つべし、若し災を消し難を止むるの術有らば聞かんと欲す。主人の曰く。余は是れ頑愚にして、敢て賢を存せず。唯經文に就て聊所存を述べん。抑〻治術の旨內外の間其文幾多ぞや。擧ぐべきこと難し。但佛道に入りて數〻愚案を回すに、誘法の人を禁じて、正道の侶を重んぜば、國中安穩にして、天下泰平ならん。（中略）涅槃經に云く。今無上の正法を以て諸王大臣宰相及び四部の衆に付屬す、正法を毀る者をば、大臣四部の衆當に苦治すべし又云く、佛の言く、迦葉能く正法を護持する因緣を以ての故に、是の金剛身を成就することを得たり。善男子、正法を護持せん者は五戒を受けず。威儀を修せずして、應に刀劍弓箭鉾槊を持すべしと。（中略）法華經に云く。若し人信ぜずして、此の經を毀謗せば、即ち一切世間の佛種を斷ぜん。乃至其人命終して阿鼻獄に入らんと。夫れ經文顯然たり、私詞何ぞ加へん。凡そ法華經の如くんば、大乘經典を謗る者は無量の五逆に勝れたり。故に阿鼻

大城に堕して永く出る期なけん。涅槃經の如くんば、設ひ五逆の供を許すこと謗法の施を許さず。蟻子を殺す者は必ず三悪道に落つ。謗法を禁むる者は、定めて不退の位に登る。……法華涅槃の經教は一代五時の肝心也。其の禁實に重し、誰か歸仰せざらんや。而るに、謗法の族正道の人を忘れ剰へ法然の選擇に依て、彌、愚痴の盲瞽を増す。是を以て或は彼の遺體を忍びて、木畫の像に露はし、或はその妄説を信じて、莠言を模に彫り、之れを海内に弘め、之れを墩外に翫ぶ。仰ぐ所は即ちその家風、施す所は則ちその門弟なり。……嗚呼悲しい哉、如來誠諦の禁言に背くこと。哀しいかな、愚侶迷惑の麤語に隨ふこと。早く天下の靜謐を思はゞ、須く國中の謗法を斷つ可し矣。客の曰く、若し謗法の輩を斷じ、若し佛禁の違を絶せんには彼の經文の如く斬罪に行ふ可き歟。若し然らば、殺害相加へ罪業何か爲んや。（中略）主人の曰く、客明に經文を見て、猶斯の言をなす。心の及ばざる歟。理の通ぜざる歟。全く佛子を禁むるにあらず。唯偏に謗法を悪む也。夫れ釋迦の以前の佛教はその罪を斬ると雖も、能忍以後の經說は則ちその施を止む。

然れば則ち四海萬邦一切の四衆其悪に施さず。その善に歸せば、何なる難か竝び起り、何なる災か競ひ來らん。客則ち席を避け襟を刷ひて曰く、佛教斯區にして、旨趣窮め難く、不審多端にして理非明かならず。但し法然聖人の選擇現在なり。諸佛諸經諸菩薩諸天等を以て、捨閉口閣抛を誡す。その文顯然也。茲に因て聖人國を去り、善神所を捨て、天下飢渇し、世上疫病すと。今主人廣く經文を引て、明に理非を示すが故に、妄執既に醒り、耳目數、朗かなり。所詮國土泰平天下安穩は一人より萬民に至るまで好む所也、樂ふ所也早く一闡提の施を止め、永く衆の僧尼の供を致し、佛海の白浪を收め、法山の綠林を截らば、世は義農の世となり、國は唐虞の國とならん。然して後法水の淺深を斟酌し、佛家の棟梁を崇重せん。主人悦んで曰く。鳩化して鷹となり、雀變じて蛤と爲る。悦しい哉、汝蘭室の友に交り、麻畝の性となる。誠にその難を顧みて、專らこの言を信ぜば、風和ぎ浪靜にして、不日に豐年とならんのみ。但し人の心は時に隨ひて移り、物の性は境に依て改まる。譬へば、猶水中の月の波に動き、陣前の軍の劍に靡くが如し。汝當座に信ずと雖

も、後定めて永く忘れん。若し先づ國土を安んじて現當を祈らんと欲せば、速に惰慮を回らし、いそぎ對治を加へよ。所以はいかん。藥師經の七難の正難忽に起り、二難猶殘れり。いはゆる他國侵逼の難、自界叛逆の難也。大集經の三災の內二災早く顯れ、一災未だ起らず。いはゆる兵革の災也。金光明經の內種々の災過一一起ると雖も、他方の怨賊國內を侵掠する此の災未だ露はれず。此の難未だ來らず。仁王經の七難の內六難今盛んにして、一難未だ現ぜず。いはゆる四方の賊來りて國を侵す難也。加之國土亂れん時は、先づ鬼神亂る。鬼神亂るゝが故に、萬民亂ると。今この文に就て、具に事情を案ずるに、百鬼早く亂れ、萬民多く亡ぶ。先難是れ明かなり。後災何ぞ疑はん。若し殘る所の難惡法の科に依て竝び起り競ひ來らばその時何をか爲さんや。帝王は國家を基として、天下を治め、人臣は田園を領して世上を保つ。而るに、他方の賊參りてその國を侵逼し、自界叛逆して、その地を掠領せば、豈驚かざらんや。國を失ひ、家を滅ぼすは、何れの所に世を遁れん。汝須く一身の安堵を思はゞ、先づ四表の靜謐を禱る

可し。中に就て、人の世にあるや、各後生を恐る。是を以て或は邪教を信じ、或は謗法を貴ぶ。各是非に迷ふを悪むと雖も、猶佛法に歸することを悲しむ。何ぞ同く信心の力を以て、妄に邪義の詞を宗とせんや。若し執心飜さず、亦曲意猶存せば、早く有爲の鄉を辭して、必ず無間の獄に堕せん。所以は如何。大集經に云く、若し國王あつて、無量世に於いて、施戒慧を修するも、我が法の滅せんとするを見て、捨てゝ擁護せずんば是の如く種ゆる所の無量の善根悉く滅失し、乃至其の王久しからずして、當に重病に遇ひ、壽終の後、大地獄に生ずべし。王の如く、夫人太子大臣城主柱師郡主宰官も亦復是くの如くならんと。仁王經に云く、人佛教を壞らば、復孝子なく、六親和せずして、天龍も祐けず。疾疫惡鬼日に來りて侵害し、災怪首尾し、速禍縱橫、死して地獄餓鬼畜生に入らん。若し出てゝ人とならば、兵奴の果報ならん。譬の如く、影の如く、人の夜書するに、火は滅すれども、字は存するが如く、三界の果報も亦復是くの如しと。法華經第二に云く、若し人信ぜずして、此の經を毀謗せば、乃至其の人命終して、阿鼻獄に入らん。同第七卷不輕品に云く、千劫阿

鼻地獄に於て、大苦惱を受くと。涅槃經に云く、善友を遠離し、正法を聞かず、惡法に住する者、此の因緣の故に、沈沒して、阿鼻地獄に在りて、受くる所の身形縱橫八萬八千由旬ならんと。廣く衆經を披き見るに、專ら謗法を重んず。悲しい哉、皆正法の門を出てゝ、深く邪法の獄に入り、惡なる哉、各惡敎の網にかゝりて、鎭に謗敎の網に纏はる。此の朦霧の迷彼の盛焰の底に沈む。豈愁へざらんや。豈苦しからざらんや。汝早く信仰の寸心を改めて、速に實乘の一善に歸せよ。然れば則ち三界は皆佛國也。佛國其れ衰へんや。十方は悉く實土也。實土何ぞ壞れんや。國に衰微なく、土に破壞なくんば、身は是れ安全にして、心は是れ禪定ならん。此の詞此の言信ずべく崇む可し矣。客の曰く。今生後生誰か愼まざらん。誰か恐れざらん。此の經文を披きて具に佛語を承るに、誹謗の科至つて重く、毀法の罪誠に深し。我れ一佛を信じ、諸佛を拋ち、三部經を仰ぎて、諸經を閣きしは、是れ私曲の思ひにあらず。則ち先達の詞に隨ひしなり。十分の諸人も亦復是くの如くなる可し。今世には性心を勞し、未生には阿鼻に墮せんこと、文明かに、理詳かなり。

疑ふ可からず。彌〻貴公の慈誨を仰ぎ奉、愚客の癡心を開き、速に對治を回らして、早く泰平を致し、先づ生前を安んじ、更に沈後を扶けん。唯我れ信ずるのみにあらず。又他の誤を誡めんのみ。

文應元年 太歲庚申 之れを勘ふ。正嘉より之れを始め、文應元年に勘へ畢る。

封事は侍讀大學三郎能本に依つて、問注所に讀みあげられた。列座の大小名も日蓮の大膽不敵に驚いたてまつらう、安國論は冷靜に考ふれば、實に亂暴極まる惡口罵詈である。況んや、法然上人は當時佛陀の再來ともいふべき碩德高僧である。而も日蓮の信仰に依れば、彼は惡魔たるを免れぬ。日蓮には、唯信仰あつて、何物もないのである。是れが彼の熱烈なる信仰の幕府に向つて爆發した最初であつて、又最も壯烈を極め、痛快を叫ばしむるものである。

第十六章　松葉が谷の法難

日蓮は立正安國論を草して、執權を諫めたが、流石に賢明なる時賴も其の言辭の激烈なると、且つは自ら禪宗の篤信者であつたので、大いに怒つた。之れ

を傳へ聞いた禪、念佛、眞言の壇はかねて日蓮を憤つて居たので、幕府の怒に觸れた一狂僧、殺すも、屠るも何の咎かあらんと、勇み進んで、手に松明おつ取り、名越松葉が谷を指して攻め寄せ、闕を作つたので、反撥は谷々に震うて、小庵今や唯一炬の下に焦れんと見えた。

折しも、七月の庚申、十六夜の月はほの白う松の葉越に榮の戸にさし込むの二人が居るばかりであつた。菴には進士太郎善春と能登坊を投じたので、忽ち燃え上る焔に、菴室半ば灰燼に歸し、危難身に迫つた。善春と能登坊は死物狂ひに奮戰するうち、日蓮は山の奥なる山王堂の洞に身を隠し、僅に難を免れたが、夜はほのぼのと明け離れてみると、住みなれし菴は元の野原となり、餘燼に夢のやうな煙が立昇つて居るばかりである。

鎌倉では名越の狂僧昨夜焼死したとの噂が高かつた。之れを傳へ聞いた下總若宮の富木胤繼は大いに驚き、氣の利いた侍を遣はして、日蓮の安否を探らせたところが、幸にも名越の奥に日蓮を見出したので、大いに喜んで、若宮に

伴ひ、富木の館にしばし疲れを休めた。かくて、胤繼は法華堂を建立した。日蓮は若宮に留まつて、慕ひ來る老若男女に、妙法の功德を說き、一日も怠ることがなかつたので、多くの信徒を得た。就中曾谷敎信、嫡子直秀、女芝崎、白井の住人秋元太郎、太田太左衞門乘明等は其の著しいものであつた。殊に太田乘明は富木家の緣族で、厚く日蓮を信じ、一子太郎を法弟となした。是れ即ち日高である。斯くの如くにして、日蓮の宗風は益〻下總に振うた。

暫くするうちに、富木胤繼は人を出だして、名越の菴室を再建させ、新築既に落成に及んだので、日蓮は再び名越に歸り、法華正法の大旗を飜した。然るに、北條重時は日蓮を惡むこと甚だしく、如何にもして怨みを報じ、害を加へんと苦肉の策を回らして居たが、既に隱居して居たので、如何ともせん術がなかつた。偶〻時の執權北條時宗は曠世の英雄なれど、未だ幼少で、重時の子長時が政を執つて居た。重時は之れに依つて、素志を遂げんと考へ、長時と圖つて、弘長元年辛酉五月十二日の朝、菴室小路に日蓮を捕へ、問注所の裁判もなく、直に由井が濱から船に乘せて、伊豆へ遠島に處した。

「警固の武士は嚴重に日蓮を守護して、近づく人を寄せつけず、將に纜を解かんとして居たが、當時比企が谷に居て此の噂を聞いた日朗は大いに驚き、直に徒跣で馳け付けたが、無慙なるかな、親とも師とも頼む日蓮は、既に船に乘せられて、伊豆伊東に向つて流罪に送られんとして居るのを見て、かよわき腕に船の纜を引き留め、「我は流人日蓮が弟子日朗なり。何卒我も師と共に伊豆に流し給はれよ」と、聲を限りに叫ぶので、船人等は大いに怒り、「何を狼藉な青道心め、纜放さずば、目に物見せん」と、櫂おつとつて、纜に縋つて居た右の腕を打つたので、未だ弱少の日朗、右の腕を折られ、磯邊に打倒された。日蓮は之れを見て、舷に立上り、「侍衆よ。かの日朗は幼少より愚僧が侍弟、一日も傍を離れぬ不便の者なれば、一言離別の言葉許されよ」と、會釋して汀に向ひ、「日朗よ。日朗よ」と呼びかけ、「豫ての教誨を忘るゝなよ。いかに、日朗。此の日蓮は末法末代の濁惡世に、御經を擔ぐる故、或は杖にて打たれ、或は流罪遠島に處せらるゝ事も物の數ではないぞ、勘持品にも、此の御經を擔ぐる者は、或は刀杖を加へられ、瓦石を投ぜられ、流罪死罪に處せらるゝと、三千年の昔釋迦佛はお說きなされしぞよ。

日蓮如來の御言葉に違はず、斯うなる上からは、法華經の弘通も疑あるまじ。唯法の爲に汝が身を愛せよ。此の地と伊東は西東、八重の潮路を隔つれど、日輪東に登る時は、日蓮は伊東に居ると思うて呉れよ。月西山に傾く時は、日朗鎌倉にありと思うてあらう程に、身を愛して法の爲に盡せよ。日朗さらば、身を大切に致されよ。」と涙を含んで諭したので、砂地に倒れた日朗も、片手を力に起き上りて、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と題目を唱へて、涙ながらに見送つてをる。日蓮は珠數をあげて、法華經の行者の迫害を受くるは經文既に之れを記す。日朗勉めよと勵して、「此經難持、若暫持者……」と寶塔品の偈文を聲高らかに打誦すれば、一聲高く、一聲低く、南無妙法蓮華經、蓮華經と、船は漸く遠かつて行く。汀には踏依の男女聲を限りに別れを惜んで居た。中を隔つる無心の水は漫々として、由井の浦浪鞺々と、一片の帆影は雲煙縹渺の間に隱れてしまつたのである。

第十七章　伊東の法難

日蓮は由井が濱邊に日朗に別れ、追手に帆をあげて伊豆に向うたが、折しも、海上忽ち暴れ、波荒立ちて、船の進退も自由を失ふ程になつた。是に於いて、護送の官人等は、鎌倉殿に惡まれし狂僧、生命を斷つも咎はあらじと侮つて、伊東近くの沖に大きな巖があつたので、日蓮を此處に下し、「見られよ。彼處の森が伊東である。けふは海上暴れて、船の進退も利かぬ故、御僧磯傳ひにかしこに行かれよ」と、頤て敎へて、己れ等は急いで、帆を張り、由井が濱に引還した。日蓮は峨々たる大巖の上に下されて、あたりを見回しても、唯白浪の打寄するばかりで、道もない有樣、是れは畢竟日蓮を流人と侮り、海の藻屑となさんとするのであらうと悟つたが、行かうとしても船はなし、路はなし、途方に暮れて、心を靜め、大巖の平たき處に坐を占めて心靜に題目を唱へて居た。其の時、一葉の小舟に棹して、竹の子笠に腰蓑した一人の漁夫が漕ぎ寄せて、日蓮を見て驚き、「此處は魚俎岩（まないた）といふ離れ岩で、潮が滿つれば、海の底に沈むところでございます。

御僧はどうして斯る危いところに居給ふか。早くやつがれが船に召し給へ」と、懇に勸めたので、日蓮も大いに喜び、一伍一什を語つて、やつとのことで危き一生を助かつた。

さて件の漁夫は、人顏見えぬ黄昏時に、磯に着いて、妻を呼び、今宵は母の十三回忌、何とぞして回向したいと思うても、思ふに任せぬ貧のつらさ。幸ひ此の御僧を救ひ申したことゆゑ、御身も我も功德にならう程に、早く介抱致してくれよと話したところが、妻は耳に口を當て、今日地頭殿より、鎌倉の流罪の僧をかくまふ者は、重き罪科ぞとの御觸れがありましたといふので、夫婦は、窃に日蓮を納戸に隱し、心ばかりの夕餉を捧げ、まめまめしく勞はつた。日蓮は非常に夫婦の誠心を喜んで、我れは鎌倉殿に忌まれて、四面皆敵であるのに、どうして見も知らぬ夫婦に、斯程迄に厚き介抱を受くることであらう。或ひは日蓮が父母の伊豆に生れ變つて助けて下さるのでゞもあらう。殊に此の頃は米も乏しい飢饉の際に、かくまで厚き深切はいつの世にか忘れ申さんと深く喜んだ。かくて、三十日許漁夫彌三郎の宅に隱れて居たが、彌三郎夫婦も、日蓮の

說法を聽いて、熱心なる信者となつた。日蓮は深く彌三郎夫婦を德としたと見えて、「遺文錄」の中には、彌三郎に宛てた書狀が殘つて居るが、一字一句感謝の情にあふれてをる。此の遺文を讀む時は、いかに彼が迫害されたかを知ることが出來るであらう。

其の頃伊東の領主は莊司八郎左衞門朝高であつたが、朝高は五月の半ば頃から、惡病に罹り、正氣を失うて、非常な激病であつた。固より地頭のこと故、醫藥針艾の術を盡し、祈禱禁厭の法を盡して行うたが、少しも效驗が見えなかつた。偶、伊東の親族に綾部正清といふ者があつたが、熟、思ふやう。日蓮は鎌倉殿に忌まれて、此に流罪となつた僧ではあるが、聞けば其の讀む御經は法華經といふ尊い經であるとのこと、日蓮を招じて、領主の病を癒したいものであると考へ、日蓮に請うたが、日蓮は之れを辭した。然も正清は請うて止まなかつたので、六月十七日に、日蓮は正清に伴はれて、領主の館に入り、朝高の枕邊に讀經したが、さしもに重き朝高の病も、三日にして平癒したと傳へてをる。是れより朝高は日蓮を命の親と尊び、信心肝に命じ、無二の篤信者となつた。

此の事は寧ろ奇蹟に屬して信ずるを得ざることであるが、日蓮の偉大なる人格が何等かの機會に依つて、地頭の心服を得たことを說明したのであらうと解して置けば十分であらう。

日蓮は幽囚遠島の間にも幾多の熱心なる信者を得ていかに心強く思つたであらうか。啻に地頭を改宗せしめたのみならず。かつて寧樂留學の時彼れを泊めた江川太郎左衞門吉久は當時韮山に居たので、噂を傳聞し、種々の贈物を持つて、彼れを訪うた。日蓮は大いに其の志を喜んで一乘の御法を說き、吉久一族を歸伏せしめた。然も、天は自ら助くるの人を助くて、伊東に於ける日蓮の法運は此に止まらなかつた。彼れは、多くの人を歸服せしめ、今や衣食餘りあるに至つた。加之、鎌倉にある工藤吉隆を始め、進士善春、池上宗仲等は人を遣して、彼の安否を問ひ、衣服調度を送り、日朗日興は折々尋ね來つて、師弟互に恙なきを喜んだ。

かく、日蓮は伊東にあつて、說法怠りなきのみならず。名越の松葉が谷の庵には、日朗日興等殘り、盛んに法門を說いて居た。其の頃天台の僧大乘坊とい

ふもの、松葉が谷に尋ねて來て、日蓮の門下に列したいと請うたが、日蓮は今や鎌倉に居ないので、日昭の法弟とならんことを請うた。然るに、日昭は思ふ所があるといつて之れを謝した。是に於いて、大乘坊は歸依の念已み難く、少時松葉が谷の庵に逗留して、門下の振舞に感じ、遂に日朗に請うて師弟の約を結んだ。時に日朗は漸く十八歳の青年て、大乘坊は二十一歳てあつた。大乘坊は後に日澄と呼ばれた人てある。

日蓮は斯くの如く、生死の境に出入し、明日をも知らぬ危急の場合例へば、白刃の下にある時ても、其の信ずる所を說いて、法華經の弘通を計り、自己の信仰を傳道するのを怠らなかつた。彼れは、渺たる一漁夫の子てある。然も堂々として、天下の大都に其の所信を披瀝し、天下の宗教を敵として戰ふを辭せなかつた。天變地異は法華經を信ぜぬ佛罰天罰てあるといふ彼れの考は間違つて居るかも知れぬ。併しながら、彼れはかく信じて疑はぬのてある。彼れは此の確信よりして、天下を妙法に歸せしめ、以て天地の怒りを解き、以て萬民を塗炭の中に救はうと決心した。而して封事を幕府に上つて、之れを極論し

た。彼れの信仰や極端て、彼れの擧動や激烈常軌を逸して居るてあらう。然も彼れは斷として之れを信じ、未だ一寸一分も之れを疑はぬのてある。此の點に於いて、確に彼れは狂僧てある。併しながら、彼れを活し、彼れを導いたのは此の信仰てある。而して彼れは鐵火の下にも此の信仰を貫くことを躊躇しなかつた。彼れの信仰は北條一家の劍を以てするも代ふることが出來なかつた。日蓮の眞價は此にある。彼れは信の人てある。彼れは自己の信を楯として、天下を敵とするを辭せざる底の英靈漢てある。よし日本國を與へ、王位を讓らんと言はるゝも、法華經にして行はれずば何かせん。われ日本の柱とならん。我れ世の大船とならん。此の願若し滿たずんば刀杖頭に至るは愚か、日蓮が身は碎かれ、裂かれ、斬られ、屠られても、我は一歩も退かぬ。此に彼れの勇猛心が潛み、此に彼れの光彩がある。ルーテルはウルムスの會議に召喚された時に、彼れが敵中に投ずるを危んて、之れを止めた者があつた。其の時ルーテルは傲語した。「假令ウルムスの瓦が悉く鬼なりとも、われは此に立つ。ルーテルは行くことを辭せぬ」。日蓮の信念の固いことはルーテルと

雖も、一歩を讓るかも知れぬ。例へば日蓮は赤熱した鋼鐵である。彼れを叩けば、火花が閃々として飛ぶ。彼れを殺すことは出來る。然も彼れを服することは出來ぬ。彼れは山上に聳ゆる巨櫬である。烈風之れを折り迅雷之れを裂くことは出來るかも知れぬが、之れを撓め、之れを屈することは出來ぬ。彼れは東西南北の風に隨つて靡く蘆てはない。彼れは、鎌倉の大廣間に於いて、「身は從ひ奉るとも、心は從ひ奉るべからず」と宣言した。日蓮の大は此にある。彼れは利器である。劍である。必ずや、盤根錯節を斷ち、炎々天を焦さずにはをまぬ。人若し日蓮を狂といはゞ、そは未だ彼れの金豹を知らぬ言である。日蓮は世の謂はゆる狂人ではない。若し彼れに擬するに狂名を以てすることが已むを得ぬならば、彼れは大狂である。名譽を超脫し、黃金を超脫し、生命を超越し、狂を超越した大狂である。偉狂である。聖狂である。古往今來宗教意識の高潮に達し、燦爛として光を放てるもの何ぞ限あらん。然も古今を併合し、乾坤を空却し、堂々として、活歩するものは彼れである、彼れは實に「男子の男子」であり、「人傑の人傑」である。是に於いてか、彼れの周圍に來るもの

は、盡く赤熱して飛揚するのである。

○船守彌三郎許書

わざと使を以てちまき、さけ、ほしひ、さんせう、かみしなじな給候ひ畢んぬ。又つかひ申され候は御かくさせ給へと申上候へと。日蓮心得申べく候。日蓮去る五月十二日流罪の時その津につきて候しに、いまだ名をもきゝよびまねらせず候ところに、船よりあがりくるしみ候ひきところに、ねんごろにあたらせ給候し事はいかなる宿習なるらん。過去に法華經の行者にてわたらせ給へるが、今末法にふなもりの彌三郎と生れかはりて日蓮をあはれみ給ふか。たとひ男はさもあるべきに女房の身として食をあたへ洗足てうづ其外さも事ねんごろなる事、日蓮はしらず不思議とも申すばかりなし。ことに三十日あまりありて、內心に法華經を信じ、日蓮を供養し給事いかなる事のよしなるや。かゝる地頭萬民日蓮をにくみねたむ事鎌倉よりもすぎたり。みるものは目をひき、きく人はあだむ。ことに五月のころなれば、米もとぼしかるらんに日蓮を內々にてはぐくみ給しことは、日蓮が

父母の伊豆の伊東かはなと云ところに生れかはり給か。法華經第四に云く。及清信士女供養於法師と云々。法華經を行ぜん者をば、諸天善神等或はをとことなり、或は女となり、形をかへさまざまに供養してたすくべしと云經文なり。彌三郎殿夫婦の士女と生れて日蓮法師を供養する事疑なし。（中略）しからば夫婦二人は教主大覺世尊の生れかはり給て日蓮をたすけ給か。伊東とかはなのみちのほどはちかく候へども心はとほし。後のためにふみをまゐらせ候ぞ。人にかたらずして心得させ給へ。すこしも人しるならば御ためあしかりぬべし。むねのうちにおきてかたり給事なかれ。あなかしこあなかしこ。南無妙法蓮華經。

弘長元年六月二十七日

日蓮 花押

船守彌三郎殿許遣之

第十八章　小松原の法難

重時が日蓮を伊東に流したのは弘長元年五月であつた。然るに、其の年十

一月三日彼れは發狂して死んだのである。傳ふるところに依れば、重時の死後、其の子長時、執權北條時宗も、毎夜あやしい夢に襲はれ、重時が火の車に乘つて泣き苦しむ樣を幻影に見たので、數多の僧を請待して、日毎に法華經五部宛を寫させ、追善供養を營み、日蓮を喚返す方然るべしといふ事に評議一決した。是に於いて、弘長二年十一月十一日赦免狀を認めたが、翌年の五月二十二日に之れを伊東に傳へた。日蓮は大いに喜んで、信徒の人々に別れを叙し、名越に歸つたので、歸依渇仰の徒は四方から、松葉が谷の庵室に集まり、歡喜の涙を浮べた。其の夜、燈火を擁して、日昭日朗以下の徒弟信徒評議して、大法も既に關東に輝き、法華經の弘通も其の緒に就いたので、暫く諸門他宗を攻撃する折伏を止め、妙法の說數のみなされては如何てあらうと諫めたが、日蓮は頑として聽き入れず、今若し折伏を捨つるならば、病中に藥を廢するやうなもので、諸宗の毒惡盡く募るてあらう。假令折伏の大劍を揮ひ、諸宗益〻敵視し、迫害するやうになつても、刀杖擯出遠島等の法難の中に、一乘の光は輝きいづるてあらうと言つて勇氣百倍し、雙眉昂るの概があつた。

かくて夏過ぎ、初秋風も葛の裏葉を吹くころとなつたが、八月二十四日には、鎌倉に暴風が吹いて、雷鳴天地を撼かし、由井が濱には沈沒難破する船八十餘艘に及んだ。續いて、十一月二十二日には、賢明の譽れ高く、天下の民父のやうに慕つて居た前執權最明寺時賴享年三十七歲にして、山下の露と消え、たなびき渡る雲の色も諸行無常の影を浮べた。かくて、執權は幼少なり、賢君は逝くといふ有樣で、人の心も何となく騷がしくなつて來た。其の頃、駿州庵原郡の人、松原六左衞門は深く日蓮を信じてゐたが、一子松千代を門に入れて、徒弟となした。松千代此の時齡二十一歲。後に日持と呼ばれて、六老僧の一人となつた。

日蓮は今は憂ふるところもなく、草の庵に齟け行く月を見るにつけ、鎌倉山に鳴き渡る雁が音を聞くにつけ、めかり、鹽焚く磯の苫家に、老いたる母はいかにおはすらんと案じ出して、故郷の空なつかしく思うたので、日朗、日澄の兩人を連れて、たえて久しき安房の國小湊の里に老母を省した。母は重病に臥して居たが、我が子の歸りを大いに喜んで、病氣忽ち平復し、積る話に有明の燈火

盡くるを覺えなかつた。日蓮は母を省して、既に其の心を慰めたので、いかにもして道善坊を說いて、一乘の妙法に歸せしめ、師恩を報いんと思ふ心は止まなかつた。かくて華房の蓮華寺に入り、日蓮歸り申したりと清澄寺に知らせたので、道善坊は大いに喜び、紫竹の杖に助けられて、蓮華寺を訪うた。日蓮今は勘當の身ながら、懇に唱題成佛の旨を說き勸めたので、道善坊も心解け、得るところあるかの如く、喜んで清澄に還つた。而して、日蓮は此の時、又一個の龍象を漁つたのである。即ち當國男金村の住人、小林民部實信は藤十郎といふ今年十一歲なる一子を日蓮に捧げた。日向即ち是れである。日向は後に六老僧の一人になつた俊傑である。

一難去つて一難來り、一波收つて一瀾起る。日蓮の敎へは今や鎌倉を中心として、西は伊東、東は若宮、東條に旭日の勢を以て、普及したが、日蓮が清澄の獅子吼より憤りを抱いて居た地頭東條左衞門景信は怨みを含み、時の至るを待つて居たが、幸か、不幸か、日蓮の信者、天津の領主工藤左近之丞吉隆は十一月の十一日、日蓮を其の館に招じたので、當時、華房に居た日蓮は、日朗、日澄、鏡忍、乘觀

等男女の信徒十餘人と午の刻に蓮華寺を出て、聲高らかに、題目を唱へつゝ天津に急いだ。然るに、東條左衛門景信は時こそ到れと打喜び、腹心の士百餘人を小手腹卷に身を固め、暖つゞきの小松原に伏せ置いて、日蓮今や來ると待受けた。日蓮の一行はそれとは知らず、黄昏れかゝる浦路を小松原にさしかゝり、略、中程に進んだ頃、かなたの松陰、こなたの暖かから合圖の笛に聞を作り、刃を亂して討ち懸つた。味方は黒染の衣に珠數よう外は持たぬ人々て、防がうとしても致し方がない。僅に物の用に立つ者は、鏡忍等二三人に過ぎぬ。日朗日興等の徒弟は、斬りまくられ、蓮ぎたてられ、日蓮の生命も風前の燈火。東條左衛門景信は馬の鐙を踏み鳴し、二尺七寸の大太刀眞向に揮翳して、念佛を罵り、眞言を喚る佛敵法敵護法の刃受けてみよと日蓮目がけて切りつけたので、日蓮すかさず念珠を以て受け止めたが、切先餘つて、額に三寸ばかり負傷した。折しも、工藤左近之丞吉隆は日蓮を迎へん爲、二三の人々を伴うて小松原にかゝつたが、この變事を望み見て仰天し、太刀提げて驅け付けた、然も多勢に無勢の悲しさは、東條が郎黨に取卷かれて募なき最後を遂げ、鏡忍坊も亂軍の間に

討死し、此に悲慘なる二人の殉教者を出だした。日蓮は黄昏糢糊として遠近を辨ぜぬを幸ひ、身を以て急を免れ、市が坂の畔に落延びた時、一天掻曇つて募雪紛々と降り亂れ、額の疵に沁み入る寒風に、痛さ堪へ難くなつたので、傍らの洞に暫し身を憩まして居た。其の時一人の老婆行きあひて、之れを憐み、己の冠つてをる綿帽子を脱いて日蓮の額を覆うたと傳へて居る。日蓮は寒夜を山洞に凌ぐ中に、日朗日澄等が尋ねて來たので、安堵の思ひをなして居ると、吉隆の父行光は變事を聞いて迎へに參り、自ら手を執つて、天津の邸に招じたので、危き命を助かつたのである。日蓮は深く吉隆、鏡忍の死を悲しみ、懇に之れを弔ひ、吉隆の遺子を徒弟とした。後に刑部阿闍梨日隆と呼ばれたのは即ち是れてある。

日蓮は小松原の難後、上總下總より下野を巡錫し、多くの歸依者を得、宇都宮を過ぎ、少しく中風の氣味があつたので、那須の温泉に浴して、疲れを癒し、又東條に歸つたが、此の時慈母を失うた。かくて、亡母のなき跡を懇に弔うて、下總若宮に行き、宮木胤綱の館に年を送り、再び鎌倉に入る準備を整へた。

第十九章　蒙古來

鎌倉には先年以來天變地異打續き、人心恟々として、落着く暇もなかつたが今年も亦秋田義景十三回忌の大法會を無量寺に行ひ、若宮別當隆辨僧正導師として、十種の供養を執行したが、法會の最中に、大風捲き出て、大雨降り注いで、參集の人々即死するもの多く、之れと同時に龜が谷の山崩れがあつて、人馬を埋め、八月十七日には武藏相摸一圓大地震、十二月四日には一大彗星あらはれ、光芒七十餘丈に及んだので、鎌倉府中は上を下への大動亂、修法禁厭の祕法を盡し、諸寺諸社の祈禱御の齒を引くが如くてあつた。即ち若宮の僧正は金剛童子の法を修し、安祥寺の僧正は、如法尊勝王の法を行ひ、陰陽師業昌は天地災變の祀りを修め、同國織は屬星の祀りをなすといふ有樣。加之、將軍宗尊親王は事を以て、職を奪はれ、

かへり來て又みんことも片瀨川
濁りし水の澄まぬ世なれば

と詠じて、京都に追還され、御子惟康親王僅に三歲なるを征夷大將軍となし、天下益〻多事であつた。

飜つて海の彼方を考ふれば、大元既に明を滅し、威風凛然四百餘州を風靡し、朝鮮既に屈服し、一擧して我が大八洲を呑まんと圖つて居た。世祖忽必烈は其の至元三年黑的を使者として、朝鮮王王植は其の臣潘阜を添へ、國書を齎して我が國に遣した。かくて、黑的、潘阜の二人は博多に着し、太宰府を經て、戊辰の春、正月十八日京都に來たり、國書を捧呈した。朝廷之れを披き給うたが、辭無禮を極めて居るので、之れを鎌倉に下して、返書の義如何あらんと評議を凝さしめ給うた。執權北條時宗は之れを覩て、大いに怒り、返翰に及ばず、使者を追還し、西國の大小名に令して、邊海の防備を嚴にし、太宰府をして水城を增築せしめた。此の時に當つて、天變地妖又々あらはれ、全國の人心恟々として、今に一大難出來せんと恐れ戰いて居た。日蓮は窃に思ふやう、斯く天變地異竝び起り、外夷邊境を窺ふは、日蓮が言葉を用ゐず、禪、念佛、眞言、律等の方便權假の邪敎を奉じて、法華一乘の妙法を斥け、正法の行者を迫害する佛罰天罰てあ

る。之れを改めずんば、必ず他國侵逼難起つて大元我が國に寇するに相違ない。速に非を改めさせたいと考へて、奉行宿谷左衞門光則の邸に一書を送つて述ぶるやう。「日蓮過る文應庚申の七月、一書を認め、立正安國論と名づけ、御館に捧げて、諫言を上つてより既に九年、正嘉の大地震、文永の彗星、飢饉さては疫癘。又今の度の蒙古の大難、日蓮が啓するところと符節を合するが如くてはござらぬか。此の大難を退治するもの日蓮が外にあるべしとも覺えず。聊か國の爲、法の爲言上すること斯くの如し」と論じたが、光則は何の答へもしなかつた。依つて、日蓮は十一月十一日一通を執權時宗に上つて、天下の危急を論じた。曰く。「凡そ天下の危急存亡は法の邪正に因ること、既に是れ先年安國論に申し述べた通りてある。仰ぎ願くは、諸宗の學者智識を悉く問注所に召し集め、此の日蓮と對決させ、法の曲直高下を定めしめ給へ。かくして、我が法華一乘の法と諸宗との權實明になる上は、邪宗を棄てゝ法華經に御歸依あらば、此の國安泰ならんこと、掌を反すが如くてあらう」と極論した。而も日蓮は之れを以て足れりとしなかつた。彼れは更に九通の書狀を認め、平左衞

門頼綱、北條彌源太、極樂寺の良觀、建長寺の道隆、大佛殿の別當隆觀、淨光明寺の行敏、壽福寺、多寶寺、長樂寺に送つて法論を挑んだ。流石の日蓮も斯くの如く大膽不敵の法戰の大宣言を發したのて、非常な結果の來るべきを豫想し、法弟檀越の輩に、今に大迫害の避くべからざるを告げて、之れに驚くべからずと命じた。

明くれば、文永六年二月二十一日の曉、月輪が三つ現れたといふので、鎌倉の人心は又々動搖し出した。然るに四月上旬元主忽必烈は再び國書を添へて使者を送つたが、時宗令して之れを追うたので、元使は對馬の民を捕へて還つた。是に於いて、京、鎌倉の風說甚だ高く、如何なる大事に及ぶてあらうかと、尊きも、賤きも、宮中、府中、都も鄙も安き心はなかつた。

さて、日蓮は先に鎌倉中の諸大寺に書を送つて、之れを難じ、之れを罵つたので、諸寺の僧徒も大いに怒り、殊に極樂寺の良觀は高德の律僧て、幕府の歸依も厚かつたので、時宗に說いて、狂僧日蓮を除くべしと極論した。斯くの如くにして、危難の霧は刻々に日蓮の身邊に迫つて來たのてある。

此の間に於いて、日蓮は甲州に遊び、吉田口から富士山に登り、十三州を睥睨して、教化を布き、少なからぬ信徒を埋めた。山を下つて後は、山麓甲駿の地を巡錫して、教化を布き、少なからぬ信徒を得た。

明くれば文永八年辛未、春霞まだ薄き滋賀の湖邊を縫うて、早馬は京都から鎌倉に向つた。蒙古の使者が三たび到來したのである。元主は兩度の使者の空しく還つたのにも懲りず、返翰の怠慢を怒り、趙良弼を使者として、太宰府に送つた。天下の人心は益〻動亂して來た。武士は槍を拭き、刃を磨いて合戰の用意怠りなく、近畿中國の將卒は筑紫に馳せ向ひ、太宰府は益〻防禦を嚴にした。而して、執權時宗は元使を由井が濱に斬つて、天下に決戰の已む可からざるを示した。

外難は黑雲の如く邊海を壓して、今や崩れ墮ちんずる勢ひを示して來たが、世は類稀なる大旱で、河川一滴の水なく、四月五月の植付は愚か、井水も涸れ果つるといふ慘狀、極樂寺の良觀靈山が崎に壇を築いて雨を禱つたが、一七日、二七日、何の効果もあらばこそ、雨一滴降るてはなく、炎天六月金砂を融かし、空し

く崩るゝものは雲の峰のみてあつた。

而して、觀よ、朝鮮の西、靺鞨の南、大元四百餘州の山河は今や殺氣蓬々として天に漲り、旌旗は翻々として日月を蔽ひ、十萬の艨艟舳艫相銜んて、將に玄海を壓せんと、準備をさをさ怠りなかつた、見渡せば、碧波縹渺たる博多灣頭、魚龍泣き、鮫鯨吼え、千里の悲風空しく多々良濱邊の青松を搖がすのみてある。

○宿谷入道許狀

其後は書絕て申さず、不審極り無く候。抑、去正嘉元年丁巳八月二十三日戊亥の刻の大地震、日蓮諸經を引て之を勘ふるに、念佛宗と禪宗等とを御歸依あるが故に日本守護の諸大善神瞋悲を作して起す所の災也。若し此對治無ん者佗國の爲に此國を破らる可き之由勘文一通之れを撰し、正元二年庚申七月十六日御邊に付し奉て故最明寺入道殿へ之れを進覽せり。其後九箇年を經て今年大蒙古國より牒狀有之由の風聞す等云云。經文の如んば彼國より此國を責めん事必定也。而るに日本國の中には日蓮一人當に彼西戎を調伏する之人爲る可しと兼て之れを知り論文之れを勘ふ。君の爲、國の

爲、神の爲、佛の爲、丙奏を經らる可き歟。委細之旨は見參を遂て申す可く候。恐恐謹言。

文永五年八月二十一日　　日蓮 花押

宿谷左衞門入道殿

○與北條彌源太書

去月御來臨急急御歸宅本意無く存ぜしめ候ひ畢んぬ。抑、蒙古國牒狀到來の事上一人より下萬民に至るまで驚動極り無し。然りと雖も、何の故なること人未だ之れを知らず。日蓮乘て存知せしむる之間一論を造て之れを進覽せり。徵し先達て顯れ則災必後に來る。〔中略〕日本亡國の根源は淨土眞言禪宗律宗の邪法惡法より起れり。諸宗を召し合せ諸經勝劣を分別せしめ給へ。殊に貴殿は相摸の守殿の同姓なり。根本滅するに於ては枝葉豈榮えん乎。早く蒙古國を調伏し國土安穩ならしめ給へ。法華を謗する者は三世諸佛の大怨敵也。天照太神八幡大菩薩等此國を放ち給ふ故大蒙古國より牒狀來る歟。自今已後各、生取と成り佗國の奴と成る可し。此趣

方方へ之れ驚かし愚狀を進めしめ候也。恐恐謹言。

文永五年戊辰十月十八日　　日蓮 花押

謹上　彌源太入道殿

○與建長寺道隆書

夫佛閣軒を並べ法門屋に拒る佛法の繁榮は身毒支那に超過し、僧寶の形儀は六通の羅漢の如し。然りと雖も一代諸經に於て未だ勝劣淺深を知らず併しながら禽獸に同じ。忽ち三德の釋迦如來を拋て佗分の佛菩薩を信ず。是れ豈逆路伽耶陀の者にあらずや。念佛は無間地獄の業、禪宗は天魔の所爲、眞言は亡國の惡法、律宗は國賊の妄說と云云。爰に日蓮去ぬる文應元年の頃、勘へたる書を立正安國論と名け、宿谷入道を以て故最明寺殿に奉りぬ。此書の所詮は念佛眞言禪律等の惡法を信ずる故に天下に災難頻に起り、剩へ佗國より此國を攻めらるべき之由之を勘へたり。然るに去る正月十八日牒狀到來すと。日蓮が勘へたる所に少しも違はず符合せしむ。諸寺諸山の祈禱威力滅する故歟將又惡法の故なる歟。鎌倉中の上下萬人道隆聖

人をば佛の如く之れを仰ぎ、良觀上人をば羅漢の如く之れを尊む。其外壽福寺多寶寺淨光明寺長樂寺大行殿の長老等は我慢心充滿未得謂爲得の增上慢の大惡人なり。何ぞ蒙古國の大兵を調伏せしむ可けん乎。剩へ日本國中の上人萬人悉く生取と爲る可く、今世には國を亡し、後世には必ず無間に墮せん。日蓮が申す事を御用ひ無くば後悔之れ有る可し。此趣鎌倉殿宿谷入道殿平左衞門尉殿等へ之を進狀せしめ候。一處に寄り集まりて御評議有るべく候。敢て日蓮が私曲之義に非ず。只經論の文に任す之處也。具には紙面に載せ難し、併しながら對面の時を期す。書は言を盡さず。言は心を盡さず。恐恐謹言。

文永五年戊辰十月十一日

日蓮 花押

進上 建長寺道隆聖人侍者御中

○與極樂寺良觀書

西戎大蒙古國簡牒の事に就て鎌倉殿其外へ書狀を進めしめ候。日蓮去文應元年之頃勘へ申せし立正安國論の如く毫末計りも之れに相違せず候。

此事如何。長老忍性速に喎弄之心を驀し、早く日蓮房に歸せしめ給へ。若し然らずんは輕賤人間者與白衣說法之失脫れ難き歟。依法不依人とは如來の金言也。良觀聖人の住處を法華經に說て云く。或有阿練若納衣在空閑。阿練若は無事と飜す。爭てか日蓮を讒奏するの條住處と相違せり。併しながら三學に似たる矯賊の聖人也。僭聖增上慢にして、今生は國賊來世は那落に墮在せんこと必定せり矣。咄も先非を悔いなば日蓮に歸すべし。此趣鎌倉殿を始め奉り、建長寺等其外へ披露せしめ候。所詮本意を遂げんと欲せば對決に如かず。即三藏淺近之法を以て諸經中王之法華に向ふは江河の大海と華山と妙高との勝劣の如くならん。蒙古國調伏の祕法定て御存知有る可く候歟。日蓮は日本第一の法華經の行者、蒙古國退治の大將爲り、於一切衆生中亦爲第一とは是れ也。文言多端事理を盡す能はず、併しながら省略せしめ候。恐恐謹言。

文永五年戊辰十月十二日

日蓮 花押

謹上 極樂寺長老良觀聖人御所

○弟子檀那中書

大蒙古の簡牒到來に就て、十一通の書狀を以て方方へ申さしめ候。定めて日蓮弟子檀那流罪死罪一定ならんのみ、少しも驚くこと莫れ。方方への强言申すに及ばず、是れ併しながら强毒之故也。日蓮庶幾せしむる所に候各、用心あるべし。少しも妻子眷屬を憶ふこと莫れ。權威を恐るゝこと莫れ。今度生死の縛を切つて佛果を遂げしめ給へ、鎌倉殿宿谷入道平左衛門尉彌源太建長寺道福寺極樂寺多寶寺淨光明寺長樂寺已上十一箇所仍て十一通の狀を書して諫諍せしめ候ひ畢んぬ。定めて子細有る可し。日蓮が所に來つて書狀等披見せしめ給へ。恐恐謹言。

文永五年戊辰十月十一日　　日蓮花押

日蓮弟子檀那中

第二十章　龍ノ口の法難

先きには極樂寺の良觀の訴へあり。今又淨明寺の行敏の訴へあり。諸宗

諸寺の訴狀梢の齒を引くが如く問注所の卓上に山を成し、皆狂僧日蓮を除く可し毒惡の日蓮を刎ねて、天下の群類を安堵せしめられよと極論したので、幕府も默し兼ね、九月十日に日蓮問注所に出頭すべしとの嚴命が下つた。日蓮取敢へず、問注所に出頭すると諸宗諸寺よりの訴狀逐一に申開けとの尋問。且つ又汝先君時賴、重時地獄に落ち居る由申し觸らすこと、訴狀に依りて明かなり。何を以て斯る惡言を流布して、天下の生靈を惑はすぞ、逐一に啓すべしとの嚴問。いかに、問注所の正廳劍戟林の如く立ち並んで居る中でも、固より生命は法華經に捧げた豪邁不屈の日蓮、滔々懸河の辯を揮うて、時賴、重時は日蓮が說法を知りながら、一乘の正法を持せず、かるが故に、地獄に墜ちざることもござるまい。世界を照す日月さへ、法華經の敵とならば地獄に墜つるものを、まして況んや人間世界の國王執權をや。又諸宗を破する法門は皆如來の金言にして、一言半句と雖も、日蓮が私の言葉ではござらぬ、若し諸宗の讒奏に依つて、我を死罪に行はゞ、內亂外寇忽ち到らん。大集經、藥師經の文、火を視るよりも明かなり。我が言を用ゐず、諸難續出して後に、後悔あるも、其の詮はご

ざるまい」と憚るところなく切論し、翌朝再び安國論を持つて、平左衛門を訪ひ、執權への取次を請うた。

雨だ。雨だ。見よ。驟雨は沛然として松葉が谷を襲うて來た。幕府は今は捨て置き難し、平左衛門頼綱に命じ、手勢三百人を率ゐて、名越を襲はせた。時は文永八年九月十二日、日蓮年正に五十歳。朝來菴室にあつて、說法して居たところ、漠々たる砂烟天に漲り、劍戟馬蹄の音地をとゞろかすので、何事ぞと、はや暮れかゝる黄昏の空を見渡せば、平左衛門を先頭に幾多の兵卒押寄せ來り、平左衛門は馬上に立上り、大音聲に「やをれ、日蓮、日頃の惡行重罪脫れ難く、今日死罪に行ふべしとの嚴命なるぞ。」と呼はつたので堂に滿ちたる老若男女の驚きは譬ふるに物なく、右往左往に逃げ惑うた。日蓮は急ぎ釋迦の像と、法華經一部を懷にしたが、平左衛門が手の者は潮の如く亂入し、齋藤三郎日蓮の襟筋捉へて高縁より引き下ろし、少輔坊日蓮が懷から法華經を引き出して、其の經を以て、散々に日蓮が顔を打擲した。かくて、兵共は日蓮を引き立てゝ、痩せ馬に蓑薦を敷き、之れに縛りつけて、長刀抜きつれ、三百餘人の者共、前後左右

を取り圍んで、魚町の四辻から小町通りを引き回した。之れを見たる諸宗諸寺の輩は佛敵法敵の日蓮奴が成れの果てを見よ。あな心地よしと嘲り笑はぬものはなかつた。夫れより若宮小路に出て、鶴が岡の前を通つたが、日蓮は頻りに八幡を罵り、漸く七里が濱の方に運ばれた。斯くて急を四條金吾頼基に告げさせたので、頼基兄弟四人は徒跣て走り出て、此の有樣を見て嘆き悲み、馬の轡に縋つて、刑場に伴うた。

日蓮は頼基に打向ひ、

「日蓮は今夜頭を斬られに參るのである。是れ年頃の願ひゆゑ、敢て悔ゆることはない。熟〻世を觀ずるに、或は妻子の爲に生命を棄て、或は財寶の爲に身を滅すものは、大地微塵の數よりも多いが、未だ法華經の御爲に頭を捧げたものはないぞ。日蓮身貧にして父母に孝行も思ひに任せず、國恩を報ずる力もない。今度頭を法華經に奉り、功德を父母に供養し參らせ、其の餘りを弟子檀越に供養せんと思ふぞよ。」

と靜に諭しつゝ、極樂寺の切通しから、七里が濱の方へ送られた。見渡せば、

漫々たる相摸灘の寄せてはかへす波さらさらと、濱の眞砂もほの白う濕ひて、磯邊の松も影を描き、十二日の月低うさし出てた。警固の武士は松明打振り四十二町の波打際を片瀬の方へ急いでゆく。七里が濱と名づけたのは、六町一里て七里の長さあるからてある。片瀬川を越ゆれば間もなく、龍の口てある。日蓮の運命は愈〻惑まつた。

さて此に、片瀬のほとり、津村といふところに、一人の貧しき老婆が住んて居たが、齢は七十に近く、侶るべなき身は、折々鎌倉に出てゝ、寺詣てを樂みとして居たが、不圖したゆかりから、日蓮の說法を聽き、宿緣開發して信心肝に銘し、題目を唱へては歡喜の淚に咽んて居たが、路ゆく人の噂に、日蓮今宵龍ノ口に斬られ給ふといふことを聞いたので、大いに驚き悲んだ。さてあるべきにあらねば、如何にもして聖人に最後の報恩致さんと種々考へたが、固より細い煙をたてゝ居る老の身の、何一つの願ひも協はぬので、背戶に實つた赤小豆、これ幸ひと、牡丹餅を作りて奉らんと打喜び、急ぎ飯を炊いて、今や炊ぎ下したところてあつたが、外面俄にさわがしく、松火の筵がみえたので、やれ後れた。勿體な

い。聖人は何の罪科て斯樣な辛い目に遇ひ給ふことてあらうかと、柴朶の煙に打ち咽び、小豆の鍋をかくるひまもないので、折ふし九月の菊の節句に祝ひ殘りの胡麻鹽があつたから、握り飯にこれをつけて、鍋蓋を裏がへしにして、其の上に胡麻の餅を載せ、淚と共に差出した。日蓮は之れを見て、志辱けなしと快く食べて刑場に送られた。後世日宗ては御首繼餅と稱して、此の老婆の厚き志を記念して、毎年九月十二日に牡丹餅を作ることになつたのてある。

龍ノ口には幔幕打渡し、刑場嚴に整へてある。日朗、日進、日興、日向の徒弟を始め、四條賴基、池上宗仲、荏原等の檀越は師の最期を見奉らんと四方に押かけたが、助くる手段も絕え果てゝをるので、皆淚ながらに、題目を唱へてをる。日蓮は馬の上から引き下され、荒薦の上に坐らせられ、今や劍手の刃を待ちをるのみてある。

然るに、鎌倉の意見一變して、日蓮を助けよとの下知を以て南條七郎早馬を飛ばして、驅付けたので、日蓮は危き生命を助かつた。

○龍ノ口法難に關しては先輩既に說あり。著者も亦說ありと雖も、今は傳說に從

ひて記述するのみ。

第二十一章　師弟の情

夜もほのぼのと片瀬の磯に明け離れ、寄せ來る浪も靜けき九月十三日の曉。日蓮は山陰の巖の上て朝餉をしたゝめ、警固の侍五六人、徒弟信徒に圍繞され幕府の下知に從つて、依智ノ鄕、本間の邸に預けられた。

本間氏は代々鎌倉に仕へ、佐渡加茂郡の領主て、加茂の新穗に政廳を開いて、佐渡一圓を司つて居た。其の領主は佐渡にゆいて居なかつたので、日蓮は本間の一族、本間三郎左衞門に預けられた。かくて、彼の運命は未だ定まらなかつたのてある。

時しも、十三日の月は中天に昇つて、千草にすだく蟲の聲、桔梗の花は夢のやうに露に惱み、刈萱の戰ぎ、萩のこぼれ、すがれ勝なる女郎花も風情を添へて、あす知らぬ生命の花に匂うてをる。思へば安房の東條の一漁夫が子、法華經の御功德を知つて、今や頭を一乘の妙典に捧げんとして辛き生命を生き永へた

のも、佛天の加護、更に教を設いて、群類を度せよとの附囑てあらう。さても、わが日昭、日朗は如何になつたてあらうか。思へば心細き限りてあると流石の日蓮も情深き人なれば、坐ろに暗愁の湧くを覺えなかつたてあらう。其の頃鎌倉から使者あつて、徒弟の消息を告げた。あはれ、法華經の行者は禍なる哉。磔山渡る雁が音も、空しく田の面に影を落して運命はどこまても悲慘てある。

日蓮龍ノ口に斬らるゝ事に定まつたので、日昭、日朗等は刑場まて伴うたが、さてあるべきにあらねば、名越に歸り、日昭は其の餘の人々に旨を含め、自らは由井が濱のほとりに退いたのが十三日の曉てあつた。然るに日朗はさすがに、師の御かたみ、師の御住居をなつかしく思うて、松葉が谷をすてかねて、獨り守つて居たが、幕府の下知に依つて、雜人原名越に押かけ來つて、菴室を取毀たんとした。然るに、日朗が居たので、是れ日蓮が徒てある。それいましめよと無二無三に繩をかけて、引立てた。其の時日進といふ十二三の小法師かけ來り、日朗師を縛むるならば、われをも縛めよ。われも日蓮の徒弟ぞよ」。と小さき腕を後に回して摺り寄つたので、日朗は臂を以て押隔てながら、「やよ日進よ。

汝は未だ幼少なれば、疾く遁れよ」。と目配して諭しても、日進は聞き入れず。遂に共に縛められて、宿谷左衛門に預けられ、土牢に幽閉さるゝ事となつた。

日蓮は之れを聞いて、深く哀んだ。さて、幕府に於いては日蓮の處置について評議を凝らし、遂に佐渡遠島と決した。本間重遠の代官、同右馬尉之れを日蓮に傳へた。日蓮は是に於いても法華經の功徳を說いて多くの改宗者を得た。傳ふるところに依れば、十三十四の兩日男女の改宗者七十八人を得たといふことである。

本間の邸には籬に僵る秋海棠も色あせて、秋闌け渡る村雨の音寒く、筧の水も音たえて垂氷は軒を鎖す頃となッた。日蓮は愈〻佐渡配流に定まつた。流石に勇猛の行者も、遙に土牢の徒弟を思ひやりては、人知れぬ涙も湧いたであらう。いかに妙法の爲とは言ひながら、罪もなき身が、此の寒空に土牢の中でいかに寒さを凌いて居るであらう。われは明日は此の地を立ちて越路に向ふ身である。佐渡は渺々たる遠海の一孤島、古より流された者の還つた例がない恐ろしい島山、せめては今一度遇うて、妙法弘通の勇者を勵まさんとも思

つたであらう。彼は勇往奮闘死を知らぬ猛者である、が、然も一面は慈愛深く、涙脆い性である。彼は氷る硯底を叩き、一篇の消息を認めて、土牢の徒弟に寄せた、情と文と兼ね到りて、涙潜々たるを禁せざる底の名文である。消息に曰く。

今月七日佐渡の國へまかるなり。今夜のさむきに付けても、らうのうちのありさま思ひやられていたはしくこそ候へ。あはれ殿は法華經一部色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母六親一切をたすけ給ふべき御身也。法華經を餘人のよみ候は、口ばかりことばばかりはよめども心はよまず。心はよめどもみによまず。色心二法共に遊ばされたるこそ貴く候へ。天諸童子以爲給使刀杖不加毒不能害と說れ候へば、別の事はあるべからず。籠をばし出させ給候はば、とくとく來り給へ。見たてまつりみえたてまつらん。恐々謹言。

十一月九日

筑後殿（日朗のこと）

日蓮花押

第二十二章　佐渡の幽囚（上）

日蓮は其の年の十月十日、依智ノ郷本間の館を後にして、警固の武士に圍まれつゝ、越路をさして發足した。徒弟日興、日向等五六人見送りながら隨從したが、其の夜は武州久米川に一泊し、翌朝新倉に懸り、地頭黒田次郎時光を歸向させ、十三日は兒玉に着き、十四日は上野栗津に泊つたが、それから、降る雪早き越路の空を、霰霙に打たれつゝ、艱苦具に嘗めて、其の月の二十一日越後三島郡寺泊に着し、石川吉廣の家に宿つた。此にて從ひ來つた人々に別れを告げ、富木胤繼に一書を認めて、日蓮は唯獨り佐渡が島に渡るべく、晴天を待つて居た。富木殿への消息に曰く。

今月十日相州愛京郡依智ノ郷をたつて武藏ノ國久目河ノ宿に着き、十二日を經て越後ノ國寺泊ノ津に着きぬ。此れより大海を渡つて佐渡ノ國に至らんと欲するに、順風定まらずして其の期を知らず。道の間の事心も及びことなく、又筆にも及ばず、但幅に推し度るべし。又本より存知の上なれば、始て歎くべき

にあらずと之れを止む。法華經第四に云く、而も此の經は如來現在すら猶怨嫉多し。況んや滅度の後をや。第五の卷に云く、一切世間怨多くして、信じ難し。涅槃經第三十八に云く、爾の時一切の外道の衆咸く是の言を作さく。大王今者唯一大惡人あり、謂曇沙門なり。一切世間の惡人利養の爲の故に、其の所に往き集りて、而して眷屬となりて善を修すること能はず、呪術力の故に迦葉及び舍利弗目犍連等を調伏す云云。此の涅槃經の文は一切の外道が我が本師たる二天三仙の所說の經典を佛陀に毀られて、出す所の惡言也。法華經の文は佛を怨となすにはあらず。經文天台の意に云く、一切の聲聞緣覺竝に近成を樂ふ。菩薩等云云。聞んと欲せず、信ぜんと欲せず、其の機に當らざるは言を出して謗ることなきも、皆怨嫉の者と定め了んぬ。在世を以て滅後を推すに、一切諸宗の學者等は皆外道の如し。彼等が云ふ一大惡人とは日蓮に當れり。一切の惡人之れに集まるとは、日蓮が弟子等是れ也。彼の外道は先佛の說敎流轉の後之れを謀て後佛を怨となせり。今諸宗の學者等も亦復是くの如し。所詮佛敎に依て邪見を起す目の

轉ずる者は大山轉ずと思ふ。今八宗十宗等多門の故に評論を致す。涅槃經第十人に瞋命重寶と申す法門あり。（中略）勘持品に云く、諸の無智の人ありて惡口罵詈す等云云。日蓮此の經文に當れり。汝等何ぞ此の經文に入らざる。及び刀杖を加ふる者と云云。日蓮は此の經文を讀めり。汝等何ぞ此の經文の「常在大衆中欲毀我等過等云云向國王大臣婆羅門居士等云云惡口而謗惑數數見擯出」を讀まざる。數數とは度度也。日蓮擯出度度流罪は二度也。（下略）

十月二十二日辰ノ時　　日蓮花押

富木殿

二十七日、海上穩に見えたので、寺泊から船を艤し、布帆曉風を孕んで、漫々たる浩波に駕した。隨從の人々は期し難き再會を期し、契り難き行末を契つて、別離の涙は袖を濕すのみであつたところが俄に、一天掻き曇り暴風波を捲いて、飛然るに海上遙に漕ぎ出てたとこ沫は身を洗ひ、船は木の葉の如く打揚げられるので、止むを得ず、船を還さんと

したが、それも叶はぬ始末、遂に此方に吹き流され、蒲原郡角田の海岸に漂着した。日蓮は此に船の疲れを休めた。翌二十八日は又一天晴れ渡つたので、早朝角田を發したが、沖合遙の大灘より、逆風吹き起つて、怒濤は山岳の如く、帆綱を斷ち、船は進退の自由を失つた、水主梶取色を失うて詮術も盡き果てたが、幸にして、暫くするうち、風凪ぎ、波收まり、其の夕つかた、佐渡が島、加茂郡松が崎甲ノ瀬に着いた。是に於いてか、日蓮は新島人となつたのである。

かくて、日蓮は新穗にゆき、本間の邸に幽囚の身となるべきであつたが、狡猾なる官人等は又々日蓮を唯獨り放逐した。日蓮は東西も知らぬ島山に放たれて、官人等の指し示した霜の細路を夕闇にたどり歩いたが、其の夜はとある社に假寢の夢を結び、翌日曙束なくも、尋ね尋ねて、新穗に着き、本間の邸に入つたが、迫害はどこまでも其の刃を鋭くし、運命の神は飽くまで其の顏を和げなかつた。霜月の朔日、本間重連は大野の鄕、塚原と名づくる曠野に日蓮を追放したのである。塚原は四面茫々たる原で、住むべきところは僅に一坪ばかりの荒れ果てた辻堂であつた。壁は落ち、軒は傾き、荒れたる床には、うらがれた

蟋蟀が朝をまたぬ露の命に咽ぶのみてある。加之、塚原は死骸を棄つる三昧原てあるので、夕日影薄うして、飢ゑたる鴉の三々五々と群るゝ頃は、見渡す限りの枯尾花波のやうに南に流れ、北に靡き、朽ちたる卒塔婆の散り亂れたる悽慘の境、古墳壘々として狐狸の聲悲しく、北風は凜々として肌を裂き、菴室はふりつむ雪に埋るゝばかりてあつた。日蓮は雪の上に釋迦の木像を安置し、心靜に讀經して、運命の來るを待つた。

○佐渡書

(上略)當世の學者等は畜生の如し。智者の弱きをあなづり、王法の邪をおそる、諛臣と申は是也。强敵を伏て始て力士を知る。惡王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者心佛になるべし。例せば日蓮が如し。これおごれるにはあらず正法をおしむ心の强盛なるべし。おごる者は必ず强敵に値ておそるる心出來するなり。(中略)日蓮は聖人にあらざれども法華經を說の如く受持すれば聖人の如し。又世間の作法兼て知に依て注し置こと是違ふ可からず。現世に云置く言の違はざらんをもて後生の疑をなすべからず。日蓮は此關東の御一門の棟梁也日月也鑑也眼目也日蓮捨てたる時七難必起るべしと、本年九月十二日御勘氣を蒙りし時大音聲を放て呼ばはりしことこれなるべし。總に六十日乃至百五十日に此事起る歟。是は華報なるべし實果の成ぜん時いかがなげかはしからんずらん。世間の愚者の思ひに云く。日蓮智者ならば何ぞ王難に値哉なんと申す。日蓮兼ての存知也。父母を打つ子なり。阿闍世王なり。佛阿羅漢を殺し血を流す者あり提婆達多是也。六臣これをほめ瞿伽利等これを悅ぶ。日蓮當世には此御一門の父母也佛阿羅漢の如し。然を流罪して主從共に悅びぬるあはれに無慚なる者也。(中略)日蓮も又かくせめらるるも先業なるにあらず。不輕品に云く。其罪畢已等云云。何に況んや日蓮全生には貧窮下賤の者と生れ、彌陀羅が家より出てたり。心こそすこし法華經を信じたる樣なれども、身は八身に似て蓄身也。魚鳥を混丸して赤白二諦とせり。其中に識神をやどす。濁水に月のうつれるが如し。囊囊に金をつゝめるなるべし。心は法華經を信ずる故

に梵天帝釋をも猶恐しと思はず。身は畜生の身也色心不相應の故に愚者のあなづる道理也。心も又身に對すればこそ月金にもたとふれ。又過去の謗法を案ずるに誰かしる。勝意比丘が魂にもや、大天か神にもや。不輕輕毀の流類なる歟。失心の殘餘なる歟。五千上慢の眷屬なる歟。大通第三の餘流にもやあるらん。宿業はかりがたし。我今度の御勘氣は世間の失一分もなし。聖賢は罵詈して試みるなるべし。偏に先業の重罪を今生に消して後世の三惡を脫れんずるなるべし。（中略）當世の王臣なくば、日蓮が過去謗法の重罪消し難し。日蓮は過去の不輕の如く、當世の人人は彼輕毀の四衆の如し。人は替れども因は是一也。（中略）日蓮御房は師匠にてはおはせども餘にこはし。我等はやはらかに法華經を弘むべしと云はんば、螢火が日月を笑ひ、蟻塚が華山を下し、井江が河海をあなづり、烏鵲が鸞鳳をわらふなるべしわらふなるべし。南無妙法蓮華經。

文永九年 太歲壬申 三月二十日

日蓮 花押

日蓮弟子檀那等御中

第二十三章　佐渡が島の幽囚（下）

迫害は此に止まらなかつた。此の島にも日蓮を憎む禪、念佛の徒多く、日蓮此に流罪に處せられ、塚原の辻堂に籠つてをるといふ噂が廣まると、害心を抱く輩が集まつて、怨の刃を磨くことを怠らなかつた。

此に遠藤左衞門爲盛といふ流人があつた。念佛門に熱心で、夫婦共に剃髮し、明け暮れ、稱名念佛して居たが、一日夫婦密議を凝し、彼の惡逆の佛敵日蓮を殺して、生々世々の佛恩を報ずるは此の時なりと勇み立ち、闇夜に塚原を襲うた。心を潛めて窺うて居ると、日蓮は風雪の中に、僅に雪を含んで生命を繋ぎ、更けゆく夜半に、命限りの誦經怠りなく、寂寞たる柴の戸に聲は木魂を響かして、幽に澄み渡つて居た。爲盛は穿つ雪履踏みしめて、自れ法敵、唯一擊と思うたが、まてしばし、斯程ばかりの痩法師、殺すに何の造作があらう。先づ一問答して、其の痩口を塞ぎ呉れんと、つかつかと辻堂の扉を破つて、土足の儘押上り我は念佛の行者なるぞ。汝、大膽にも、念佛無得道、念佛は無間の業と罵ること

片腹痛し、理あらば聞かんと難詰したが、固より生命は法華經に捧げた日蓮、臆するところもなく、其の道を說いたので、流石の爲盛も慚愧の心を發して、前非を悔い、遂に妻と共に日蓮の徒となつた。斯くて、爲盛は法名を日得と呼び、人知れず、日蓮に衣食を送るやうになつた。

日蓮は爲盛夫婦の情に依つて、漸く餓死は免れたが、其の困難は言語の及ぶ所ではなかつた。日蓮塚原にありといふ風說、佐渡全島に高くなるにつけ、諸宗諸門の僧徒は互に氣脈を通じて、問答を起し、日蓮を詰問し、日蓮を屈服せしめて、宗門の安泰を圖らんと考へた。

明くれば、文永壬申、正月十六日、諸宗の僧徒數十人、去年の暮より、越中、越後、出羽、奥州、信濃等に牒狀を傳へ、驅り集めたる荒法師等、經卷を負ひ、印性坊、慈道坊を先頭として、塚原なる日蓮が菴室に押かけ、法門について、難詰に及んだ。此の日、近郷の老若男女、此の問答を聽聞せんと、東西南北から集まつて來た。本間重遠は兵を出して、塚原を警固させ、自ら小高き處に登つて見物した。然も鎌倉に敵なき日蓮の勇氣に如何て打勝つことが出來よう。集まり來つた數

十の圓顱皆悉く難詰され、日蓮の侮り難きことを普く島民に知らしめた。加之、本間重遠は其の日の日蓮が振舞に感じて、歸依の心を生じ、遂に法華の篤信者となつた。是に於いてか、日蓮の敎は北海の孤島に漸く其の曙光を認めたのである。

斯くの如くにして、日蓮の勢ひは漸く佐渡を風靡するの基を開いたが、二月十八日に京都に戰があり、鎌倉にも騷亂が起つたといふ早船が、同じき月の末つ方に着いたので、本間重遠は取るものも取敢へず、家の子郎等引き具して、急ぎ鎌倉に發向した。日蓮は去年の十一月此の島に着してから、風雪の間に凍れる筆を嚙み、渾身の勇氣を鼓し、滿腔の熱血を濺ぎ、五十年の蘊蓄を傾け、信仰の燈火をかゝげて、立宗の大綱領を書き綴り、之れを鎌倉なる弟子檀越に送つた。即ち彼の遺文中最も有名なるものゝ一である。開目抄是れである。大慈大悲の智見の光を以て、昏盲迷闇の衆生の眼を開くといふ大抱負に依つて開目抄と名づけた。彼は嘗に此の絶海の孤島に於いて一大作をなしたのみならず、又有力なる徒弟を得た。日淨即ち是れである。日蓮は最蓮坊と稱し、

天台の學匠で、罪に依つて遠島に處せられて居たのである。

○開目抄（一節）

……日本國に此を知れる者は但日蓮一人なり。これを一言に申しますならば、父母兄弟師匠に國主の王難必來るべし。いはずば慈悲なきに似たりと思惟するに、法華經涅槃經等に此二邊を合見るに、いはずば今生は事なくとも、後生は必無間地獄に墮べし。いふならば三障四魔必競起るべしとし(知)ぬ。二邊の中にはいふべし。王難等出來の時は退轉すべくは一度に思止べしと且やすらひし程に、寶塔品の六難九易これなり。我等程の小力の者彌須山はなくとも、我等程の無通の者乾草を負て劫火にはやけずとも、我等程の無智の者恒以の經々をばよみおぼふとも、法華經は一句一偈末代に持がたしととかるゝはこれなるべし。今度強盛の菩提心をおこして退轉せじと願しぬ。既に二十餘年が間此法門を申に日日月月年年に難かさなる。少少の難はかずしらず大事の難四度なり。二度はしばらくおく王難すでに二度におよぶ。今度はすでに我身命に及。其上弟子といひ檀那と

いひわづかの聽聞の俗人なんど來て重科に行る。謀反なんどの者のごとし。法華經の第四に云く。而も此經は如來の現在すら猶怨嫉多し。況んや滅度の後をや等云々。第二に云く。經を讀誦し書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して結恨を懷かん等云々。第五に云く。一切世間怨多くして信じ難し等云々。又云く。諸の無智の人の惡口罵詈する有らん等。又云く國王大臣婆羅門居士に向て誹謗して我が惡を說て是邪見の人なりと謂はん。又云く。數數擯出せられん等云々。又云く。杖木瓦石もて之れを打擲せん等云々。涅槃經に云く。爾の時に多く無量の外道有て和合して共に摩訶陀の王阿闍世の所に往く。今者唯一の大惡人あり。瞿曇沙門なり。一切世間の惡人利養の爲の故に、其の所に往集して、眷屬と爲て、能く善を修せず。咒術の力の故に、迦葉及び舍利弗、目犍連を調伏す等云云。天台云く。何に況んや未來をや。理化し難きに在り等云云。如樂云く。障り未だ除かざる者を怨と爲し、聞くを喜ばざる者を嫉と名く等云云。南三北七の十師漢土無量の學者天台を怨敵とす。得一云く。咄哉智公汝は

是れ誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根を以て、覆面古の所説を謗する等云云。東春に云く。問ふ在世の時許多の怨嫉あり。佛滅後の後此の經を說く時何が故ぞ亦留難多き耶。答へて云く。俗に良藥口に苦しと言ふが如く、此の經五乘の異執を廢して、一極の玄宗を立つ。故に凡を斥け、聖を呵し、大を排し、小を破り、天魔を銘して毒蟲と爲し、外道を說て惡鬼と爲し、執小を貶して貧賤と爲し、菩薩を挫して新學と爲す。故に天魔は聞くを惡み、外道は耳に逆ひ、二乘は驚怪し、菩薩は精行す。此くの如くの徒悉く留難を爲す。多怨嫉の言豈に虛しからん哉等云々。顯戒論に云く。僧統奏して曰く。西夏に鬼辨婆羅門有り。東土に巧言を吐く禿頭沙門あり。此れ乃ち物類冥召して世間を誑惑す等云云。論じて曰く。昔齊朝の光經を聞き、今は本朝の六經を見る。實なる哉法華の何況也等云々。秀句に云く。代を語れば則像の終り、末の初め、地を尋ぬれば則ち唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生鬪諍の時なり。經に云く。猶多怨嫉況滅度後。此言良に以ある也等云々。夫小兒に灸治を加ふれば必母をあだむ。重病の者に良藥をあたふれば定て口に苦しとうれふ。在世猶ほしかり乃至像末邊土をや。山に山をかさね、波に波をたゝみ、難に難を加へ、非に非をますべし。像法の中には天台一人法華經一切經をよめり。南北これをあだみしかども、陳隋二代の聖主眼前に是非を明めしかば、敵つひに盡きぬ。像の末に傳敎一人法華經一切經を佛說のごとく讀み給へり。南都七大寺蜂起せしかども、桓武乃至嵯峨等の賢主我を明らめ給ひしかば又事なし。今末法の始め二百餘年なり。況滅度後のしるしに閑諍の序となるべきゆゑに、非理を前として濁世のしるしに召し合せられずして、流罪乃至(いのち)にもおよばんとするなり。されば、日蓮が法華經の智能は天台傳敎には千萬が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び、慈悲のすぐれたる事はおそれをもいだきぬべし。定めて天の御計らひにもあづかるべしと存ずれども、一分のしるしもなし。いよいよ重科に沈む。還々此事を計りみれば、我身の法華經の行者にあらざるか。又諸天善神等の此國をすてゝ去り給へるか、かたがた疑はし。而るに法華經の第五の卷勸持品の二十行の偈は日蓮だにも此國に生れずば、ほとほと

(殆)世尊は大妄語の人八十萬億那由地の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ぬべし。經に云く。諸の無智の人有り、惡口罵詈等。刀杖瓦石等を加ふ云々と。今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か法華經につけて、諸人に惡口罵詈せられ、刀杖等を加へらるゝ者ある。日蓮なくば此一偈の未來記は妄語となしぬ。惡世中の比丘邪智にして心諂曲なり。又云く。白衣と與に說法し、世に恭敬せらるゝこと六通の羅漢の如しと。此れ等の經文は今の世の念佛者禪宗律宗等の法師なくば、世尊は大妄語の人。常に大衆中にあり乃至國主大臣婆羅門居士等に向ひ、今の世の僧等日蓮を謗奏して流罪せずば、此經文むなし。又云く。數々擯出せられん等云々と。日蓮法華經のゆゑに度々ながされずば、數々の文字いかんかせん。この二字は天台傳教もいまだよみ給はず。況んや餘人をや。末法の始のしるし恐怖惡世中の金言のあふゆゑに、但日蓮一人これをよめり。例せば世尊が付法華經に記して云く。我が滅後一百年に阿育大王といふ王あるべし。摩耶經に云く。我が滅後六百年に龍樹菩薩といふ人南天竺に出づべし。大慈悲に云く。

我が滅後六十年に末田地といふ者地を龍宮につく(築)べし。此等皆佛記のごとくなりき。しからずば誰か佛教を信受すべき。而るに佛恐怖惡世然後末世末法滅時後五百歳なんど正妙の二本に正しく時を定め給ふ。當世法華の三類の强敵なれば誰か佛說を信受せん。日蓮なくば誰をか法華經の行者として佛語をたすけん。南三北七七大寺等猶像法の法華經の敵の內何(なん)に況んや當世の禪律念佛者等は脫(のが)るべしや。經文に我が身符合せり。御勘氣をかほ(蒙)ればいよいよ悅びをますべし。

第二十四章　赦免狀來る

是れより先き、日朗、日進は鎌倉の土牢に幽閉され、氷柱を拂ひては佛を禮し、更闌け渡る殘燈に經を誦し、松吹く風に遠く、師日蓮を慕ひ、殊に日朗は幼少の頃から、師とも父とも頼む日蓮に別れ、日蓮が依智から送つた訣別の消息を抱いて、あけ暮れ、巻いては披き、披いては讀み、涙ながらに其の日を送つてをるので、牢番の待遇も流石に情ある武士なれば、皆日朗が誠心に感じ密に同情の袖

を絞つた。加之、奉行の宿谷左衞門光則も漸く日蓮の非凡なることを知り、日朗の情に篤きをめて〳〵深く之れを勞はるやうになつた。然るに、或る時牢番の侍は、主人光則よりの賜物とて、橘六七個、日朗に與へたが、日朗は其の志を喜び、あはれ、此の橘はわが師の好み給ふ果實であるが、日朗若し囹圄幽囚の身でなかつたならば、假令千里の海山を隔つとも、之れを捧げて、喜び給ふ御顏を拜まんものをと泫然と涙にかきくれたので、警固の侍は窃に主人に嘆願して、日朗を出し、或は旅費を給し、或は乾飯を與へて、佐渡に其の師を訪ふことを許した。日朗は天にも登る心地して、日蓮佐渡に配流された其の歳の暮に、塚原に着いて、師の安否を訪うた。日蓮の喜びは如何てあつたらうか。此の師にして、此の弟あり。師弟互に相擁して、客愁を慰め、佛恩の深きを謝したてあらう。日朗は斯くの如くにして、一度ならず、佐渡が島根を訪うて、配流の師を慰めたのてある。日朗の無邪氣にして、純潔なる人格は、師日蓮の堅忍不拔の剛健なる人格と反映して、互に其の光を放つて居る。實に日蓮は嬰兒の心を以て、其の師に仕へた人てある。

越えて三月、日興と熊王四郎の兩人が鎌倉より塚原を訪うた。師弟互に手を取り、泣いて再會を喜んだ。斯くて日蓮は兩人から、京都に於ける南北兩六波羅の合戰に、北條一門骨肉相食むの慘劇を演じたことを聞き、深く世の有樣を歎息した。

其の頃鎌倉より日蓮を一の谷に遷せとの下知があつたので、近藤次郎清久之れを承りて、一の谷に家を建て、四月七日に日蓮を遷した。抑〻一の谷と稱するところは、巖石峨々として聳え、海水深く藍を湛へて、山あり。水あり。風光明媚てあつた。山に登れば、一もとの老樹の松枝を垂れ、幹を支へて、苔々晩翠に傲つてゐたので、日蓮は深く此の松を愛し、日毎に松が根に讀經したといふことてある。斯る間に、一時は諸宗の迫害を蒙つたが、本間重遠が鎌倉から歸つて後は、何の不自由もなく、閑日月を送ることが出來たのみならず。熱心なる信者の遠く訪づれ來る者があつて、少からず、心を強くした。

「艱難汝を玉にす」とは支那の古い諺てある。實に迫害は人格を作り、迫害は人格を磨く、日蓮は譬へば波激しき海の貝てある。常に怒濤に揉まれ、敲かれ、

洗はれて居るので、其の光は益〻強さを增すのてある。日蓮は危害に依つて其の人格を鍛へた。換言すれば迫害は日蓮を作つたのてある。迫害なくんば日蓮なしといふも過言ではない。日蓮は迫害の怒濤に磨ぎ出だされた眞珠てある。燦として開夜を照し、爛として眸子を射るは一に逆境の恩寵てある。天は日蓮に艱難を下して、其の人格を試みた。日蓮は此の試煉に依つて、不滅の大人格を鍛へ上げたのである。

日蓮は先きに開目抄を綴つて、宗門の面目を發揮したが、更に筆を呵して、觀心本尊抄を書いた。觀心本尊抄副狀に其の抱負を披瀝して曰く。

帷（かたびら）一つ黑之長筆五官給候ひ了んぬ。觀心の法門少々之れを注し大田殿教之れを開拓せらる可き歟。此事日蓮當身の大事也。之れを祕して無二の志を見ば信御房等に奉る。此事日蓮當身の大事也。之れを祕して無二の志を見ば目を驚動すべき歟。設ひ他見に及ぶとも、三人四人座を並べて之れを讀む勿れ。佛滅後二千二百二十餘年未だ此書の心有らず。國難を顧みず五五百歲を期して之れを演說す。乞ふ願くは一見を歷るの後、末聖師弟共に靈山淨土に詣でゝ、三代の顏貌を拜見したてまつらん。恐恐謹言

文永十年太歲癸酉卯月二十六日　　日蓮 花押

富木殿 御返事

今や春逝き、花落ちて、絕海の孤島にも自然は綠葉を惜まなかつた。海は藍光を浮べて、靜波洋々たる一碧の彼處より、靑嵐晴空をうつて、靑葉の光る一の谷の假家に、四月二十五日から、墨を磨して、法華一乘の滴血を寫し出したのである。斯くて、七月八日初めて大曼荼羅を書き、日宗の敎權此に全く確立した。日蓮が佐渡の配流は斯くの如くにして、其の光榮ある終りを告げたのである。

明くれば文永十一年の二月八日赦免狀は日朗に下つた。日朗大いに喜び、之れを頸に懸けて心も輕く、身も輕く、雀躍して佐渡に渡つた。今や絕海の孤島にも春は回り來つて、花は岩が根を綴り、陽炎は野に滿ち、黃鳥は幽谷を出でんと谿の戶に羽ばたきした。

第二十五章　身延の雲池上の雨

花咲き匂ふ彌生十三日、日蓮は信徒の人々に暇を告げ、十五日春風布帆を追うて、越後柏崎に着き、元來し路を鎌倉に急ぎ、同じき二十七日小町に着いた。是れより先き、鎌倉の信徒は日蓮の赦免を聞いて大いに喜び、鎌倉小町夷堂橋の北に菴室を建てたので、日蓮は先づ此の菴に入り、長き疲れを慰めた。

越えて、四月八日執權時宗は、大小名列座の上、日蓮を館に招き、慇懃なる挨拶を與へた。加之、更に五月二日に至つて、宗門弘通の定牒を日蓮の徒に下した。是に於いてか、多年迫害に苦んだ、法華一乘の宗門は、天下の宗教として、其の獨立を承認せられ、其の布教を許され、法華宗なる一新教此に成立したのである。然も、日蓮は先年以來安國論を以て、諸宗を廢し、法華經に歸依すべきことを諫めたが、其の議は用ゐられぬので、三たび諫めて用ゐられざれば即ち去る。宗門の弘通も其の緒についたので、遯世の志止み難く、五月十二日、權越波木井實長の領地、甲州身延山に退いた。白雲山を埋めて日悠々。谿水花を送つて思

ひ潛々。雷霆を叱し、鬼神を呵する度の偉僧は、今や青山白水裡の人となつた。

彼れは自ら此の間の消息を描いて次のやうに記してをる。

誠に身延山之栖はちはやぶる神もめぐみを垂れ天下りましますらん。無心しづの男しづの女までも心を留めぬべじ。哀を催す秋の暮には草の庵に篠深く樒にすだくさゝかにの絲玉を連き、紅葉いつしか色深うしてたゞえだえに傳ふ懸桶の水に影をうつせば。名にしおふ龍田河の水上もかくやと疑はれぬ。又後ろには峨峨たる深山そびえて梢に一乘の果を結び下枝に鳴く蟬の音滋く、前には湯湯たる流水湛て實相眞如の月浮び無明深重の闇晴て法性の空に雲もなし。かゝる砌なれば庵の內には晝は終日に一乘妙典の御法を論談し、夜は竟夜要文誦持の聲のみす。傳へ聞く釋尊の住給けん鷲峯を我朝此砌に移し置きぬ。霧立嵐はげしき折折も山に入て薪をこり篠深き草を分て深谷に下て芹をつみ、山河の流もはやき巖瀨に菜をすゝぎ袂しをれて干わぶる思ひは、昔人丸が詠じける和歌の浦にもしほ垂つつ世を渡る海士もかくやとぞ思ひ遣る。……（中略）……

此等をさまざま思ひつづけて觀念の牀の上に夢を結べば、妻戀鹿の音に目をさまし、我身の内に三諦即一一心三觀の月曇り無く澄けるを、無明深重の雲引覆つゝ昔より今に至るまで生死の九界に輪廻する事、此砌にしられつ自かくぞ思ひつづけける。

立わたる身のうき雲もはれぬべし
たえぬ御法の猶の山風

抑〻この身延山は、北には白根が嶽稜々として天に聳え、南には鷹取山あり。西は七面山を回らし、東は天子が嶽高く雲を帶び、北に早川、南に波木井川、東に富士川、西に大白川流れて、此の四山四川の中央に位してをる靈境である。日蓮は此の間に悠遊して、粟を播き、菜を植え、框の實を採り、柴栗を拾うて晩年を送つたのである。又彼れは馬好きであつたので、波木井實長は葛の側に厩を建てゝ駿馬を飼ひ、日蓮の乘用に供した。山嵐雲を捲いて、塵葉溪谷を埋むる時、いかに彼は朔風に鞭つて、豪邁の氣を鼓し、山靈を叱咤したであらうか。

斯くの如く、日蓮が晩年は靜かであつた。多くの信徒は或は米を運び、菜を

送り、餅を捧げ、橘を薦して、東より、西より彼の幽棲を訪うたのである。弘安四年蒙古の軍西海に押寄せたが、身延の山は昔ながらに山蘭苞を破り、黄菊蕚を埋めて居た。天晴れ雲なき日は、山巓に登つて、遠く房州の空を望み、彼の慈愛深かりし父母を想うて、追懐の涙に咽んだ。後人此に一閣を建てゝ思親閣と名づけた。彼れは不屈の猛者であつたが、一方にはどこまでも可憐なる一個の赤兒であつた。

彼れは身延にあること九年。身延山久遠寺の礎固く、信徒は東海に滿つるに至り、更に經一歷以下の徒弟をも得た。斯くて、九年の後、病を獲て、池上宗仲の宅に行いて養生したいと考へたので、秋の半に身延を出でゝ、武州池上に着し、暫く此に在つたが、十月三日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持を六老僧と定めて後繼者となし、越えて十三日朝卯の時刻、經一歷に京都弘教を遺言して、眠るが如く涅槃に入つた。時に弘安五年壬午、享年六十一であつた。

終りに臨んで、彼が絶筆を掲げて、此の偉人を偲ぶよすがとしよう。

日蓮は日本國人王八十五代後堀河御宇貞應元年壬午安房國長狹郡東條鄉

生也。佛滅後當二千百七十一年也。八十六代四條天福元年癸巳十二歳にして清澄寺に登り道善御房の坊に居て學文す。于時延應元年己癸十八歳にして出家し、其後十五年が間一代聖教總じて內典外典に亙りて無殘見定、生年三十二歳にして建長五年丑癸三月二十八日念佛は無間の業なりと見出しけるこそ時の不祥なれ。如何せん此法門を申さば誰か可用返て怨をなすべし。人を恐て不申者佛法の怨となりて大阿鼻地獄に墮べし。經文には末法に法華經を弘る行者あらば上行菩薩の示現なりと思ふべし。言はざる者は佛法の怨なりと佛說給へり。經文に任せて云ならば日本國は皆一同に日蓮が敵と成べし。釋迦佛は婆婆に八千度生れ給しに尸毗王とありし時は鳩の命に代り、薩埵王子とありし時は飢たる虎に身を與へ、雪山童子とありし時は半偈の爲に投身、堅聖獅子とありし時は獵師に殺され、千頭の鹿王と成ては我身を獵師に射させて妊胎の鹿を助、三千大千世界に我身命を捨置給はざる處なし。此功德は皆一切衆生の中には法華經を信ずる人に與んと誓給き。我不愛身命の法門なれば捨命此法華經を弘めて日本國の衆

生を成佛せしめん。總の小島の主君に恐れて是をいはずんば墮地獄閻魔の責を如何せん。國王の用給禪は天魔なる由鎌倉殿の用給眞言の法は亡國の由極樂寺の良觀房は國賊なる由淨土宗の無間大阿鼻獄に墮べき由其外餘宗皆地獄に可墮由一一に記し、立正安國論を作り宿谷の禪門を使として奉入最明寺殿見參此は生年三十九の文應元年庚申歳也。日蓮が立申法門を一偈一句も答る人一人もなし。上下一同に惡嫉て讒奏申すに依て、生年四十弘長元年辛酉歳五月十二日には伊豆國伊東莊へ配流し、伊東八郎左衞門尉の預にて三箇年也。同三年癸亥二月二十二日赦免せらる。如來現在猶多怨嫉況滅度後の法門なれば日蓮この法門の故に怨まれて死んことは決定也。今一度舊里へ下て親き人人をも見ばやと思て、文永元年甲子十月三日に安房國に下て三十餘日也。同十一月十一日には安房國東條の松原と申大道にて申酉の時計にて候ひしが數百人の念佛者の中に取籠られ、日蓮は但一人物の用にあふべき者は總に三四人候しかども、射る箭は雨のふるが如く打太刀は電光の如し。弟子一人當座に打殺され候。又二人は大事の手

を負候ぬ。自身計りは殆れ打れ切れ候しかども如何に候けん打漏されてかまくらに登る。文永五年戊辰後正月蒙古國より日本國を襲べき由牒狀これを渡す。同十月に訴狀を書て重て法光寺殿の見參に入奉りしに御祈禱申すべき由有しかども、日蓮が云建長寺極樂寺等の念佛者禪宗等が堂塔を燒拂、彼等が頭を由井が濱にて悉切失はるべく候。不然者唯今此日本國の人人佗國より責られ同士打して自界叛逆難あるべし。かまくら中の持齋の僧を御供養候事は但牛を飼せ給にてこそ候へと申たりしかば、日蓮房は鎌倉殿を牛飼と申候と讒奏申に依て、文永八年辛未九月十二日には頸の座に登り相摸の龍口へ遣はさる。今は最後と思しかば御靈の宮の前にて馬をひかへ熊王丸を使として四條左衞門尉に知らせしかば、かちはだしにて馬の口に取付て路すがら啼悲んで、事實にならば腹を切らんとせし志をば何の世にかは忘るべく候。法華經に命を進らせ、日蓮より前に腹を切んと思きたりし事をば釋迦佛先知食しめして候なり。既に腹切られんとせしが其夜は延候て相摸の依智へわたされ、本間の六郎左衞門が預おきぬ。明十三日の夜ふけ方に不思議現ず大星下て庭の梅の枝に懸りき。爾る故にや死罪を止められ流罪に行はれ佐渡國へ遣はさる。十月十日相摸の依智を立て同二十八日佐渡國へ著ぬ。本間六郎左衞門尉が後見の家より北に塚原と申て洛陽の蓮臺野の樣に死人を送る三昧原ののべにかきもなき草堂に落着ぬ。夜は雪ふり風はげし。きれたる蓑を著て夜を明す。北國の習なればや北山の嶺の山おろしのはげしき風身にしむ事をば但思やらせ給へ。彼の守護も國主の御計なれば日蓮を怨其外萬民も皆其命に從ふ。かまくらにては念佛者禪律眞言等が一同にそしよう申て何にも日蓮を鎌倉へかへさぬ樣にと計らひ、極樂寺の良觀房も武藏前司殿の私の御敎書を申下て弟子に持せて佐渡國へ渡て怨をなす。其に隨て地頭竝に念佛者等が日蓮が居たるあたりに、夜も晝も立副て通ふ人を強にあやまたんとすれば叶ふべき樣もなし。何より問べき人一人もなし。天の御計にてや候けん何佛房の日蓮を扶持せし事は、偏へに悲母の佐渡國へ生れ替らせ給て日蓮が命を助給歟。漢土に沛公と申せし者あり王相辱此者重勅宣を下して沛公をうつ

て進らせたらん者には捕忠の賞を給べき宣旨ありしかば、沛公山邊に隠居して命助かりがたかりしに、沛公が妻山邊に尋行て時時助候き。彼は夫妻なれば年來の情捨がたければ尋けん。此は佗人なれども人目を隠忍てほ蓮を憐愍し或は處をおはれ或は過代を引きなんどせしかば、内内志ありし人も何とも申人一人もなし。さすがに凡夫なれば佗國に住ぬれば、古郷の戀き事申計なり。日蓮無謀日本國の一切衆生を佛に成さんと思ふ志こそなからめ。日本國の一切の男女等はさて置ぬ。禪僧律僧眞言宗淨土宗の人人日蓮を見たりしは夜討強盗謀反殺害の人を見よりも猶怖げなり。同十一年甲戌二月十四日被レ赦免一同三月二十六日にかまくらへ上りぬ。同四月八日に平左衛門尉が云御房は法華經の法門には今はこりさせ給うやと云しかば、日蓮云王地に生れたれば身は隨がへられ奉るやうなれども心は隨奉るべからず。念佛は無間地獄、禪は天魔の所爲なる事は無疑殊に眞言宗が此國の大なる禍也。末法に法華經の行者は人に怨まれてかゝる難有べしと佛説給て候へば、偏に釋迦如來の御神我身に入せ給てこそ候らへ。され

ば我身ながら悦身に餘れり。日蓮は日本の大難を拂國を持へき日本國の柱也。余を失ならば日本國の柱を倒也。但今此國に大悪魔入り滿て國土ほろびん時にこそ日蓮が立申法華經の法門、正義とは見え候べけれ。經文限りあれば無力。其時こそ人人は思知り給らめと云しかば、日本國を呪咀申者なりとて法華經第五巻を以て日蓮が面をうちしなり。此事は梵天帝釋も御覧あり、かまくら八幡大菩薩も見させ給き。如何にも今は叶まじき世也。國の恩を報ぜんがために國に留り三度は諫べし。用ゐずんば山林に身を隠せと云本文ありと本より存知せり。何なる山中にも籠て命の程は法華經を讀誦し奉らばやと思より外は佗事なし。時に五十三同五月十二日かまくらを立て甲斐國へ分入る。路次のいぶせき峯に登れば日月をいただくが如し。谷に下れば穴に入が如し。河たけくして船渡らず大石流れて箭をつくが如し。道は狹して繩の如し。草木しげりて路みえず、かゝる所へ尋入事淺からざる宿習也。かゝる道なれども釋迦佛は手をひき帝釋は馬となり梵王は身に立そひ日月は眼に入りかはらせ給故にや、同十

七日甲斐國波木井の郷へ著ぬ。波木井殿に對面有、しかば大に悦び、今生は實長が身に及程は見つぎ奉るべし。後生をば、聖人助け給へと契りしことはただごととも覺えず。偏に慈父悲母の波木井殿の身に入かはり日蓮をば哀れみ給歟、其後身延山へ分入て山中に居し、法華經を晝夜讀誦し奉り候へば、三世の諸佛十方の諸佛菩薩も此砌におはすらん。釋迦佛は靈山に居して八箇年法華經を說給。日蓮は身延山に居して九箇年の讀誦也。傳敎大師は比叡山に居して三十餘年の法華經の行者也。雖然彼山は濁山也。我この山は天竺靈山にも勝れ日域の比叡山にも勝れたり。然れば吹風もゆるぐ木草も流るゝ水の音までも此山には妙法の五字を唱へずと云ことなし。日蓮が弟子檀那は此山を本として參るべし。此則靈山の契也、此山に入て九箇年也。佛滅後二千二百三十餘年也。日蓮ひとつ志あり一七日にして返る樣に安房の國にやりて舊里を見せばやと思ひて、時に六十一と申弘安五年壬午九月八日身延山を立て武藏國千束鄉池上へ著きぬ。釋迦佛は天竺靈山に居して八箇年法華經を說かせ給ふ。御入滅は靈山より艮に

當れる東天竺俱尸那城跋提河の純陀が家に居して入滅なりしかども、八箇年法華經を說せ給山なればとて御墓をば靈山に建させ給ひき。されば日蓮も如是身延山より艮に當て武藏國池上右衞門太夫宗長が家にて可死候歟。縱いづくにて死候とも九箇年の間心安く法華經を讀誦し奉候山なれば墓をば身延山に立させ給へ。未來際までも心は身延山に可住候。日蓮は日本六十六箇國島二つの內に五尺に足ざる身を一つ置處なく候しが、波木井殿の御育みにて九箇年の間身延山にして、心安く法華經を讀誦し奉り候つる志をば、いつの世にかは思忘候べき。しらずや此人は無邊行菩薩の再誕にてや御座すらむ。日蓮は日本第一の法華經の行者也。日蓮が弟子檀那等の中に日蓮より後に來給候はば、梵天帝釋四大天王閻魔法皇の御前にても、日本第一の法華經の行者日蓮房が弟子檀那なりと名乘て通給ふべし。此法華經は三途河にては船となり死出の山にては大白牛車となり、冥途にては燈となり靈山へ參る橋也。靈山へましまして艮の廊にと尋させ給へ、必ず待奉るべく候。但各の信心に依べく候、信心だに弱くばいかに

日蓮が弟子檀那と名乘せ給ともよも御用は候はじ。心に二つましまして信心だに弱く候はば峯の石の谷へころび、空の雨の大地へ落ると思食せ。大阿鼻地獄疑あるべからず。其時日蓮を恨させ給な返返も各々の信心に依べく候、大通結緣の者は地獄に墮て三千塵點劫を經候き。久遠下種の輩は地獄に墮て五百塵點劫を經たる事、大惡知識にあうて法華經をおろそかに信ぜし故也。返返も能能信心候て事故なく靈山へましまして、日蓮を尋させ給へ。其時委可申候。南無妙法蓮華經。

弘安五年壬午十月七日　日蓮花押

波木井殿其外人人

日蓮上人終

明治四十三年七月十三日印刷
明治四十三年七月十八日發行

日蓮上人
定價金壹円

著作者　大屋德城
發行者　山縣文夫　東京府下北豐島郡巣鴨町大字上駒込十九番地
印刷者　藤本兼吉　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

不許複製

發行所　東京巣鴨郵便區上駒込山縣邸內　電話下谷四百三十八番　振替貯金口座東京三五五番
內外出版協會

西脇王峯編著

孔子

再版　改正定價金壹圓　郵稅拾貳錢

「東亞之光」批評

著者序して曰く、德は永へに二千載の今に輝き、道は長く東亞の地を照し、之を仰げば彌よ高く、之を望めば愈よ大なるもの是豈孔子の道德にあらずやと。然り孔子の道は賢に博厚なり、高明なり、悠久なり。然るに近來泰西の文物輸入につれ、遂に此の東亞特有の道德あるを忘れ、或る者は狥りに泰西のそれを以て之に易へんとし、或る者は甚だしきに至りては人を半獸的に導かんとする者さへあるもの、如し。此時此際著者深く慨する所あり、積年の研鑽を披瀝して以て東亞特有の道德を振興せんと欲し、乃ち「世界三聖傳」の一として大聖孔丘の言行を詳記したるもの本書なり。章を分つこと二十、春秋時代、孔子の成育、孔子の遊齊、孔子の相事、孔子の周遊、孔子の交遊、孔子と隱者、孔子の門人、孔子の便座、孔子の人格、孔子の感化、孔子の子孫、孔子の刪潤、孔子の聖人、孔子の終焉、孔子の文藝是なり。而して引證するに一々聖經の言、賢傳の語を以てし、且つ原文を和譯して漢學の素養なき者をして讀み易からしむるなど用意周到なり。

特に本書に於て著者の新說として見るべきは、「孔子の人格」の章下に宗教的感情の一節を設けて、彼の怪力亂神を語らずと云へる言を以て、孔子は現在的人倫道德の實踐者にして些の宗教的信念なしと言ふ者あるに反して、孔子は殆ど不拔の宗教的信念を有す。而して其の究竟的信念は所謂天なりと斷定せるが如き、又「孔子の哲學」の章下に於て彼の教を一貫する道につきて世の學者或は忠恕なりと言ひ、或は仁なりと言ひ、其の甚だしきに至りては中庸、仁、禮の三者なりと言へるが如きを一々辯駁して孔子の至大なる禮と仁との道を一貫するものは、宜じく思慮を超越せる絶大なるものに求めざるべからずと言ひて、遂に彼が教を一貫する道を天に歸し、以て其の哲學の根本原理に斷案を下したるが如きに在りて、是れ實に著者積年研鑽の心血を濺ぎたる所なりとす。其他孔子が隱者に對する態度、老子に接したる態度の如きに就いては、皆古來學者の見る所と多少の異あり。以て著者の造詣を知るべきなり。苟くも將來東亞の道德を振興せんと欲する者は、先づ孔子を研究せざるべからず、孔子を研究せんと欲する者は、宜しく先づ本書より入るを要す。吾人は世の教育家、宗教家、將た養德に意あるの諸士に本書を推薦す。

東京振替貯金口座　東京染井第三百十五番　中山縣　郵便局　鴨東區　元版　內外出版協會

大屋德城編著

釋迦

再版　改正定價金壹圓貳拾錢　郵稅拾貳錢

本書は一名『佛陀及佛陀を中心としたる佛教文學の概觀』と稱すれば、單に佛陀の傳記とのみ見る可からず、主要の點は後者に在るが如し。即ち本書の內容は佛陀及其時代、佛陀の聖訓、佛陀と譬喩、佛陀と本生說話、佛陀と讖頌、佛陀と神話、大乘教典に現はれたる佛陀の面影及び結論の八章より成れるが、『佛陀及其時代』に於ては、先づ佛陀出現當時に於ける時代觀及び哲學、宗教の一班を叙して、佛陀が新宗教を唱ふるに至りし所以を示し、次に、迦毘羅城に於ける佛陀の降誕より、山野の苦行、菩提樹下の冥想を經て、遂に解脫成道を遂げて、佛教の大光明を發揮し、鹿野苑、竹園、祇園精舍に大法輪を轉じて、普く衆生を濟度し、地球上、無窮の法燈を傳へたる後、終に沙羅雙樹の下に入寂せられたる事跡を、快利にして趣味ある筆を以て叙述し、夫れより『佛陀の聖訓』に於ては、佛陀が海水一味の譬喩を以て、其弟子が印度に於ける階級上の陋風を脫せざるを誡めたること等を始めとして、種々の教訓を垂れたる事どもを記し、『佛陀と譬喩』にも、佛陀が俗談平話を以て說法を有効ならしめたることを叙せるが、其一班として引例したる所を見るも、興趣頗る深きものあり、其內にも、是等の譬喩中、印度の自然美を描き出したる所など、殊に文學上に價値多きが如し。又『佛陀と本性說話』の章は、本性說話の來歷を說きて、其一部が漢譯、西藏譯等の經文より抽出し、異同を示すと共に、說話の傳話甚だ弘き事實をも述べ、『大乘經典に現はれたる佛陀の面影』に於て、大乘經典の構造、雜糅經の梗概を示し、更に諸經典より佛陀の眞相を明かにす可き事實を引例したり。本書の一班は、凡そ右の如くなるが、著者は佛教家として學問の造詣深く、漢譯佛典は勿論、東西各種の佛書に通じ居れるも のゝ如く、評論頗る犀利にして、讀者の感興を湧くもの多きは喜ぶべし。要するに本書は、門外漢をして佛教の何ものたるかを知らしむるに頗る適切の著述にして、又最も信ず可き書籍なるを疑はず。

時事新報　明治四十二年四月十四日　文藝週報批評　（菊版三百二十八頁、布表紙）

東京振替貯金口座　東京染井第三百十五番　中山縣　郵便局　鴨東區　元版　內外出版協會

松本赳編著

基督

再版　改正定價金壹圓貳拾錢　郵稅拾貳錢

『護教』批評

世界三聖傳の一として『基督』出でぬ、著者誰はぞ、曩にシエンキヰツチ作『何處に往く』を譯し文名を知られたる松本氏なり。至聖基督を傳せんとせば、著者先づ深く彼を渇仰し憧憬し、彼の人格に觸れ彼の精神を攝取せざるべからず。若し著者にして此の域を去ること遠からんか、其の材料は如何に豐富なりとも、其の評論は如何に犀利を極むとも、是れ死せるナザレの一工匠を畫くに過ぎず、活ける基督の胸臆に宿れる神識靈覺は焉ぞ此の如くにして傳ふべけんや。著者松本氏は弱冠にして信仰の門に入る、諸先輩に私淑して心靈上修むる所淺からず、ます〳〵基督教の堂奥に達せんと欲して潜心基督の生涯を研究し、其の結果を發表せるもの本書即ち是れなり。著者の如きは洵に基督を傳するに適せりと謂ふべし。著者は重もは材料をデイン・ファラーの『基督傳』及びデビッド・スミスの『基督在世の時』に採り、簡潔なる筆を以て趣味深く記述せり。我が邦未だ完全の基督傳あらず、行越氏の『基督の傳記』海老名氏の『基督傳』ストーカー、ニコル、ブローダス、ルナン等の譯書等稍〻見るに足るものなりと雖も、繁簡宜しきを得て中正不偏なるもの丶少きを憾みとす。此の時に當り本書の出版ありしは、基督教文學の爲めに慶賀せざるを得ず。惟ふに基督傳の研究は、直ちに基督教の中心に接觸し、堅實なる信仰を樹立するの基たるべし、吾人は此の良書を世に推薦するに躊躇せざるなり。……

元版　東京巣鴨郵便區染井山縣邸内　振替貯金口座第三百五十五番　内外出版協會

大屋德城編著

通俗佛典物語

全三冊　定價金九拾錢　郵稅八錢

時事新報文藝週報批評

『佛典物語』は曩に『釋迦』の好著を出したる大屋德城氏の編述に係る。文辭垢ぬけして、讀み行くに、興味あり。第一編は物語總て二十八章、比喩の鋭利なるものあり、また訓誨の切實なるもの少なからず、中に『棄老國』と稱して、老者を棄つる國に、孝道に篤き大臣ありて、その老父を棄つるに忍びず、竊に之を家に留めて、國王より難問題の出づる毎に、常に父の智慧を借りて之を解決したるが、遂に事實を上聞して、國に棄老の陋風を廢せしめたりと云ふものあり、其中に象の斤量を知る法として老父の教へたる言に、象を船に載せ、船の水に入りたる處に線を附し置き、後石を載せて船を其の線まで沈め、石の量を計らば、直に知るを得べしと云ふは、今の比重の理を明かにせるものにして、栴檀の材木となりたるものに、其の何れの根、梢なりしやを知る法として水に浮かせて沈みたる方を根なりと示したるは、また植物生長の理を喚れるものなり。これは『雜寶藏經』より抄出されたるなりと云ふ。凡て此の類の、利益ある話片少なからず。附錄として、『佛陀及び佛陀の教』十五章三十五頁を添ふ。簡捷に釋迦を知り佛教の要旨を知るには便利なり。

第二編は『觀無量壽經』に依りて著はさる。著者『觀無量壽經』を繙きて悲慘なる王舍城の悲劇に涙を濺ぎ、榮華の夢の覺めて儚なき頻王の事蹟を經とし汲めども盡きぬ韋提希夫人の長き愁ひの泉を掬びて緯とし幾多の意匠を加へて玆に此の哀史一篇を織り成しぬ。『觀無量壽經』は淨土教の經典中最も趣味あり最も溫かなる一詩篇とも觀るべく、當麻曼荼羅の如きは此の經文の意を繡出したるものとして著はれ、又中古の詩歌に限りなき愁を遺せるは人の知る所なり。著者は及ぶ限り原意に忠實ならんことを努めしも、其の博涉を以て多く諸經を參酌し、最後に阿闍世王懺悔の一段を置きて此の哀史の終りを結べり。第一編の多くの短篇的物語を收めたると、本編の全一卷を長き物語に充てたると、互に各々別樣の趣味を藏すと雖も小說若くは傳奇の類を繙くに等しき感興を讀者に與ふるの量は、此方に大に豐富なること勿論なり。

第三編は更に『那先比丘經』に依りて著はさる。『那先比丘經』はギリシヤ人なるミリンダ王と佛教の夫の有名なる高僧ナーガセーナとの問答を錄せるものにして、これを西洋にしてプラトーンの『對話篇』に比すべく、これを東洋にしては『孟子』に比すべき雄篇なり。隨つて散文を以て記されたる佛教文學中の第一書と稱せらる。ギリシヤ人なるミリンダ王と佛教高僧の問答錄といふ點既に奇中の奇、而も其の話題廣く佛教の一般原理に亘れるを以て、初學入門の書としても殊に適當なり。加之ナーガセーナの高談雄辯は、これを『對話篇』中のソークラテスに比し又之を孟子に比して優るとも劣ることなし。是れ著者が深き興味を以て本經の譯述を試みたる所以にして讀者も亦繙讀の間に己を忘れて興趣に醉ふ所以なり。

出版元　東京巣鴨郵便區染井傳中山縣邸内　振替貯金口座東京第三百五十五番　内外出版協會

田中鐵軒編著

絶島の南洲

定價金五拾錢　郵稅六錢

樺山伯爵題辭長谷場衆議院議長題辭跋文及び板垣伯監督の下に畫家光永氏の筆に成り一は宮內省に獻納され一は西鄕家の什寶たる南洲翁肖像及び筆蹟挿入

大阪毎日新聞の評語

伊藤公の凶變あるに際し　田中鐵軒子の『絶島の南洲』出づ。著者が薩人にして、南洲の友伊知地氏に緣あるに依ッて、殊に南洲の面目を傳へんとし、南洲が『朝蒙恩遇夕焚坑、人生浮沈似晦明、縱無回光葵向日、若不開運意推誠、洛陽知己皆爲鬼、南與浮囚獨竊生、生死何疑天附與、願留魂魄護皇城』を詠じたる南島謫所中の言行を錄したるもの。セント、ヘレナの孤嶋生活となりし那翁を述作したるローズベリー卿の『那翁傳』が、那翁を知るに讀むべき書なるが如く、此書も亦南洲の面目を髣髴知るべく、英雄の英雄たるは、その涵養深き精神にあるを知らん

版元　東京巣鴨町上駒込二十番地　振替貯金東京三百五十五番　內外出版協會

『釋迦』著者　大屋德城著

宗教大系

定價金四拾錢　郵稅六錢

世界各大宗教の研究

▲六大新報曰く＝今の時に當りて宗教無用論を提唱するやうな野暮な者は恐らくは無からうと思ふ、併し多少教育ある人士にして宗教の何たるを知らぬ者は尙往々之れあるやうである。本書は一般人士をして世界の各大宗教を知らしめんが爲に著はされたるものにして、菊版二百餘頁の中に緒論、總論、儒教、道教、波羅門教、佛教、波斯教、猶太教、基督教、回々教の十章を收めて各教共に教祖又は立教の由來、經典、教義又は習慣等の要項を中心として其他必要なる事項を叙述し、尙附錄として日本現在宗教一覽、佛教諸宗派本山一覽、宗教名數を添へてある。言文一致體で平易簡明である。且つ術語には假字を附したるを以て普通に適切で特に附錄は便益多かるべし。此著の如きは目下の宗教を知らんとする一般人士に寄與すること少からざるを信ずるのである。

スマイルス五大著書

▲穩健着實の大教訓▲德性涵養の好讀本▲獨立自營の活模範▲名士感化の原動力

職分論　金壹圓五拾錢　郵稅十二錢

品性論　金壹圓五拾錢　郵稅十二錢

勤儉論　金壹圓貳拾錢　郵稅十二錢

自助論　金壹圓五拾錢　郵稅十二錢

勞働論　上卷金五拾錢　郵稅六錢

版元　東京巣鴨町上駒込二十番地　振替貯金東京三百五十五番　內外出版協會

下中芳岳和譯

通俗言志四錄

定價金五拾錢　郵稅六錢

▲西鄉南洲の愛讀書

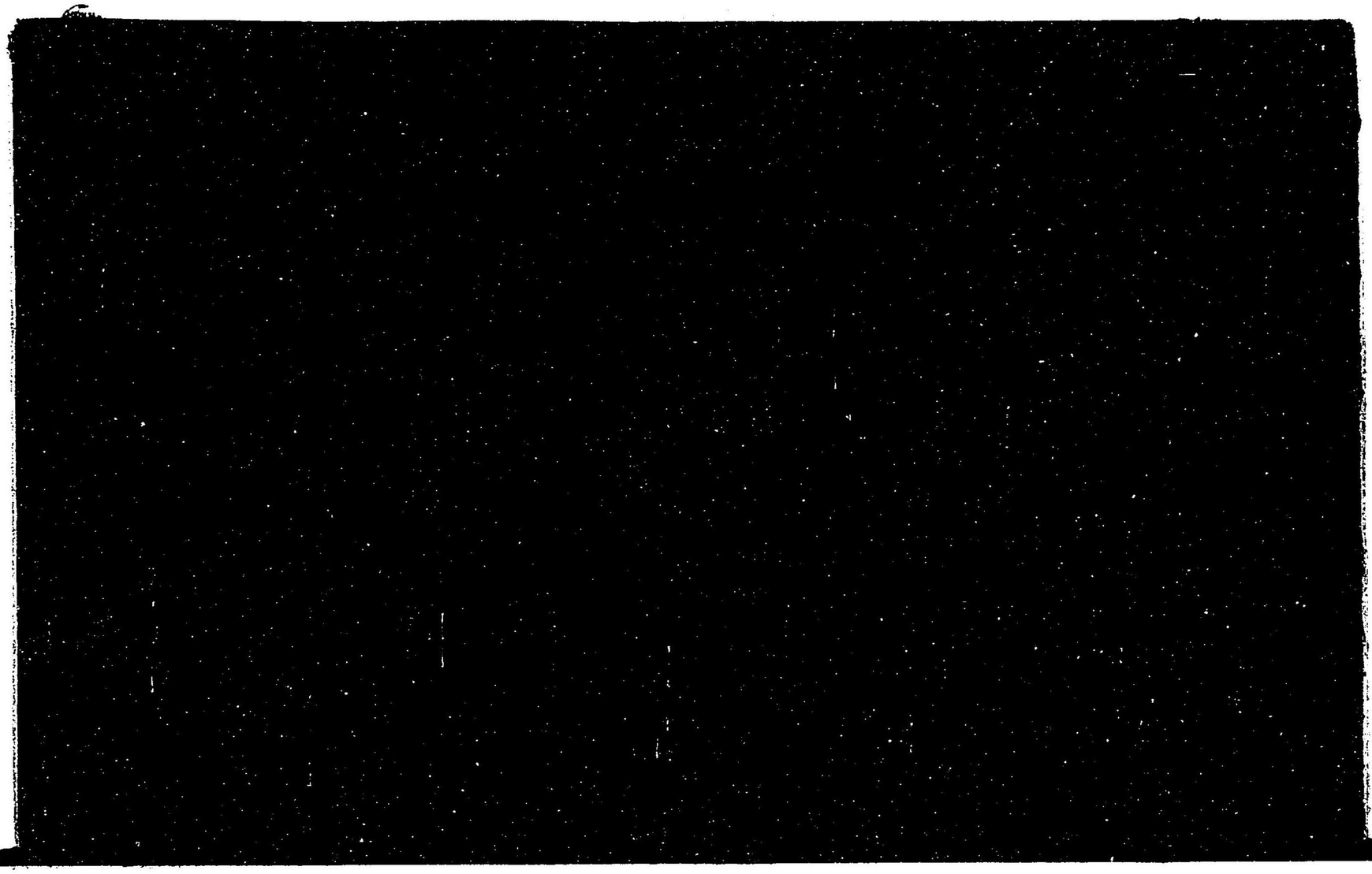
言志四錄は幕末の碩儒佐藤一齋先生の著にして、主として陽明學の見地より處世修道の極致を道破したるもの、其の特色は東洋道德に宗教的色彩を與へたる點にあり。聞く西鄉南洲は、常に此の書を愛讀して自己修養の金科玉條となしたりと。巽軒井上文學博士は、其の著『陽明學派の哲學』中に曰く、「佐藤一齋の言志四錄は、吾が邦人の語錄中白眉と稱すべきものなり。唯その文辭簡勁、卒讀しては意味の解し難きものあれど、再讀翫味以て自己の經驗に徵すれば、眞味湧くが如きものあるを覺ゆ」と。本書は此の名著を廣く江湖に薦めんが爲めに、平易簡明なる口語文を以て原文の眞意を譯し、且つ上欄に原文をも併せ掲げて對照に便したるもの、讀み易く解し易き修養書として最も適當なるべきを信ず。

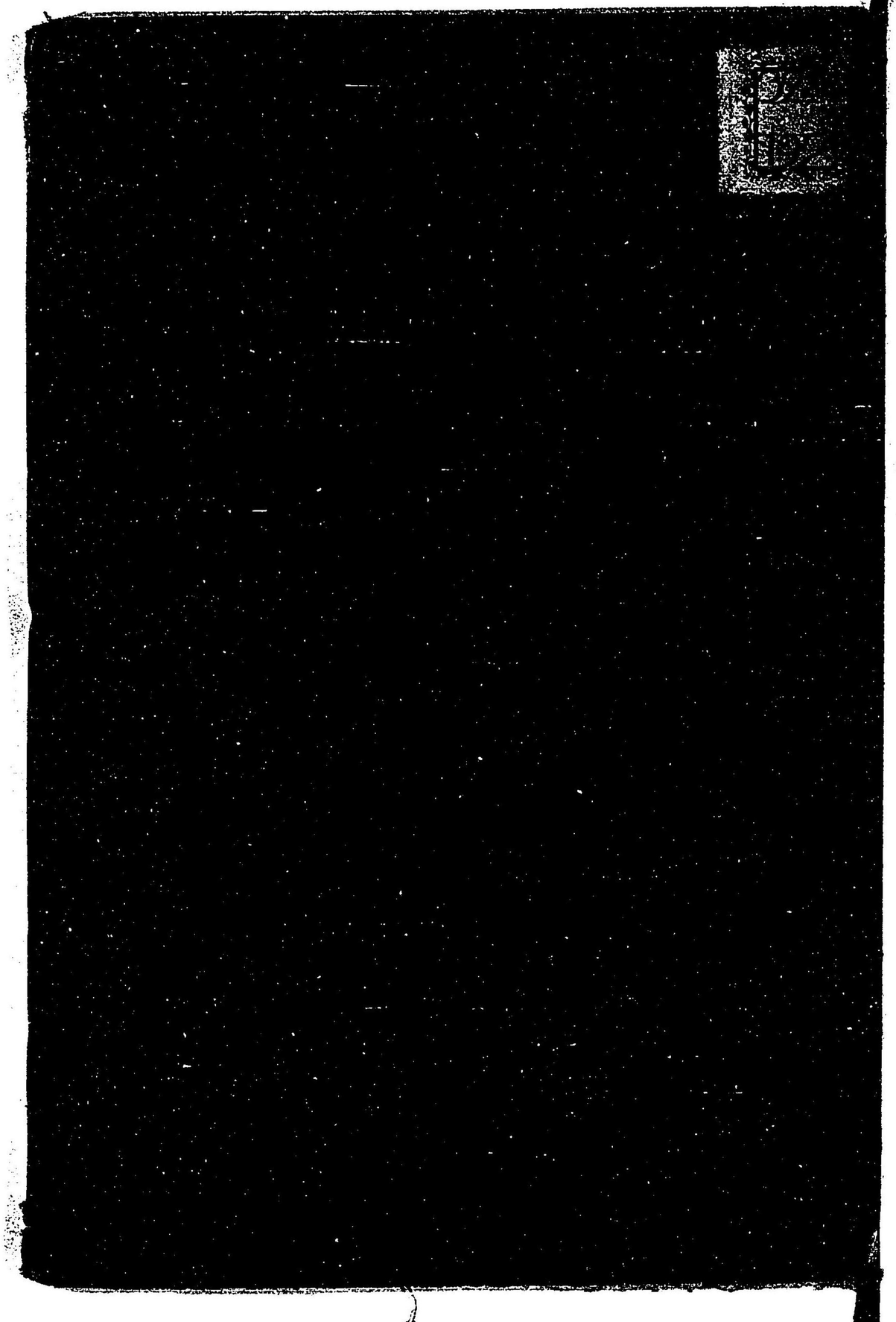
▲邦人語錄中の白眉

出版元　東京振替口座東京三百五十五番　東京鴨巣町上駒込二十番地

內外出版協會

324
192





020044-000-6

324-192

日蓮上人

大屋 徳城／著

M43. 7

ABH-0239